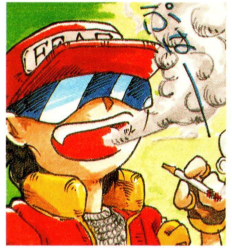


●山本　剛（やまもと　つよし）

8月7日茨城県生まれ。気鋭のゲームデザイナー集団F.E.A.R.に所属。TRPGのデザインやライティングを中心に活躍中。主なゲームに『創聖記エルジェネシス』（ゲーム・フィールド）がある。趣味はスポーツをすること。特に好きなのが、アメリカンフットボールと格闘技。

©COMPILE
キャラクター©SEGA ENTERPRISES,LTD.

カバーイラスト／壱
カバーデザイン／小林博明（K Plus artworks）

S
56-10
Y520

山本　剛
超☆魔導物語2
でいてくしょん・あっと・ぷよぷよダンジョン!!
角川スニーカー文庫

ISBN4-04-415610-7
C0193 ¥520E
定価：本体520円（税別）

『わくわくぷよぷよランド』で突如起こったサタン殺人事件。状況から考えてまっさきに疑いをかけられたのは、なんとアルル、ルルー、シェゾの三人だった！　事件勃発とともに現れた、誰かさんにそっくりの謎の探偵と相談した結果、自分たちの無実を証明するべく三人は各アトラクションに調査に出発した。サタンを殺した真犯人は？　“すっごい魔法のアイテム”の行方は!?　初の本格ミステリ（？）風“超★魔導物語2”開幕！

スニーカー文庫☆山本　剛の本　(99.7)

魔導物語	Ⅰ～Ⅲ
新☆魔導物語	1～3
超☆魔導物語	1,2
クロックワーク	1,2

カバー　暁印刷

超★魔導物語 2

でぃてくしょん・あっと・ぷよぷよダンジョン!!

山本 剛

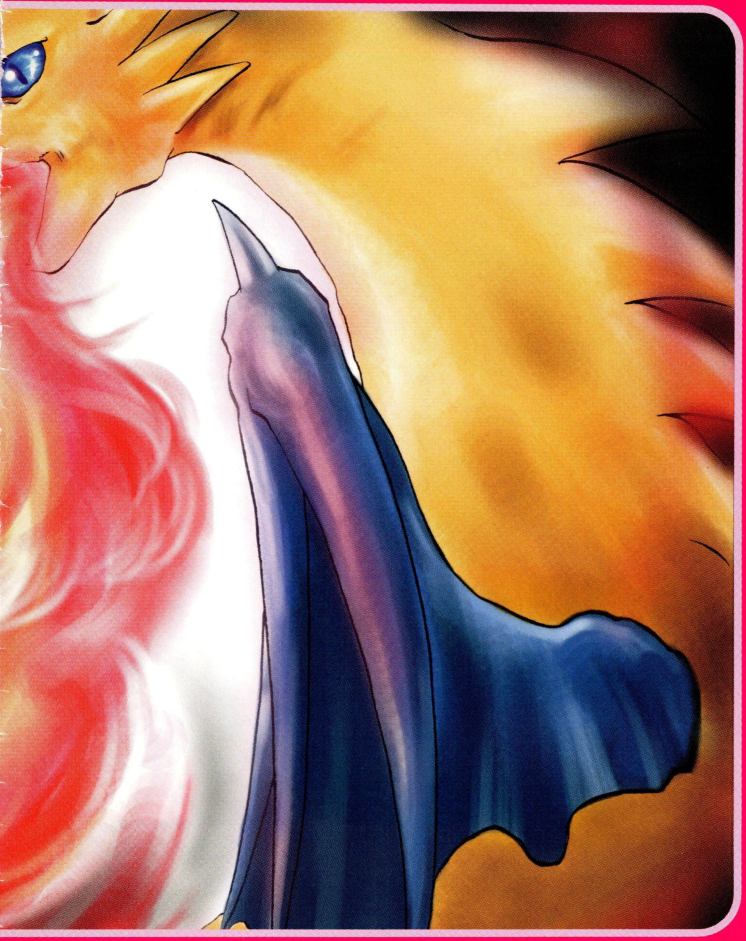
角川文庫 11115

超★魔導物語 2 でぃてくしょん・あっと・ぷよぷよダンジョン!!
山本 剛
角川文庫
11115

「そう……、そうよね……” サタン様はもう死んでしまったんだものね……」
がっくりと肩を落とし、ルルーはその場に座り込んでしまう“

超★魔導物語2

でぃてくしょん・あっと・ぷよぷよダンジョン!!



「キシャ――――――――――ッ!!」
　ドラゴンは「もう我慢できない」とばかりに咆哮をあげた。
そして、ルルーたちに向かって猛烈な炎を吐く。

アルルの発した光の球は、モンスターたちには命中せず、
次々とすり抜けていく。そして、
あろうことかカーバンクルに大命中！

超★魔導物語 2

でぃてくしょん・あっと・ぷよぷよダンジョン!!

山本 剛

角川文庫 11115

目　次

プロローグ　5
“キキとブラキのあらすじコ〜ナ〜★”

どきどきコース　11
“トモダチって……”

ホラーハウス　89
“そして蠢く魔女の影……”

ワンダージャングル　151
“犯人は……!?”

エピローグ　225
“実はまだまだ終わらない”

あとがき　230

口絵・本文イラスト／壱

プロローグ

"キキとブラキのあらすじコ〜ナ〜★"

「こんにちはっ！　キキーモラで〜す★」
「ブラックキキーモラだ。まぁ、よろしくな」
「やぁねぇ、もうちょっと愛想良くしなさいよ。せっかくの出番なのに」
「デッケェお世話だ」
「それはそーと、タイヘンなことになっちゃったわねぇ、アルルさんたち」
「何がだ？」
「ナニって、殺人事件に巻きこまれちゃってよ」
「誰(だれ)か、殺されたのか？」
「まさか、あなた知らないの⁉」
「知らん」
「あれ？　ブラックキキーモラは出演してなかったんだっけ？」
「何にだ？」
「ほら、『超★魔導物語　うぇるかむ・とぅ・ぷよぷよダンジョン‼』よ。この本の前の巻」
「ああ、そういえば」

「あなたねぇ、自分の出てる本の内容くらい覚えておきなさいよ」
「っってもオレは最後にちょろっとしか出てねぇからなぁ」
「だけど今回は出番がたくさんあるんでしょ？」
「さぁな」
「前巻のパターンで行けば、あなたのいるアトラクション〝ホラーハウス〟に誰かが来るのは確実じゃない。アルルさんかルルーさんか、シェゾさんか……。誰が〝ホラーハウス〟に行くことになるかはわからないけど」
「シェゾって、あの〝闇の魔導師〟か？」
「そうそう」
「アイツは来たがらねぇだろう。〝ホラーハウス〟は闇属性の連中が多いんだ。アイツの闇系呪文は、ほっとんど効かんぜ」
「でもわからないわよ。彼ってけっこう意地っぱりさんだから、行かざるを得ない展開になっちゃったりしたら……」
「それはそうと、前巻のパターンってなんだ？」
「前巻『超★魔導物語　うぇるかむ・とぅ・ぷよぷよダンジョン!!』はね……」
「長ぇタイトルだな」
「そんなコトいわないの！　今回はもっと長いんだから」

「ただでさえ、〝2〟でひと文字増えてるしな」
「それはともかく、前巻はアルルさん、ルルーさん、シェゾさんの三人が、〝ぷよぷよダンジョン〟のわくわくコースと、〝ファイヤーマウンテン〟〝ウォーターパラダイス〟〝スターライトステージ〟の四つのアトラクションをクリアしたところで終わってるの」
「確かに〝わくぷよランド〟のアトラクションは、それだけじゃねぇな」
「でしょ？」
「だが、殺人事件が起きたって、お前さっきいわなかったか？」
「そーなのよ大変なのよ！　園長さんが何者かに殺されちゃったのよ！」
「園長って……サタンのことか？」
「そう！」
「んじゃあなおさらじゃねぇか。そんな事件が起きちまっちゃぁ、アトラクションどころの騒ぎじゃねぇだろう」
「ところが、そうでもないのよね」
「どういうことだ？」
「状況から考えて、事件の犯人はアルルさんかルルーさん、シェゾさんしかいないの。わたしはあまり信じたくはないんだけど……」
「三人の共謀ということか？」

「それはわからないわ。三人のうちの誰かひとりがやったのかもしれないし」
「そのメンバーなら、シェゾがイチバン怪しいな」
「でも、彼はやってないっていってるわ。残りのふたりもだけど」
「まぁフツー、『人殺ししました』っていうバカはいねぇな」
「そこでね、事件のことを調べに来た探偵さんが、捜査に協力するよう三人に提案したの。自分の無実は自分で立証しろってね」
「しかしそれじゃあ、もし三人のうちの誰かが犯人なら、みすみす証拠隠滅の時間を与えちまうんじゃねぇの？」
「本当にそうかどうかは、ここから先を読めばわかることよ」
「なるほど。お前、まとめ方がうまいな」
「どういたしまして」
「これで、前巻のあらすじ紹介は終わりだな？」
「そうね」
「ここまで読んでわかんなけりゃ、前の巻をキッチリ読み返しな！」
「そんな高飛車にいわないの！　あなただって覚えてなかったんだから」
「うるせぇな」
「とにかく……では本編をお楽しみくださいね★」

「しかしサタンは本当に死んだのか？　怪しいもんだぜ……」

どきどきコース

“トモダチって……”

一　悲しみの一夜が明けて……

――「あたくしはまだ信じられないわ……！」

　ギィッ……！
　と、木製の椅子がかすかに悲鳴を上げた。探偵が居住まいを正してその身体を背もたれにあずけ、無慈悲にも地獄の責め苦を椅子に与えたのである。しかし、それが椅子の役目であり、彼の存在意義。椅子の軋みは、その無間地獄への、せめてもの抵抗なのだろうか……？
『さて……』
　ふとそんなことに思いを馳せながら、探偵は口を開いた。そして、意識を椅子から周りに移す。視線の先には、探偵の一挙手一投足を固唾を飲んで見守っている四組の眼があった。春の陽光のような穏やかな声で探偵が続けるのを、皆じっと待っているのだ。
『………』
　すらりとした長い脚を組んで深々と椅子にもたれ、パイプをくゆらせながら、探偵はサングラス越しにゆっくりと一同を見渡す。
　しかし探偵は、事件の関係者を集めて「この中に犯人がいる」と謎解きを始めようというワ

ケではない。
『さて……』
次に彼の口から洩れたのは、実に探偵らしからぬ意外な言葉。
『これからどうしよう……？』
ガクッ★
探偵のややおどけた口調に、五人のうち八十パーセント——つまり四人——が〝緊張〟という操り糸がプッツリ切れたかのように頭を垂れた。
「どうしようではありませんわ、ルシファー先生！」
ガタン！
椅子を鳴らして、水色のドレスに身を包んだ美女が立ち上がった。
『ルルー君……といったか』
帽子とコート、すべてが黒ずくめの探偵はいう。
『何度もいうが私はルシファーなどという者ではないよ』
「では探偵さん」
ルルーは、「もうウンザリ」というふうに首を振りながらいった。いや事実、何度も同じセリフを聞かされていて、マジでもうウンザリなのだが。
巨大テーマパーク〝わくわくぷよぷよランド〟に起きた大事件とともに現れたこの探偵、事

件以上に謎だらけである。

革の手袋と腰までの長髪以外は、帽子も服もコートも真っ黒で、サングラスもかけているため正体を窺(うかが)い知ることができない。声の質は魔界の者特有の響きを持っているが、恐ろしげというよりもむしろ陽光のように暖かく、聞く者の心を安心させる。

この探偵、そして彼の助手と名乗る白髪の老人と出会った時からずっと、ルルー、アルル、そしてシェゾは疑念を抱いていた。その物腰、口調、探偵のエメラルド色の長髪、助手に至っては姿形がそのまんま、知人にソックリだからである。「もうとっくに正体はバレてるんだから、さっさとそんな変装なんかやめてよ!」といいたくなるほどに。

ルルーは何度もその旨を探偵たちに訴えたが、

『私はただの探偵だよ』

「ワシはその助手ですぞ」

とふたりは繰り返すばかり。身に覚えのない事件の犯人にされたかと思えば、さらにこのワケのわからない探偵の登場。ルルーのイライラがいっこうに収まらないのも無理はない。

「これからどうするかを考えるのは、あなたの仕事じゃありませんか? 名探偵さん」

心中のイライラをなんとか押し殺しながら、ルルーはいった。しかしどうがんばっても、言葉にトゲが出てしまう。探偵のもったいぶった物言いも、ルルーを苛(いら)つかせる原因のひとつだった。それがまたかつて師事していた魔導師ルシファーにソックリなのだが、あまりにショッ

キングな事件ゆえにそれを楽しむような気分ではない。
『確かにその通りだ』
果たして〝名〟か〝迷〟かわからない探偵は、気色ばむルルーとは対照的に、落ち着き払ってパイプをくゆらせながらいった。
『しかし、考えてもみたまえ。事件が起きたのは昨日で、今日からその捜査に乗り出すのだ。そしてキミたちは、理由はどうあれ、私とともに捜査をすることになった。いわば仲間だ。ルルー君、キミはその仲間に相談することすら許さないというのか？　探偵はかくも寂しい商売なのだな』
「そ、そうはいってないけど……」
普段のルルーなら、「そんなコトいってないでしょ！」と食って掛かるところだが、今日は逆に、さっきの威勢はどこへやらで、力なくうなだれて椅子に座りこんでしまった。
眼の前の探偵によく似た、かつて先生と呼んだ人物に諭されると、ルルーはいつもの強気な態度が消えうせてしまう。しかし今回ばかりは、まるで自分の存在意義を失ったかのような意気消沈振りだった。
「ひとつ断っておくが……」
そんなルルーの代わりに、銀髪の青年――シェゾ・ウィグィィが口を開いた。
「オレは、あんたの仲間になった覚えはないぜ。ひとりで捜査するよりマシだと思ったから、

ここにいるだけだ。オレは自分の疑いさえ晴れればそれでいい」

と腕を組んで椅子にふんぞり返り、威圧的に探偵を睨む。闇の古代魔法を究めた悪の魔導師ならではの突き刺すような視線だが、それにあっさりと気圧されるような探偵ではない。

『単に利害が一致するからここにいる、というのだろう？　キミがそう思うならそれでいいさ。私は止めやしない。キミが私の捜査に協力してくれる限りはね』

「あんたがさっさとオレの疑いを晴らし、このクソくだらん状態を戻してくれるなら、いくらでも協力してやる」

『ならば、少しはアイデアを出して欲しいものだな』

「あ、あのー……」

探偵とシェゾの刺々しい応酬の中に、また別の声がおずおずと割って入った。見ると、この場に居合わせた者たちの中で最も幼い亜麻色の髪の少女が、これまた所在なげに手を小さく上げていた。

「ルシ……じゃなかった探偵さん、提案があるんですケド」

『アルル君、だったね？　どんな提案かな？』

先ほどのシェゾとのやり取りとは打って変わって、探偵は春の陽光のような暖かさで応える。

「とりあえず、手分けして聞き込みをしたほうがいいんじゃないですか？」

『やはり、まずは正攻法で攻めるしかないかな？　では諸君、早速で悪いが手分けをして聞き

込みをしてきてくれたまえ』
「探偵さんは？」
『私は、ここでキミたちが情報を持ち帰るのを待つ。……おっと、ズルイと思わないでくれ。私は頭脳労働専門なのだからね。これが役割分担というものだよ』
「ワシはその助手ですぞ。おまけに最近、とみに足腰が弱くなって……」
探偵の後ろに控えていた老人助手がいう。
『それに、私が直に動いてしまったら、面白くないじゃないか』
「どっかで聞いたようなセリフだなぁ……。まぁいいや、行ってきまーす！」
とアルルは元気良く席を立ち、さもメンドくさそうにシェゾがそれに続く。
『ひとつだけ注意してくれ。お客さんがパニックを起こすといけないので、この〝わくぷよランド〟は通常どおり営業している。くれぐれも仕事の邪魔にならないようにしてくれ。もちろん、お客さんに事件のことを気づかれないようにな』
「………」
一番最後に席を立ったルルーは、探偵の呼びかけに「こんな大事件が起きているのに、どうして営業なんかしてるの？　それ以前にあたくしもお客さんなんだけど……」と感じながらも、問いかける気が起こらないまま、〝緊急対策本部〟を後にした……。

二　とりあえず聞き込みに出てみたけれど……

――「この先、あたくしはどうしたらいいの……？」

「ルルー様、どうします？」
インフォメーション裏手に設えた小屋の扉を後ろ手に閉めながら、牛頭人身のモンスターにしてルルーの忠実なる下僕、ミノタウロスが問いかけた。ちなみにこのホッタテ小屋が、探偵たちのいる〝緊急対策本部〟である。
「ルルー様？」
「…………」
しかしルルーは、ミノタウロスの前でぼぉーっと突っ立っているのみで、彼の言葉に毛ほども反応する様子を見せない。
実のところ、昨日のあの大事件が起きてからというもの、ルルーはずっとこんな調子だった。さっき探偵にツッコミを入れた姿を見て、少しは元気になったのかとミノタウロスは安心したのだが……。
「ルルー様、お気を強く持たねばなりませんぞ！」

探偵助手によく似た、ルルーの執事の〝じい〟のような口調で、ミノタウロスは主人を元気付けた。

「あたくし……」

ミノタウロスの言葉に反応したのか、ルルーはようやく声を漏らした。しかしそれは、ミノタウロスのセリフに対する返答ではない。

「あたくし、これからどうすればいいの……？」

「ルルー様……」

「サタン様が死んじゃって、あたくしには生きる望みも何もないわ……」

一方的ではあるが、ルルーの思い人であり魔界の実力者でもあるサタンは、いまルルーたちが訪れ、そして大事件に巻き込まれた〝わくわくぷよぷよランド〟の園長だった。

「いっそのことあたくしも……。そうすれば、あの世でサタン様と一緒になれるかも……」

「それだけはいけません!!」

そう叫ぶと同時に、いつもは彼女の後ろに控えているミノタウロスが、自らの意思でルルーの前に躍り出た。そして宙を彷徨(さまよ)うルルーの視線に、ムリヤリ自分の大きな顔を重ねる。

「ルルー様！　それだけは絶対にいけません!!　そんなコトされたら、じいもオレも生きてる意味がありません！　アルルやルシファー先生だってきっと哀しみます！」

「それに、ルルー様がそんなコトをしたって、サタン――様は喜びませんよ！」
「…………」
サタンというキーワードに反応し、おぼろげなルルーの視点が、ミノタウロスの顔にピタリと合った。
「ルルー様の手でサタン様を殺した犯人を暴き出して、そいつにそんな大それたコトをしたのを後悔させてやるんです！　そのほうがルルー様らしいし、サタン様だってきっと草葉の陰で喜んでくれるはずですよ」
「ミノタウロスやって」
「は……？」
「犯人探しとお仕置きはミノタウロスに任せるわ」
「なぜです？」
「あたくしはこれから、サタン様のところに行くから……」
「……!!」
バッシィ――――ンッ!!
あまりにネガティヴなルルーの発言に、ミノタウロスは思わず手を出してしまった。いきな

り噴き出した哀しい気持ちが、怒りとなって現れてしまったのである。

誰でも、死んでしまったらそれで終わりだし、ましてや自らそれを断つことほど罪なものはない。何故ならば、後に残った者を酷く哀しませることになるからだ。確かに事件はいつもはポジティヴなルルーをこれほどまでに落ちこませるほど大きなショックを与えたのだが、生きてさえいれば必ず良いと感じる事も起きる。それを何故わかってくれないんだ！　というミノタウロスの気持ちが平手打ちとなって現れてしまったとしても無理はない。

「ルルー様！　大丈夫っスか⁉」

ようやく噴き出した激情から覚めたミノタウロスは、自分の仕出かしたコトに気づいて慌ててルルーの前にひざまずいた。

「すいません！　しっかりしてください‼」

ルルーは真っ赤に腫れた頰を押さえてその場にくずおれている。丸太のような腕から繰り出されるミノタウロスの平手打ちを食らえば、大抵の人間は大きく吹っ飛ぶ。しかしルルーの悩ましい肉体には、一流の格闘家としてのパワーが眠っている。ダメージはゼロではないが、そう簡単に吹き飛んだりはしない。

「ルルー様！　痛みませんか⁉　口の中切ってませんか⁉」

おたおたするミノタウロスの前でくずおれているルルーは、いつになくかよわかった。

「…………」

ゴクリ……。

慌てるのをピタリと止め、思わずミノタウロスは唾(つば)を呑(の)みこんだ。正確には、喉(のど)まで出かかった言葉を呑みこんだ。

「オレではダメなのか？　サタンの代わりにならないのか？」

という、いってはならぬ言葉を……。

ミノタウロスは、好きでルルーの従者をしているワケではない。……というか、ルルーに多大なる好意を抱いているからこそ、そばにいるのだ。

ルルーとそのような関係になって、もう何年も経つ。実のところ彼女のほうもミノタウロスの気持ちに薄々でも気づいているはずだが、ルルーのほうから告白を促したり、ミノタウロスのほうから自身の思いを伝えたことは一度もない。ミノタウロス自身としては、ルルーのそばにいる限りいまの立場で充分に満足だし、それよりもなによりも、告白をすることでその関係が壊れてしまうことが怖かった。

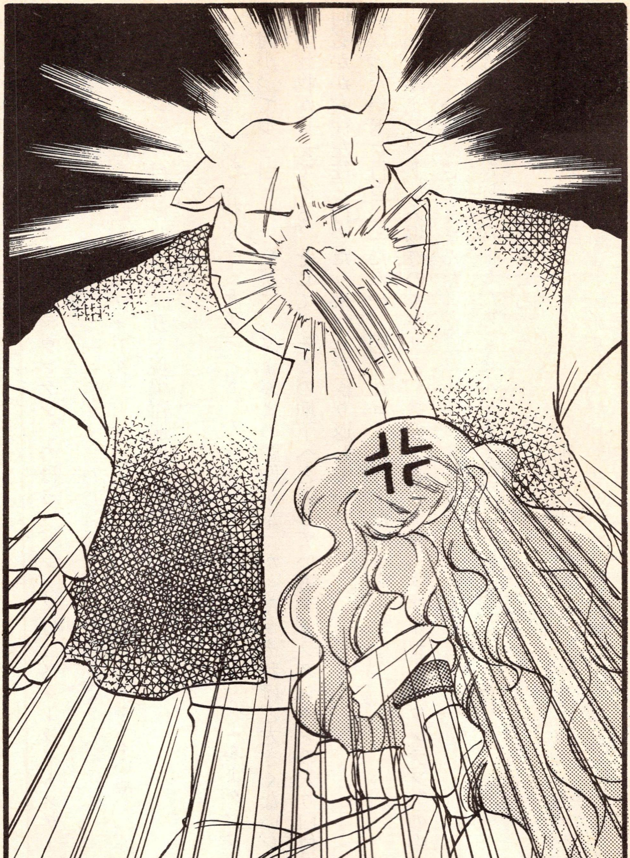
確かに、「いまがチャンスだ！」と内なる心はささやいている。しかし、そのような無粋な真似はミノタウロスのプライドが許さない。その内なる葛藤(かっとう)を、ミノタウロスは唾とともに呑みこんだのだった。

「ミノタウロス……」

「は、はいぃっ!!」

出し抜けにルルーから声をかけられて、ミノタウロスは思わず硬直した。自分の心の動きが読まれたかと思ったからだ。
しかし、それはまったくの杞憂だった。
「ミノタウロス……」
「な、なんでスか!? ルルー様!?」
「ご主人様のあたくしに……!」
「は……?」
「なぁんてことすんのよっっっっ!!」
バキィッ!
「ぶも――――――――っ!!」
いきなり顔面にパンチを食らい、ミノタウロスは後ろに大きくのけぞった。頑強な肉体を持つ彼が、いかな実力者とはいえルルーの正拳で体勢を崩すことはそうそうないが、不意打ちを食らってしまってはどうしようもない。
「あースッキリした」
「る、ルルー様……」
鼻っ柱を真っ赤にして尻餅をついているミノタウロスを尻目に、ルルーは立ち上がった。そ

して、ドレスや手についたホコリをパンパンと落とす。
その顔は、昨晩までの泣き腫らしたものでもなく、さっきまでの生きる希望を無くしてしまった虚ろなものでもなく、いつもの格闘女王様のものだった。……左の頰がやや赤く腫れているが。
「ありがとうミノタウロス、あなたのおかげで眼が覚めたわ」
「ルルー様……」
「だけど、今度あたくしに手を上げたら……」
女主人は従者をギッ！　と睨みつける。
「パンチだけじゃ済まさないわよ……!!」
「は、はぃぃ……!!」
「わかったらさっさと立ちなさい。サタン様を殺した犯人をぜぇ〜ったいに見つけて、究極女王乱舞をお見舞いしてやるんだから！」
「わ、わかりました」
いつものルルーに戻って嬉しいという気持ちと、鼻っ柱の激痛の両方を味わいながらミノタウロスは大きな身体を起こした。
「で、あたくしたちはどこに行けばいいの？」
「わかりません。探偵は聞き込み操作をしてこいとしか……」



「アルルたちは？」
「確か、アルルは〝ファイヤーマウンテン〟のほうへ、シェゾは〝スターライトステージ〟へ向かったようですが」
「じゃあ、あたくしたちは〝ウォーターパラダイス〟に行こうかしら？……いや、〝ぷよぷよダンジョン〟のほうにしましょう。現場百遍というヤツね」
「ぶも」
ふたりは、〝わくわくぷよぷよランド〟のメインアトラクション、〝ぷよぷよダンジョン〟に向かって歩き出した。やがて、ぷよぷよの彫像が乗っかった、それほど大きくないレンガ造りの建物が見えてくる。そして、そこの地下へと通じているアトラクションの入り口付近で、何者かが右往左往と行ったり来たりを繰り返していた。
「いったいドコ行きよったんや、困ったコトになったでぇ……」
〝わくぷよランド〟入場券のモギリと、アトラクション〝ファイヤーマウンテン〟の中ボスを兼任している、さそりまんだった。
「あ〜〜、いったいどないしたらええんや……」
「どうしたの？　こんなところで」
通行の邪魔とでもいいたげにさそりまんの前で仁王立ちになり、ルルーは声をかけた。
「実はな、モギリの仕事を手伝わせとったドラゴンが、いきなりいなくなってしもうたねん」

「ドラゴン？」
誰もが知ってるドラゴンといえば、恐竜のような大型のモンスターだ。
「そのドラゴンが、何でモギリなんかしてるワケ？」
正確には、「どうやって？」である。背丈も横幅もミノタウロスの二倍はゆうにあるドラゴンが、その鋭い爪を使ってモギリをしている姿をルルーは一生懸命に想像してみたが、結局ビジュアルは浮かんでこなかった。
「んなコトはともかくやな」
さそりまんの言葉で、ルルーは無駄な想像力の行使を停止させる。
「ドラゴンがおらんと、モギリの仕事がどうにもならへんねん。これから夜の部目当ての客がぎょーさん来る頃やっちゅうのに……」
「夜の部……？」
ふと、ルルーは辺りを見まわした。確かに、陽が西に傾き始めている。午後のティータイムという頃合か。
〝わくぷよランド〃入場のときにもらったパンフレットで、ライトアップされたアトラクションを楽しむ〝夜の部〃があるのをルルーは知っていた。魔法的立体映像に映っていた星のようにキラキラと輝く〝スターライトステージ〃が、やたらキレイだったのを覚えている。サタンと一緒に訪れることができたらさぞかし楽しいだろうと考えたのだ。

しかし……。

「まさか……！」

ぐいっ！

くじけそうになるのを必死で堪え、それを怒りに変えてルルーはさそりまんの胸倉をひっつかんだ。

「ドラゴンがサタン様を殺した犯人なんじゃないでしょうね⁉」

「そ、それはわからんがな！　せやけど、ドラゴンにはあんな手の込んだコトでけへんで」

「それもそうね。……でも、このタイミングで姿を消したというのが気になるわね」

「誰かにそそのかされて共犯してるのかもしれへん。それを考えると心配で心配で……」

「あなたが本当に心配なのは、モギリの仕事のことでしょ？」

「キレイな顔して、あんたもキッツイこといいまんなぁ。……その通りなんやけどな」

「わかったわ。あたくしがドラゴンをみつけて、サタン様殺しに関係あるのかどうか白状させてやるわ！」

「そ、それはカンニンや！　あんたにギッタギッタにされてもうたら、モギリの仕事させられへんがな。お願いやから、ドラゴン見つけたら無事に連れて来てぇな。その代わり、ええもんあげるさかいに」

「いいもの？」

「事件の情報とかやないんやけどな、きっと捜査に役に立つはずやで」
「わかったわ。とりあえず可能な限りそのまま連れて行くって約束するわ。……ドラゴンの出方次第だけどね」
「なんか不安ないい方やが……まぁええわ。ほな、頼みましたで。ワテはモギリの仕事に戻ってますさかいに」
　というが早いか、さそりまんは安心したのかスタコラと〝わくぷよランド〞正門のほうに消えて行ってしまった。
「ミノタウロス、あたくしたちも行くわよ。まずはドラゴンを見つけて、サタン様を殺した犯人かどうか突き止めるのよ」
「ぶもー！」
　もう大丈夫だ、いつもの主人に戻ったと安心しつつ、ミノタウロスはビシッ！　と敬礼をしてルルーに応えた……。

三　ドラゴン探しはいいけれど……

——「デジャヴ……？」

園内を、あてがあるのかないのか、ブラブラしているルルーの背中に、ミノタウロスは声をかけた。
「ルルー様、どうします？」
「さっき、どこかでおんなじセリフをいわなかった？」
スタスタと歩きながら、振り向きもせずにルルーが応える。
「そういえば、いったかも……」
「で、あたくしたちはどこに行けばいいの？」
「ルルー様、それさっきいいましたよ」
「あら、そうだったかしら」
「それに、どこに行けばいいのかなんて、オレにはわからないっス。ルルー様が何か目的があるんじゃないかと思ってたんですが……」
「失礼ね、目的ならあるわよ。あえていうなら、〝犬も歩けば棒に当たる作戦〟ね。こうして

あてもなくブラブラしながら、手がかりがぶつかってくるのを待ってるってワケ、おわかり？」
「しかし、誰かに聞いたほうが効率的じゃありませんか？　犯人はおまえか？　って聞くよりはやりやすいでしょうし……。人ならいくらでもいるし、誰かひとりくらい手がかり持ってるヤツがいるんじゃないスか？」
「そうねぇ」
ド派手なアトラクションが立ち並ぶ〝わくぷよランド〟内は、時間的な関係も手伝って、大盛況というほどでもなければ閑散としているわけでもなかった。アトラクション間を走り回っている修学旅行かなにからしい子供たちの群れも見えるし、広場のベンチでひと休みしているカップルや家族連れの姿もチラホラとうかがえる。
「だんだん、あたくしもそうしたほうがいいような気がしてきたわ」
「どうします？　ルルー様」
「とりあえず、インフォメーションに行ってみましょう」
「ぶも」
ふたりがインフォメーションに到着するなり、案内役のキキーモラがルルーたちを手招いた。
「ちょっとちょっと、おふたりさん……」
「なに？　キキーモラ」

「いいから、ちょっとちょっと……！」
ささやくような声で、インフォメーションの部屋の端っこでキキーモラが呼んでいる。
「なんなのよ」
ルルーたちがそこに行くと、キキーモラは辺りを見まわしてインフォメーション内に他に誰も居ないことを確認してから、ようやく口を開いた。
「あのね、わたし見ちゃったのよ」
口調がなんとなく井戸端会議のオバさんである。
「なにを？」
「ドラゴンが〝ぷよぷよダンジョン〟に入っていくのを……！」
「なぁんですってぇ!?」
「しーっ！　大きな声出さないで！　これはまだ誰にも話してない情報なんだから」
「ごめんなさい。……ドラゴンがダンジョンに入って、それから？」
「それから、ダンジョンの下のほうがやたら騒がしいのよ。ドラゴンの鳴き声のような、笛の音のようなのが聞こえてきたりして……。たぶん、地下四階以降の〝どきどきコース〟ね。あそこが怪しいわ」
「いわれてみれば確かにそうかもしれないわね」

と、ルルーは事件の様子を思い出しながらいう。そのたびに哀しい気持ちが噴き出してくるが、そんな感情の奔流に身を任せている場合ではない。
「サタン様は四階への階段のところで死んでたわけだし……」
「でしょ？」
「わかったわ、キキーモラ。とりあえずダンジョンに行ってみることにするわ」
「ダンジョン内はちゃんと機能してるから気をつけてね。モンスターも今までとは違って、格段に強くなってるし」
「ありがとう」
戦って身体を動かしたほうがイヤな気持ちもスッキリするかもしれない、そのほうが自分の性に合うし……と思いながら、ルルーは〝ぷよぷよダンジョン〟に向かうべく、インフォメーションを後にした……。

四　再び〝わくわくコース〟にて

——「どうやら、一筋縄では行きそうにないわね……」

メインアトラクション〝ぷよぷよダンジョン〟は、パンフレットによるといくつかのコースに分かれている。その最も基本的なコースが地下一階から三階までの〝わくわくコース〟で、初めて〝わくぷよランド〟を訪れた者は、まずここをクリアしなければならない。ダンジョン内で手に入る金貨やアイテムも本物なら、モンスターやトラップも幻影ではないからである。まず初心者用コースで、ダンジョンの仕掛けやモンスターの強さに慣れておかないと、大ケガの危険性があるのだ。

〝わくぷよランド〟のアトラクションはすべて、一度クリアした後でも再挑戦することが可能になっている。つまり、次のアトラクションに備えてちょっと修行を重ねたり、高価なアイテムを買うためにお金を稼(かせ)ぐことが容易になっているワケだ。〝わくわくコース〟はいわば、そのためのアトラクションだといっても過言ではない。〝ウォーターパラダイス〟に挑戦していた頃、ルルーも何度となくお世話になった。

そして、大事件の直前に訪れた〝わくわくコース〟は、何事もなかったかのようにルルーを

迎え入れた。
「ひととおり回ってアイテムを拾いながら下に行くわよ。ちょうどいいウォーミングアップになるでしょうし」
「そうっスね」
などと軽口をたたきながら、ルルーたちはなんとなくオモチャの家を思わせるダンジョン内を進んだ。いまのルルーにとって、〝わくわくコース〟のモンスターはもはや敵ではない。
と……、
「ぷよぷよ～っ」
そこへ早速〝緑ぷよ〟が出現。
「じゃまよっ！」
「ぷよっ」
ルルーが正拳突きを見舞うと、緑ぷよは大きくのけぞった。そして、いつもならそのまま〝ばたんきゅ～〟となるはずなのだが……、
「ぷよ～っ！」
どかっ！
「きゃぁっ！」
あろうことか緑ぷよは体勢を立てなおし、ルルーにぷよぷよアタックを繰り出した。

「やったわね！」
お返しとばかりにルルーは再び正拳突き。
「うよよよぉ……」
その一撃で、緑ぷよはようやく〝ばたんきゅ〜〟した。
「ルルー様、大丈夫っスか？」
「大したことはないわ」
軽い打ち身を作った肩のあたりをさすりながら、ルルーは応える。
そこへ間髪入れずに、
「なんか文句あるんかー」
今度は大きなトカゲに乗った野生児――その名も〝コドモドラゴン〟が現れた。そしてルルーたちが身構えるよりも早く、トカゲが大きな口を開き……、
「ファイヤーじゃいやー‼」
ゴォォォォォォォォォォォッ……！
燃え盛る火炎を吐き出した。
「熱っ！」
「ぶもーっ！」

思わぬところで奇襲を食らい、ルルーたちはしたたか火傷を負ってしまった。しかし、すぐに立ち直って戦闘態勢を整える。
「やったわね！　水神掌!!」
「ぶも――っ！　一撃っ！」
ドッゴォンッ！
「なんしよんなーっ！」
ルルーとミノタウロスのダブル必殺技を食らい、コドモドラゴンは〝ばたんきゅ～〟。
「もしかして、敵が強くなってる……？」
ようやく落ちついたところで、額の汗をぬぐいながらルルーはつぶやいた。
「そうみたいっスね」
「まぁ、そのほうがこっちとしてはやりがいがあるんだけど……。だけど、アイテム探しをしながら下に行く、というのは無理そうね」
「やはり、どちらかに絞らないと」
「決めた！　今日は修行を兼ねてアイテム集めだけをするわ」
「でも、〝わくわくコース〟にはあまりいいアイテムはありませんよ」
「もしかしたら、アイテムの配置も変わってるかもしれないじゃない？　モンスターも強くなってるんだし。まぁ、どんなアイテムでも、売れば少しは足しになるでしょ？」

「わかりました」
「そうと決まればさっさと行くわよ。ドラゴン探しもしなきゃならないんだし、グズグズしてるヒマなんかないわ！」
「ぶも」
そしてふたりは、再びダンジョンを進み始めた……。

五　哀しみの現場

——「サタン様、見ていてください……!!」

次の日、ルルーは〝脱出口の巻物〟や薬品、食料を買い込んで再び〝ぷよぷよダンジョン〟に突入した。そして今回は、モンスターと可能な限り戦わず、アイテムに眼もくれずにひたすら次のフロアへの階段を目指した。

やがて、地下三階に到着。

ここにはボスキャラ〝スケルトンT〟がいたが、ルルーはすでに彼を倒して〝わくわくコース〟をクリアしているため、もうモンスターはいない。その代わりといってはナンだが、小部屋に続く三つの扉が開いていた。

ひとつめは、ルルーが昨日も通った地上への脱出口のある小部屋。

ふたつめは、〝共通チケット〟の入っていた宝箱があり、事件の発生後に犯人扱いされたルルーたちが押し込められた小部屋。

そして三つめが、事件の現場であり、地下四階へと続く階段のある小部屋である。

ルルーは、何故か恐る恐る三つめの扉をくぐった。

そこには確かに、下への階段と、人を象った落書きのような絵が横たわっている。頭と思しき部分に、角らしきものも描かれている。この絵が、〝わくぷよランド〟園長にして魔界の貴公子、そしてルルーの最愛の人サタンを示していることは明々白々だった。

「………」

ルルーはそれを見下ろし、唇と拳をギュッと結んだ。

哀しい思いをするから、できればここには来たくなかった。恐る恐る入ったのも、絵が消えていて現実でないことを示してくれればいいという淡い願いと、逆に絵を見て現実を再び突きつけられるのが怖い、という思いがあったからだった。

「る、ルルー様……」

彼女の後ろで、ミノタウロスが努めて優しく声をかける。しかし逆に、今はその優しさが、ルルーの感情をさらに高ぶらせた。

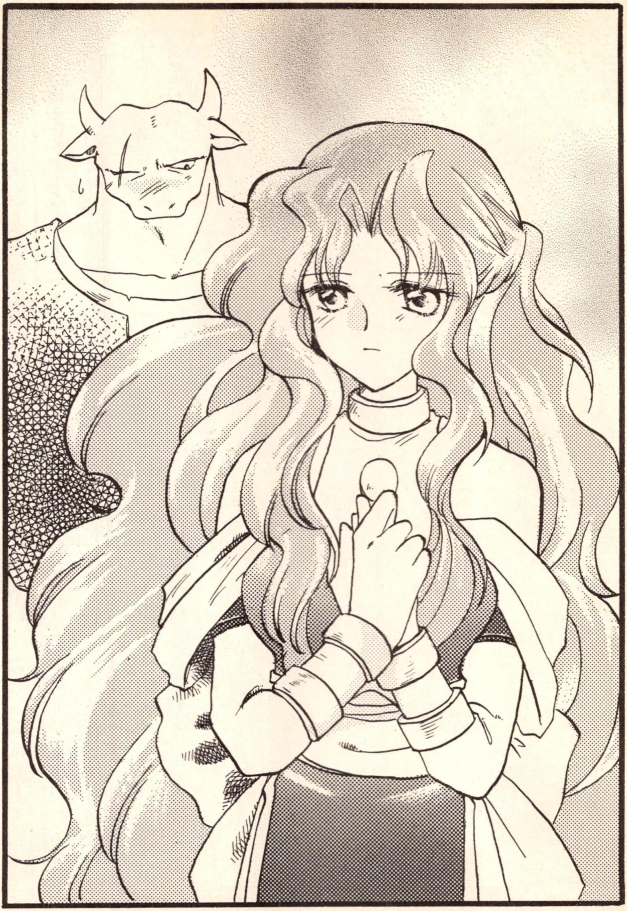
だが……！

「……!!」

ルルーはこぼれそうになる涙を必死で堪え、キッ！　と顔を上げる。

「ミノタウロス！」

「は、はいっ！」



「グズグズしてないでさっさと行くわよ！　こんなところで泣いてたら、お前らしくないってサタン様に怒られちゃうわ……！　一刻でも早くサタン様の仇（かたき）を討たないと……！」

最後のほうはややふるえていたが、それを隠すようにルルーはさっさと階段を下りた……。

六　そして〝どきどきコース〟へ

――「マスク・ド・サタン……？」

〝ぷよぷよダンジョン〟地下四階に入ると、それ以前とは明らかに様相が変わっていた。地下三階まで――つまり〝わくわくコース〟は、どことなく箱庭の牧場を思わせるような、のどかで牧歌的な雰囲気があった。四階から先、〝どきどきコース〟がどこまであるのかわからないが、全体的に重い雰囲気をかもし出している。床や天井は宵闇（よいやみ）を思わせる藍色（あいいろ）っぽい透明感のある素材でできており、壁の色合いはカラフルではあるが金属質な感じがする。それらが一体どのような素材でできているのかルルーにはわからなかったが、「ああ、深いところに来たんだな」という実感はアリアリとあった。

この四階以降は〝ファイヤーマウンテン〟〝ウォーターパラダイス〟〝スターライトステージ〟をクリアした証、赤、青、黄の三つのオーブがないと入ることができない。それがないと、先ほど通過した、三階にある階段――事件現場――の小部屋の扉を開くことができないのだ。つまり、かなりハイレベルなアトラクションだということである。

本来ならば、三つのオーブはそのすべてをひとりで集めなければならない。しかしなぜか、

ルルー、アルル、シェゾがそれぞれひとつずつ手に入れたところで、園長であるサタンから呼び出しを受け、そのまま事件が発生し、現在に至ってしまっている。そのため、ルルーがこの〝どきどきコース〟に挑戦するにはかなりのハンデキャップを背負っていることになるのだが、今からまだ行ってない〝ファイヤーマウンテン〟〝スターライトステージ〟をクリアしている余裕などない。

「…………」

ルルーはいつになく慎重に、地下四階を探索した。正規の手順を踏まずに来ているということを、百戦錬磨の格闘家としてのカンで察知し、警戒心を煽(あお)り立てているのだ。上の〝わくわくコース〟のモンスターですら、一撃で倒しきれないほどにレベルアップしているということが、ますますルルーを慎重にさせる。ここにいるモンスターは、さらに強いはず。

「…………」

「…………」

無言のまま、ルルーはひたすらダンジョンを進む。そのいつになく慎重な雰囲気に圧されて、ミノタウロスも終始無言。下への階段目指して、ズンズンと突き進む。

そこへ……、

ドォンッ！

突然、何かが爆発したような衝撃音がフロア中に響き渡った。
「な、なに……!?　今の音……!?」
思わずルルーは身を強張らせ、辺りを見まわした。まるでお化け屋敷にでもいるようなカンジである。
脚を止めてしばし耳を澄ませていると、
ドォンッ！　ドォンッ！
再び破裂音が響き渡った。しかも、今度は連続で。
「な、何が起きてるの……!?」
とルルーがつぶやくあいだにも、破裂音は何度も鳴り響いている。
「ルルー様、近づいてませんか……？」
耳をヒクヒクさせながら、ミノタウロスがいった。
「……？」
ドォンッ！　ドォンッ！　ドォンッ！　ドォンッ！
破裂音を注意深く聞いていると、確かに音は大きくなっている。
ドォンッ！　ドォンッ！　ドォンッ！　ドォンッ！
どんどんどんどんその音は近づいてきて、そして……、

ドッカァンッ!!

いきなりルルーたちのすぐそばの壁が爆発した。

「な、何……!?」

崩れた壁の破片が砂煙となって爆風のように舞い、ルルーとミノタウロスの視界をしばしさえぎる。

「斬(き)る!!」

その一瞬の間に、何者かの声が風斬り音とともにルルーに襲い掛かった。

「くっ!」

間一髪で、ルルーは見えない謎(なぞ)の一撃をかわす。

「うぬ、なかなかやるな?」

古風な口調で、いきなり襲い掛かった謎の声はいった。それと同時に砂煙が晴れてきて、視界が戻ってくる。すると、ルルーの前に何者かが仁王立ちになっているのがわかった。もちろんミノタウロスではない。

それは、和風のヨロイカブトに身を包み、日本刀を携えたモグラモンスター〝サムライモール〟だった。

「拙者の一撃をかわすとは、お主かなりの手練れと見た！　是が非でも拙者と仕合うていただく！」
「さっきのドカンドカンっていう音は、もしかしてあなた？」
「いかにも。拙者は壁を破壊しつつ、敵の予期せぬ方向からの太刀を旨とする」
「それって、タダの奇襲っていわない？」
「しかし戦の勝利は、奇策に奇策を重ねて摑むものではないのか？　お主も、ここまで来るのにきっとそうしてきたはず」
「た、確かに……。正論かも……」
「この先、拙者以上の奇策を使う者が目白押しだ。力押しの正攻法だけでは勝てぬぞ」
「まぁよーするに、あなたを倒せなければ、この先に進むのは到底無理ってことよね？」
「然り」
「ならば、ひと太刀ご教授くださるかしら？」
ざっ！
いいながら、ルルーはファイティングポーズを取った。
「その意気やよし！　参る!!」
サムライモールはカタナを構え、ルルーに突進。そして振りかぶったカタナを大きく振り下ろす。

「斬る！」
「その太刀筋はもう見切らせてもらったわ！」
とルルーはなんなく回避。
「今度はこっちの番よ！」
サムライモールの突進した勢いが死なないうちに、ルルーはカウンター気味に正拳突きをくりだした。
どふっ！
とニブイ音がしてサムライモールのみぞおち辺りにヒット。
しかし、
「お主の突きはこの程度か？　痛くもかゆくもないぞ」
サムライモールの表情は、ちっとも変わっていない。もともとあまり表情はないが。
「そんな拳では、拙者のヨロイはビクともせぬぞ」
「くっ……！」
「ヨロイを貫くほどの突きとは、こうするのだ！」
いうが早いかサムライモールは飛び退り、再びルルー目掛けて突進。
「突く!!」

カタナの切っ先が、矢のように直線を描いてルルーに襲い掛かる。

「ルルー様！」

カキィ――――ンッ！

既(すんで)のところで、サムライモールの突きはミノタウロスが繰り出した斧(おの)によって弾かれた。

「うぬ、ふたりがかりか」

「悪いけど、あなたひとりにずっとかまってるワケにはいかないのよね。ふたりがかりでも何でもして、さっさと終わらせていただくわ」

「まぁ、それも兵法のひとつよ」

サムライモールは再び飛び退り、体勢を整えてカタナを構え直す。

「参るがよい！」

「ミノタウロス！」

「ぶも――――っ！」

ルルーの号令に応じてミノタウロスが斧を大きく振りかぶり、渾身(こんしん)の力を込めて振り下ろす。

「一撃っ!!」

「うぬぅっ！」

ガッキィ――――ンッ!!

サムライモールはカタナでその重い一撃を受け止めた。が……、
「ぐぅっ……！」
あまりに強烈なパワーを無理して受け止めたため、衝撃に負けてひざをがっくりとついてしまう。
「ルルー様、今です！」
「ただの拳(こぶし)でダメなら、これならどう？」
いいながら、ルルーは右の拳に気合いを込める。
「はぁっ！」
ボォッ！
ルルーの拳に、気の力による炎が灯った。その拳を開き、サムライモール目掛けて渾身の掌底突きを繰り出す。
「炎神掌(えんじんしょう)!!」
ズドォンッ！
「ぐはっ！」
掌底がサムライモールの腹部にめり込み、炎が身体を舐(な)め尽くす。
「み、見事……」

黒コゲになったサムライモールは、バッタリと〝ばたんきゅ～〟。それと同時に、彼の懐からひと束の草がこぼれおちた。

「これは……？」

ルルーは拾い上げる。それは、これまでに見たことのない草だった。〝おいしい草〟のようなタイプとも、〝ごうてん草〟のようなタイプとも違う。

「なんでしょう？　この草は」

「ちょっと識別してみるわ」

草を両手のひらに載せ、意識を集中させた。

すると、〝気〟や〝魔力〟に似た不思議な力が草から手のひらを通じてルルーに流れ込み、あるビジュアルを頭の中に浮かび上がらせる。

それは、地中を掘り進むモグラの姿だった。そこでピンときたのは、ダンジョンの壁を壊して進むサムライモール……！

「わかったわ！」

意識集中を切り、ルルーはいった。

「これは〝もぐら草〟ね！」

「といいますと？」

「これを食べると、サムライモールみたいに壁が壊せるようになるはずよ」

「ずっとですか？」
「たぶん、一定の時間だけね。〝ふゆう草〟みたいに」
「なるほど」
「ちょっと、試してみようかしら」
ルルーは〝もぐら草〟をひと口かじった。すると、えもいわれぬシブさニガさがじんわりと口の中いっぱいに広がって行く。
正直にいって、マズイ。こんなものをミノタウロスはよく食べれるなと、草を食べるたびにルルーは思う。
「むしゃむしゃむしゃ……ゴックン」
それでもムリヤリ口の中に押しこみ、ルルーは〝もぐら草〟を飲みこんだ。といっても、身体に何か変化が起きたというカンジはしない。
「ホントにこれで壁が壊せるのかしら……？」
「ぶも」
ルルーは手近な壁の前に立ち、
「はあっ!!」
思いっきりパンチ。

ゴォンッ！

「痛ぁ――――――――――――――――――――っ!!」

ニブイ音が響くと同時に、ルルーは右手を抑えて飛び上がった。しかし、壁は壊れるどころかビクともしていない。

「ルルー様!!　だ、大丈夫ですか!?」

「何よこれぇ!?　壊れないじゃないの!?　これじゃあたくしの手が壊れちゃう……！」

『わはははははははははははははははははははははははははは……!!』

ルルーの悪態に重なるように、いきなり高らかな笑い声がフロア中を満たした。

『大丈夫かね？　そこなるお嬢さん』

「そ、その声は……!?」

非常に聞きなれた声に、ルルーは手の痛みも忘れて表情をパッと明るく咲かせた。

「サタン様!?　生きていらっしゃったのね!?」

しかしその喜びはもろくも崩れ去った。

『ブッブー、残念でした。私は困ったときのあなたの味方、人呼んで〝マスク・ド・サタン〃でーす』

「そう……、そうよね……。サタン様はもう死んでしまったんだものね……」

がっくりと肩を落とし、ルルーはその場に座り込んでしまう。
『す、すまん！　キミを落ち込ませるつもりはなかったのだ。許してくれ！』
ルルーのあまりの落ち込みように、マスク・ド・サタンと名乗る謎の声はちょっち狼狽。
『キミが困っていたようだから、ちょっとお手伝いして差し上げようかなぁーと……』
「で……？　サタン様の変態コスプレ仮面がいったい何の用なの？」
声を聞くのもイヤというトゲトゲしい雰囲気で、ルルーはいった。
このマスク・ド・サタンとは一度ならず面識があり、ルルーはいつも酷い目に遭っているのだった。……実際には酷いめではなく、いつも手助けしてもらっているのだが、姿形や声質が彼女の思い人とあまりに似ているために、ついヌカ喜びしてしまうのだ。それが、ルルーのいう酷いめである、その理由からルルーはマスク・ド・サタンが好きではなかった。
『うむ。実はな、〝わくぷよランド〟のダンジョンには二種類の壁があるのだ。例えばこのフロアを見まわしてみたまえ』
「……ホントだ」
声の示す通り落ち着いて見まわしてみると、確かに質の違う二種類の壁でフロアが構成されていた。一方は錆びたような色の金属質の壁。もうひとつはカラフルなブロック状の壁。いましがたルルーがブッ叩いたのは、前者のほうだった。
『この壁の違いは何かというと……』

「壊せるか、壊せないか、ってことね」
『その通り！　さすがはルル……いやお嬢さんだ。それを忠告しておこうと思ったのだ』
「だったら、叩く前にいってくれればよかったじゃない！　おかげで危うく右手を壊しちゃうところだったわ……！」
『ム!?　また誰かが私を呼んでいる！　ではまたどこかで会おう！　サラバ——イ！』
高笑いの余韻を残して、マスク・ド・サタンの声は消えていった。
「そうやって、すぐ都合が悪くなると逃げるんじゃないわよ！」
と叫んでみても、もはや返答はない。その代わりに、ミノタウロスが悪態をつく。
「まったく、油断もスキもならんヤツっスね。こんなところにまで顔を——というか声をだすなんて……。今度会ったらとっちめてやりましょう！」
「それより、本当に壁が壊せるのかしら……？」
いいながらルルーは立ちあがり、赤と黄色のカラフルブロック壁に近づいた。そして、ようやく痛みの引いてきた右手でそっと触れてみる。
するると……、
ドォンッ！
大きな爆発音とともに、ルルーが触れた壁は崩れ去った——いや、消滅した。

に消滅。
「へぇ～……」
ルルーは感心しつつ前進し、別のカラフルブロックに触れてみる。するとやはり、同じよう
「結構おもしろいわね」
興を覚え、ルルーは壁を壊しながらズンズンと進んでいった。
しかし突然、その脚を止める。
「どうしたんスか？　効果が切れましたか？」
「いやちょっと気になることがあって……」
「といいますと？」
「この壁壊しって、いったい何のメリットがあるの……？」

七　階段がないっ！
――「もう、どーなってるのよ……！」

「ムキ――――――――ッ!!」
　突然、ルルーが奇声を発した。
「いったいどーなってんのよっ!?」
「る、ルルー様、落ち着いてください」
「落ち着けるわけないでしょ!?　こんだけグルグル歩いてるのに階段がないんだから!!」
　ここは地下五階。
　ルルーたちは、このフロアをもう一時間以上も歩きっぱなしだった。もうこのフロアで探索していない場所などゼロである。敵もほとんど倒したたし、アイテムももう落ちていない。
　しかし、下への階段だけが一向に見つからなかった。
　いっくら探しても見つからないので、ついにルルーがキレたのである。
「ルルー様、腹が減りました。草食べていいっスか？」

「うるさいわね！　ちょっとは我慢なさい！」
「し、しかし、もう……」
「あたくしだってお腹ペコペコなのを我慢してるのよ！　お腹が空きました食べましたじゃ、あっという間に食べ物がなくなっちゃうでしょ⁉　階段だって見つかってないのに……！」
「ぶも……」
「どうしても我慢できないなら、あなただけ地上に戻りなさい！」
「そ、そんなぁ……」
「あたくしはまだ帰らないからね！　事件の手がかりどころか、ドラゴンだってまだ見つかってないんだから……！」
「…………」
　ミノタウロスはしぶしぶ、とりあえずポケットから取り出した〝ただの草〟を再びポケットにしまおうとする。
「……⁉」
　そこで、ピン！　と閃いた。
「ルルー様！」
「なによ⁉」

「ふと思ったんスが、もしかして壁を壊せば階段が見つかるんじゃないっスか？」
「そーいえば……」
ルルーは興奮をピタリと止め、その可能性について考え込む。
しかし、すぐに首を振って否定した。
「それはやっぱりダメね」
「なぜです？」
「いいアイデアではあるんだけど、〝もぐら草〟の数が足りないわ。このフロア中の壁を壊すには、一個や二個じゃとても間に合わないわよ。運良くすぐに階段が見つかればいいけど、それに賭けるにしてはちょっとリスキーね……」
ヒュンッ！
ルルーの言葉が終わるか終わらないかの瞬間に、矢がいきなり彼女の鼻先をかすめた。
「な、何!?」
慌てて矢の飛んできたほうを見ると、通路の角を曲がって壁の向こうに隠れようとしている人影が見える。弓矢を得意とするモンスター、〝アーちゃん〟である。
「また来たわね……!?　どーしてこう人がイライラしてるときに限って……！」
アーちゃんの姿を認めた途端、ルルーの頭に再び湯気が立ち上り始めた。
魔法などの遠距離攻撃の術があまりないルルーにとって、アーちゃんは極めてイライラする

敵だった。なにしろアーちゃんは、イヤラシイことに射程ギリギリの距離を常に取って攻撃してくるからである。今朝〝どきどきコース〟に入る前に遠距離攻撃が可能な技〝破岩掌（はがんしょう）の奥義書〟を買って修得しておいたが、この技は気力をけっこう使うので、できれば多用したくないところ。

たとえ破岩掌があったとしても、アーちゃんはすでに壁の向こうに隠れてしまっている。これでは手の出しようがない。近づいたとしても、相手は常にこちらの様子を窺（うかが）っているだろうから、アッサリと逃げられてしまうのがオチだろう。

「ミノタウロス、あなたの一撃でなんとかならないの!?」

「さ、さすがに無理っス。壁の向こうの相手に攻撃できないっス」

「う〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ……!!」

ついに、ルルーのイライラは頂点に達した。

とにかく、ミノタウロスでもモンスターでも壁でもいいから、ブン殴らないと気が済まない。というか、そうしないとイライラで頭がどうかしてしまいそうになる。しかしミノタウロスを怒りに任せて殴るにはちょっち可哀想（かわいそう）だし（いつもやっているコトだが）、壁の向こうのモンスターを殴れないとなれば、ヤツアタリの対象は壁しかない。幸い、眼の前にあるのは壊せるカラフルブロック。

「はぁぁぁぁぁぁっ……！」

ルルーはイキナリ気合いを溜めつ、

「破岩掌!!」

モンスターに届けと一縷の願いとヤツアタリの念を込めて、壁に向かって思いっきりの掌底突き。

すると……、

ズドドドドドドォンッ!!

「きゃぁぁっ!」

ルルーの願いが天に届いたのか、破岩掌の衝撃波は壁を次々と破壊し、やがて、向こう側のアーちゃんにヒット！　アーちゃんはあえなく〝ばたんきゅ〜〟した。

「…………」

「ぶも……」

しかし当のルルーは、自分が引き起こした予想外の出来事に眼をパチクリ。

「は、破岩掌って……」

先に口を開いたのはミノタウロス。

「壁も壊せたんスね……」

「そ、そうみたいね……」

「ルルー様、これなら〝もぐら草〟がなくても階段が探せますよ！」
「そうね！　ミノタウロス、さっそく片っ端から壊すわよ！」
「ぶも！」
このときのふたりは、思わぬ発見に喜ぶあまり、肝心なコトを忘れていた。
破岩掌を使うと、かなりの気力を消耗することに……。

八　泥棒注意報

――「魔導酒のウラミは怖いわよ……！」

　ようやくのことで、ルルーたちは地下九階に到着。
　しかし、ルルーは疲労困憊(ひろうこんぱい)。五階などで破岩掌を調子に乗って使いすぎてしまったため、気力が回復しきっていないのだ。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
　今や体力を削って気力を保たせているという状態のため、ルルーは肩で息をしている。
「ルルー様、ふと思ったんスが……」
「なに？」
「壁壊すの、〝もぐら草〟も使えばよかったんじゃないスか？　破岩掌だけでなく。そうすればこんなに疲れることも……」
「なにいってんの!?」
　ミノタウロスのセリフに、ルルーはいきなり吼(ほ)えた。
「あなたが草という草を片っ端から食べちゃったんじゃないの！」

「す、すいません。空腹にどうしても弱くて……」
「あなたの胃袋どうかしちゃってるんじゃないの⁉　ことあるごとに腹減ったー、腹減ったーって……」
「そんなコトないっスよ。オレは草がひと束あれば、かなり腹いっぱいになるっス」
「だったら、どーしてそんなにお腹が減るの⁉　ちょっとでお腹いっぱいになっても、スグに空腹になっちゃ意味ないでしょ‼」
「ぶも……」
「まったく、大飯食らいなんだから……！　これで役立たずだったら、もうとっくに見捨ててるわよ！」
「あ、あの〜……、ルルー様……？」
「なによ！」
「お、お腹が空いたんですが……」
「あなたねぇ、人の話聞いてたの⁉　ちょっとは我慢しなさいよ！」
「で、でも……」
「もう草なんかないわよ。あなたが全部食べちゃったんだから。どうしてもっていうんなら、これを食べなさい」

ずいっ！

とルルーがミノタウロスの鼻先に突き出したのは、ひと抱えもある巨大なカレーライス。

「この〝超特大盛カレーライス〟なら、しばらく何も食べられなくなるくらいお腹いっぱいになるわよ。あなたに丁度いいわ」

「めめめめめめめめめめ、滅相もないっス！」

カレーライスを眼の前にして、ミノタウロスは脂汗を浮かべながらぶんぶんと首を振った。

「こんなの食うくらいなら我慢するっス！」

「ならそうなさい……」

いいながら、ルルーはついにその場にへたり込んだ。

「ルルー様、大丈夫っスか⁉」

「はぁ、あなたと話してたらよけい疲れちゃったわ……」

「そろそろ〝魔導酒〟を飲んだほうがよくないっスか？」

魔導酒は、ショップで買える気力や魔力を回復する薬である。〝仙人酒〟より効果が高いので、いざというときのために一本だけ買っておいたのだ。

「ホントはもっと先で使いたかったんだけど……、背に腹は代えられないわ」

ルルーは魔導酒のビンを取り出し、飲もうとした。

しかし、次の瞬間、

ひょいっ。

と何かが眼の前を通過した、と思ったら、

「あら？」

確かに手にしたはずのビンがなくなっていた。そして、聞きなれない声が飛び込んでくる。

「魔導酒かぁ、なかなかイイモノ持ってるじゃない」

見ると、ルルーたちの前にかわいらしい女の子が立っていた。ただ、普通の女の子とひとつだけ違うのは、下半身がイヌの胴体になっているということ。半人馬のようなモンスター〝スキュラ〟だ。

「へへへ……」

スキュラはイタズラっこのような笑みを浮かべ、

「これ、もらってくよぉ」

というが早いか、脱兎（だっと）のごとく駆け出した。

「ちょ、ちょっと！　待ちなさいよ！」

ルルーが立ちあがって追いかけようとしたときにはもう遅く、スキュラの姿はもうどこかに消え去ってしまっていた。さすがに四本脚だけあって、走るのがやたら早いのだ。

「ミノタウロス、追いかけるわよ！」

「ぶも！」
残った気力を振り絞って、ルルーは走り出した。ミノタウロスもそれに続く。
しばらく後を追ったが、さすがに相手のほうが脚が早く、まったく姿が見えない。その代わり、上半身が美女、下半身がヘビのモンスター、〝ラミア〟を発見。
「ねぇねぇ、このへんで魔導酒持ったスキュラ見なかった？」
ルルーは声をかけた。しかし、ラミアは壁に向き合ったままビクともしない。
「ちょっと、人の話聞いてるの!?」
「だーるまさんが……」
ルルーが詰め寄ると同時に、ラミアは口を開き……、
「転んだっ！」
と振り返った。
「うっ!?」
ピキキッ……！
その瞬間、突然ルルーの身体が硬直。どうもがいても動かなくなってしまった。
「おほほほ……！　どう？　動けないでしょう？」
ラミアは高笑い。

「くっ……」
幼少の頃の記憶と、それに基づく条件反射を見事に突いた攻撃である。
「さぁ〜て……」
にゅるにゅると、ラミアはからみつくようにルルーに肉薄した。
「今度はお注射の時間よぉ。わたしの毒をたっぷり注入してあげる……★」
「じょ、冗談じゃないわ……！　あなたの毒なんか、誰が食らうもんですか……！」
「おほほほ……！　せいぜい強がりをいってなさい」

シャキ——ンッ！

ラミアの右手が大きく振り上げられる。その爪は、まさに毒々しい紅色だった。
しかし、その手がルルー目掛けて振り下ろされることはなかった。
「一撃っ!!」
ズドォンッ！
「きゃあああっ！」
ラミアの手が振り下ろされるよりも早く、ミノタウロスの斧がラミアに襲いかかったのだ。
そしてラミアはあえなく〝ばたんきゅ〜〟。
「ルルー様、大丈夫っスか？」

そしてふたりは、再び追跡を開始した。その努力が報われたのか、ほどなくしてスキュラを発見。
「ついに見つけたわよ！　あたくしの魔導酒を返しなさい！」
「へ？　なんのコト？」
ルルーの威圧にも屈することなく、スキュラは素っ頓狂(すっとんきょう)な顔をする。
「とぼけないでよ！　盗人猛々(ぬすっとたけだけ)しいとはまさにこのことだわ！」
「とぼけてなんかいないわよ！」
「あたくしが怒らないうちに、さっさと魔導酒を返しなさい！　さもないと……！」
「だからぁ、あたしは知らないって！　それに、キミはもう怒ってるじゃないか」
「ああそう、どうしてもシラを切るってワケね……！」
いいながらルルーは拳に気合いを込める。
「それならこれもあげるわよ！　破岩掌!!」

ズドォンッ！

「きゃい――んっ！」

掌底突きをまともに食らい、スキュラはしたたかダメージを受けた。

「よくもやったなぁ！　かむわよぉ!!」

ガブッ！

「痛いっ！」

お返しとばかりにスキュラはルルーの腕を噛む。

「ルルー様に何をする！」

と今度はミノタウロスが、スキュラ目掛けて斧を振り下ろす。

「一撃っ！」

ブォンッ！

「きゃいぃ――んっ!!」

さすがに二対一では、スキュラのほうが圧倒的に不利だった。

しかし……、

「すけだちいたす――っ！」

というカン高い声とともに、ベル型注射器を持ったハチのモンスター〝ナースビー〟が出現。スキュラの傷にクスリを塗り始めた。すると、スキュラの傷がみるみる治って行く。

「がぅがぅ〜〜っ!!」

スキュラはすっかり元気を取り戻し、ガッツポーズ。こうなると、少しダメージを受けているルーたちのほうがやや不利か。

「ミノタウロス、こうなったらまとめてやっちゃいなさい！」

「ぶも――――――――――――――――――――――――っ!!」

グォォォォォォォォォォッ………！

主人の命令に呼応し、ミノタウロスは斧を横に構えて回転を始めた。やがて勢いを増して行き、竜巻を形成して行く。

「必殺！　猛牛乱舞!!」

グォォォォォォォォォォッ………！

「きゃいぃ――――んっ！」

「りふじんなぁ〜りぃ〜っ……！」

猛牛乱舞の竜巻を食らい、ナースビーは〝ばたんきゅ〜〟。しかしスキュラはさっきの治療のおかげで、〝ばたんきゅ〜〟だけは免れている。しかし、危険であることに変わりはない。

「くぅんくぅん……」
「だからいったのよ！　盗んだ魔導酒をさっさと返せばこんなにならずにすんだのに……」
「だからぁ！　知らないっていってるじゃないか！」
「この期に及んで、まだシラを切るつもり⁉」
「う～～～っ……！　そんなにお望みなら、盗んでやるよ！」
スキュラは傷ついた身体をなんとか起こして、ルルーに突進しようと身構える。
しかしそれよりも早く、
「あなた、あたくしから魔導酒盗んだだけじゃまだ飽き足らないの……⁉」

ブチッ！

とルルーが切れた。
「魔導酒なんか、あたしは知らないってば！」
「うるさいうるさいうるさ――――いっ‼」
そしてルルーは気合いを込める。
「る、ルルー様、そんなに技を使っては気力が……！」
「ミノタウロスは黙ってなさい！　巻きこまれたいの⁉」
「ぶ、ぶも――っ！」

「はぁぁぁぁぁぁぁっ……！　風神脚‼」

と気合いとともに回し蹴り。

ブォンッ！

「きゃいんきゃい――んっ！」

渾身の回し蹴りを食らって、さしものスキュラも〝ばたんきゅ～〞。

「まったく、素直に返せばこうならなかったのに……！」

いいながら、ルルーはスキュラの持ち物をあさる。しかし出てきたのは〝ただの草〞ひとつ。

「あれ？　魔導酒がないわ……？」

「すると、このスキュラは本当に魔導酒のことは知らなかったみたいっスね」

「ってことは、知らないっていうのは本当のコトだった……？」

「そーいうコトになるっス」

「…………」

ルルーはしばし考え込んだ後、

「ミノタウロス、さっさと次のフロアに行くわよ」

と、立ちあがりながらいった。

「魔導酒はどうするっスか？」

「もう諦めるわ。でないと、このフロアにいるスキュラ全部を倒さなきゃならないかもしれな

いし……。気力は次のフロアに行けば少しは回復するでしょう」

〝わくぷよランド〟のアトラクションはすべて、フロア間の移動の際に魔力や気力が回復したり傷が治ったりするような仕掛けがなされているのだ。

「そうと決まったら善は急げ、よ。ミノタウロス、さっさと逃げる……」

思わず本音が出た。

「じゃなかった、さっさと行くわよ」

「は、はい」

とミノタウロスが返事をする頃には、ルルーは階段目指してスタコラと去ってしまった後だった……。

九　ドラゴン発見

――「トモダチって……」

地下十階に下りると、大きなフロアの真ん中で何か大きな生き物が丸くなっていた。
「あれが、さそりまんの探してるドラゴンね……？」
「どうやらそのようっスね」
確かに黄色い身体に青い翼を持ち、トカゲや恐竜よりも美しく洗練されたフォルムを持つモンスターは、ドラゴン以外にありえない。
そのドラゴンはルルーたちの姿を認めると、
「グルルルルルルルルルル……！」
と身を強張らせ、眉間（みけん）と鼻筋にシワをよせて唸（うな）った。
「何よ、やる気なの!?」
「ルルー様、怒ってはいけないっス。たぶんコイツは怯（おび）えてるんだと思います」
「どうしてあたくしに怯えるの!?　あたくしってそんなに怖い？」
「え……、いや、その……」

「なんでそんなに口籠もるのよ⁉」
「いや、ルルー様が怖いとかではなくて……、かなりのストレスですべてが怖いものに映っているんス」
「誰がそんなストレスを……？」
「さぁ、そこまではオレもわからないっス」
ルルーは、精一杯ニッコリと笑ってドラゴンに近づいた。
「ドラゴンちゃん、もう怖くないわ。だから帰りましょう？」
「ルルー様、いけません！　不用意に近づいちゃ……‼」
とミノタウロスが制止したときにはもう遅く、
「キシャ――――――――ッ‼」
ドラゴンは「もう我慢できない」とばかりに咆哮をあげた。そして、ルルーたちに向かって猛烈な炎を吐く。
ゴォォォォォォォォォォォォォォォッ……‼
「きゃぁぁっ！」
「ぶもーっ！」
範囲の広いファイヤーブレスの奇襲を受けたルルーたちは、それを避けきれずにしたたか火

傷を負ってしまった。

「なぁんてことすんのよ‼　こっちは迎えに来ただけなのに！」

「ルルー様！　怯えてるヤツに、見知らぬ人間がそんなコトいっても無駄っス」

「じゃあ、さそりまんを連れてくればいいの？」

「いや、もうこうなったらそれもダメっス」

「ガォ――――‼」

ふたりが話している間に、パックリと開いたドラゴンの口が迫ってくるが、それはふたりともなんなく回避。

「じゃあ、どうすればいいのよ！」

「まず、どっちが強いかを実力をもってわからせるしかないっス。そうすれば少しはおとなしくなるはずっス」

「よぉーし、行くわよ！　ミノタウロス！」

「ぶもー！」

「ガォ――――ッ！」

再びの噛(か)み付き攻撃をかわすと同時に、ルルーとミノタウロスは左右に散った。

「はぁぁぁぁぁっ……‼　破岩掌(はがんしょう)‼」

ズドォンッ！

「キシャァ――ッ！」

「一撃っ！」

ブォォンッ！

「ギャォォォォォンッ!!」

主従の連続攻撃にドラゴンはかなりのダメージを受けたが、彼も負けてはいない。大きく息を吸い、ルルー目掛けてドラゴンブレス。

「キシャ――――――ッ!!」

ゴォォォォォォォォォッ……！

「熱っ！」

「ルルー様！」

ブレスをモロに食らったルルーの姿にミノタウロスは悲痛な声をあげるが、ルルーとてそんな簡単にやられるワケがない。

「よくもやってくれたわね！　あなたが熱いので来るなら、こっちは冷たいので行くわよ！」

と、右手に気合いを集中させる。すると、大気中の冷気がそこに収束していく。

「水神掌(すいじんしょう)!!」

パキィ———ンッ……！

冷気をまとった掌底突きがヒットすると同時に、ドラゴンの身体を薄い氷の膜が取り囲み、そして弾けた。

「ギャォォォォォォォォォン……！」

冷気に弱いドラゴンはこれが致命ダメージとなり、その場にくずおれた。〝ばたんきゅ～〟ではないが、完全に戦意を喪失している。

「どう？　人を甘く見るとこういう目に遭うのよ！」

「くぅん……」

ルルーの言葉に、ドラゴンは仔犬（こいぬ）のように鼻を鳴らして応えた。

「さぁ、さそりまんのところに帰りましょ？」

とルルーがドラゴンの鼻を優しくなでようとしたところへ……、

「待て待て待てぇ～～っ!!」

突然、カン高い声が割りこんだ。見ると、笛を持った小人の〝パノッティ〟が、こちらにパタパタと走ってきていた。

「そのドラゴンはボクのトモダチだぞ！　勝手に連れてくなよ！」

「あなたがドラゴンをここまで連れて来たの⁉」
「だからどうだっていうんだ！　さっさとボクのドラゴンから離れろ！　これからボクとここで遊ぶんだ！」
「バカいわないの。ドラゴンはさそりまんとのお仕事が待ってるのよ」
「そんなの知るもんか！　ボクはドラゴンと遊びたいんだ！」
「どうして？」
「そんなのヒマだからに決まってんじゃん！」
「あきれた……」
「おいドラゴン、そいつらにファイヤーブレスをお見舞いしてやれ！」
「くぅ～ん……」
ドラゴンは、「もうイヤだ」とばかりに首を振る。
「これでもイヤっていうのか？」
パノッティは笛を構え、吹いた。すると、心地よいリズミカルな音色がフロア中に満たされて行く。
「くぅ～ん……」
しかしそれでも、ドラゴンは戦おうとしなかった。
「どうしてボクのいうこと聞かないんだよ！　トモダチだろ、いうコト聞けよぉ！」

「くぅ〜ん……」
「どうしても聞かないっていうんなら、こうしてやる！」
パノッティは手にした笛を大きく振りかぶった。それでドラゴンを打ち据えようというのだ。
しかしそれが打ち下ろされるより早く、
パッシィ————ンッ！
乾いた破裂音が鳴り響いた。
「いったいなぁ！　何すんだよぉ！」
左の頬(ほお)を真っ赤に腫(は)らしたパノッティが、ルルーに食って掛かる。
「ホントにドラゴンけしかけるぞ！」
「今すぐその口を閉じなさい！」
ズゥゥン……！
という格闘女王様の大迫力で、ルルーはパノッティを見下ろした。
「でないと、今度はグーで殴るわよ！」
「う……」
「あなたとドラゴンの関係は、トモダチなんかじゃないわ。単に、あなたのワガママにドラゴンがしかたなくつきあってあげてるだけよ」

「………」
「だってトモダチって、笛を使ったり、暴力で自分のいうことを聞かせる関係じゃないもの」
「そんなコトいって、あんただってミノタウロスを暴力使っていうこと聞かせたりしてるじゃないか！」
「あれは下僕だからいいの」
「ぶも……」
ルルーのセリフに、ミノタウロスがやや悲しげに肩を落とす。
「とにかく、ドラゴンに謝りなさい」
「え〜〜っ!?　どうしてさ!?」
「どうしてか分からないんだったら、ゲンコツ使ってでも分からせるわよ！」
ルルーは、パノッティをキッと睨む。
「あたくしはあなたとトモダチじゃないんだから」
「わ、わかったよぉ……」
そしてパノッティはドラゴンに向いた。
「ドラゴン、ゴメン……。もう叩いたり笛で操ったりしないから、本当のトモダチになってくれる……?」
「どうする？　ドラゴン。あなたはコイツを黒焦げにする権利があるのよ？」

「…………」
ドラゴンはしばし考え込んでいたが、やがて、
ペロン。
答えの代わりにパノッティの頬を優しく舐めた。
「よかったわね、許してくれるってさ」
「ありがとう、ドラゴン！」
パノッティは、喜びのあまりドラゴンの首に巻きついた。
「ルルー」
とパノッティ。
「コイツはボクが責任を持ってさそりまんのところに連れていくよ。キミたちは後からゆっくり戻ってくればいいよ」
「じゃあ、そうさせてもらうわ。正直いって疲れたし……」
「そんじゃぁ、また後で」
「キシャ――――ッ！」
真の友情に目覚めたパノッティとドラゴンは、フロアの奥のほうへと消えて行った。
「さて、あたしたちも帰るわよ」
「ぶも」

パノッティたちの姿が消えてしばらくしてから、ルルーも地上出口に向かって歩きはじめた。
「ルルー様、あれ……」
ふと、ミノタウロスが前方を指差す。そこには、地上への出口と、その傍らに宝箱がひとつあった。
「何かしら……？」
ルルーは、ややドキドキしながらも宝箱を開ける。
それには、〝天舞脚〟と書かれた書物が入っていた……。

十　VIPチケット！

——「ごめんね、ミノタウロス……」

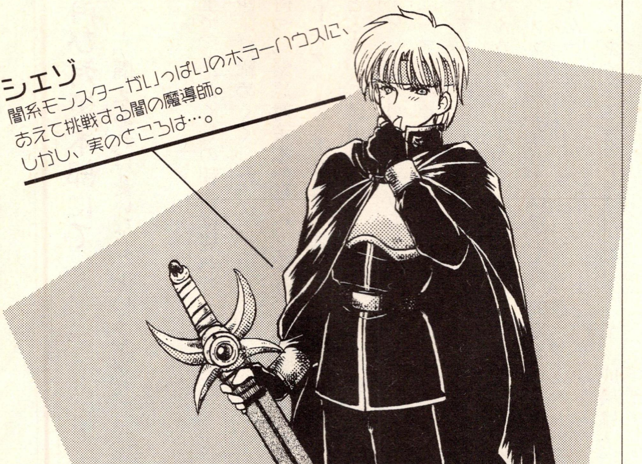
「いやぁ、助かりましたわぁ！」
ルルーたちが地上に戻ると、さそりまんが諸手をあげて歓迎してくれた。
「ドラゴンも戻ってきたし、パノッティもモギリの仕事手伝うてくれるようになって、まさに一石二鳥ですわ。……いや、そのおかげでワテが楽になって、一石三鳥ですな」
さそりまんはいつも朗らかだが、今回はさらに拍車がかかっている。
「んで、これはほんの礼ですわ」
といってさそりまんが差し出したのは、一枚の紙切れ。
「これは？」
ルルーは問う。
「これは〝VIPチケット〟いいますねん。簡単にいうとウチの残りのアトラクション、〝ホラーハウス〟と〝ワンダージャングル〟に入れるようになりますのや」
「なるほど。捜査の範囲も広げられるってワケね」

「そういうことですねん」
「ありがたくもらっておくわ」
「いいえ、礼をいいたいのはこっちのほうやから」
「じゃあ、あたしたちは探偵さんに報告しに行くから」
と、ルルーはくるりと背を向け、インフォメーション裏の〝緊急対策本部〟へとツカツカ歩き始めた。ミノタウロスは無言でそれに続く。
「ミノタウロス……」
「は、はいぃ！」
道中、ルルーにイキナリ声をかけられ、ミノタウロスはビックリ。といっても、ルルーはミノタウロスに背中を向けたまま。
「な、なんですか？　ルルー様」
「正直にいっていいのよ、あのドラゴンみたいに……」
「なんのコトっス？」
「あたくしのコトがイヤだったら、正直にそういいなさいっていってるの」
「滅相もないっス！　ルルー様がイヤなワケないっス！　いやマジで」
これは、確かにミノタウロスの本心だった。普段は高飛車でワガママなお嬢様のルルーだが、下僕のミノタウロスに友達以上に気を使っていることはもはやわかりきっているからだ。逆に

そうでなければ、いまのようなセリフは出てこない。
「ルルー様……」
「なぁに……？」
「オレは、ルルー様に一生お仕えするっスよ……！」
そのセリフは、ミノタウロスの本心とはちょっとだけ違っていた……。

ホラーハウス

"そして蠢く魔女の影……"



一　再び対策本部にて
——「備えあれば憂いなし、というヤツだ」

「……以上で、あたくしの報告は終わりですわ」
と、ルルーは締めくくった。
探偵の待つ〝緊急対策本部〟へと戻り、〝どきどきコース〟での一部始終を報告したのである。〝VIPチケット〟もひとまず探偵に手渡した。
『なるほど……、ご苦労様』
探偵はパイプをくゆらせながらいう。
『では次に、アルルくん。キミの報告を聞こう』
呼ばれたアルルは、まるで宿題を忘れた生徒のようにビクッと身体を強張(こわば)らせた。
「ご、ごめんなさい、ルシファー先生……」
『私はルシファー先生などではないよ、何度もいうが』
「すいません」
『いや、別にあやまることじゃない。……で、成果は？』

「ごめんなさい、なんにもないです」
『なるほど』
と探偵はシェゾに水を向ける。
『シェゾくんのほうは？』
「オレのほうも特に有益な情報はなかった」
アルルと違ってすまなそうな様子も見せず、無表情でシェゾは答えた。
『そうか……』
探偵は、しばし考え込むようにパイプをくゆらせ、
『ではひとまず、状況を整理してみよう』
と後ろで控えている助手の老人に目配せした。
「これまでの情報を整理してみますと……」
助手は手帳に眼を落としながらいう。
「〝ファイヤーマウンテン〟〝スターライトステージ〟では特に手がかりはなし。ワシも〝ウォーターパラダイス〟に行ってみましたが、手がかりはつかめませんでしたぞ」
『私も一応、〝わくぷよランド〟の外を当たってみたが、何もなかったな』
「となると、ひとまずは〝ホラーハウス〟か〝ワンダージャングル〟に行って調べるしかありませんぞ」

『うむ、ルルーくんが〝VIPチケット〟を手に入れたことだしな』
そして探偵は、彼をじっと注目しているルルーたちに眼を移す。
『ではまず〝ホラーハウス〟から調べてもらおう。誰か希望者はいるかね?』
「オレが行こう」
と立ちあがったのは、〝闇の魔導師〟シェゾ・ウィグィィ。
『キミがか……?』
意外な候補者に、探偵を始めその場にいた全員がやや眼を丸くした。
「シェゾ、〝ホラーハウス〟がどんなアトラクションか知っててていってるの?」
眼を覚ませとばかりにアルルがいう。
「パンフレットに書いてあったじゃない。闇系のモンスターがいっぱいいるアトラクションなんだよ? あそこは」
「だから、あなたの闇の魔法なんかちっとも効かないわよ」
とルルー。
「そんなに苦労したいっていうなら、あたくしは止めないけど」
「ふん」
次々と繰り出されるアルルたちのセリフに、シェゾは鼻をならして応えた。
「それくらい、ギャーギャーいわれなくてもわかっている。闇の魔物が多いからこそ、オレは

行くのだ」
「どうして？」
　とアルル。
「オレは、お前たちのような甘ちゃんではない。あえて、相手が耐性を持つ方法で倒す――圧倒的な力で捩じ伏せるのだ。それが本当の修行ではないのか？」
　シェゾはにらむようにルルーを見て、
「こういう話は、お前のほうがすんなり理解できるだろう。たとえば闇のモンスターを闇の魔法で――お前の場合は岩のように頑丈な魔物をその拳でラクラク倒せるようになったときこそ、真に強くなったといえるのではないか？」
「う……」
　シェゾの高説に、ルルーは憎まれ口も出ない。
「それに、オレにとって〝ホラーハウス〟のような闇のダンジョンは有利に働くこともある」
「な、なんで？」
「闇系の魔導書が手に入りやすいからだ。それを使って、オレはさらに強くなる……！」
『ご高説はもっともだが……』
　諭すように、探偵が口を開いた。
『当面の目的を忘れないでくれ。ダンジョン内ですることは、キミ自身の強化ではなく、園長

殺害事件の手がかりを集めることだ』

「ふん、わかっている。……だが、これだけはいっておく。オレは、選択を迫られれば、迷わずオレが強くなるほうを選ぶ。オレはサタンを殺した犯人が見つからなくとも、〝すっごい魔法のアイテム〟さえ手に入ればいい」

「ねーねー、ところでさぁ……」

シェゾの威圧的なセリフを聞いていたのかいないのか、呑気(のんき)な口調でアルルがいう。

「〝ホラーハウス〟だと闇系の魔導書が手に入りやすいって、どーいうコト？」

「そこにいるモンスターが持っている、ということだ」

とシェゾ。

「手に入れたければ、そいつを倒せばいい」

「ってことは、他のダンジョンも同じカンジ？」

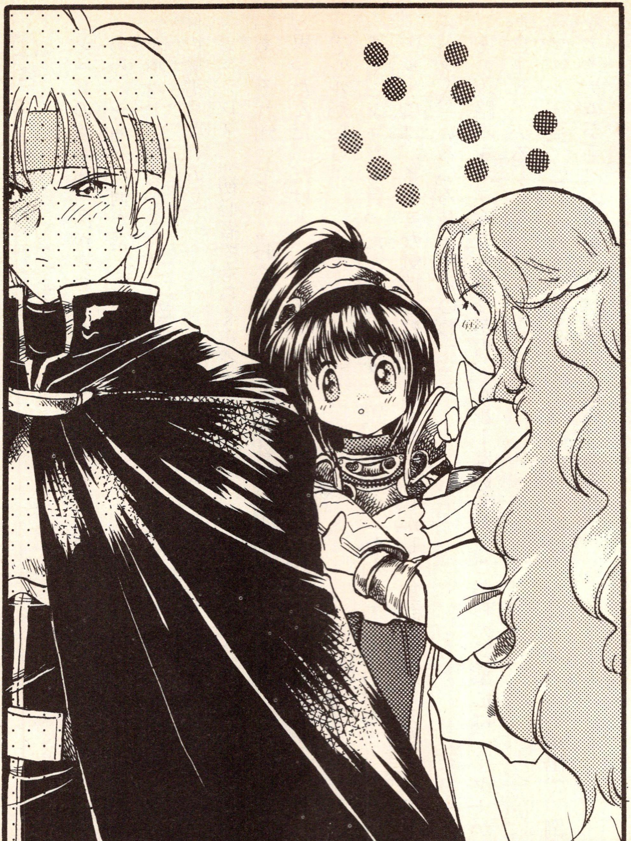
「ああ。たとえば〝ファイヤーマウンテン〟なら炎、〝ウォーターパラダイス〟なら冷気系の魔導書が手に入りやすい」

「へぇ〜、よく知ってるねぇ、そーいうの。さすがさすが」

「オレはお前とは違う。……しかし、お前も魔導師の端くれなら、それくらいは知っておけ」

バサァッ！

いいながら、シェゾはマントをひるがえして背を向けた。その拍子に……、



ばさっ。

シェゾの懐から、何か本のようなものが落ちる。

「あら、シェゾ、何か落としたわよ」

とルルーが親切かつおせっかいにも拾い上げたものは、たしかに一冊の本だった。しかし、件(くだん)の魔導書ではない。

「ナニコレ？『初心者でもらくらくクリア――〝わくわくぷよぷよランド〟編』……？」

「あ、それ知ってる。〝わくぷよランド〟の外の売店で売ってたヤツだ。最初、ボクも買おうと思ったんだ。だけど、シェゾやルルーにまたバカにされちゃうと思って……」

アルルがいう。

「でも、シェゾも買ったんなら、ボクも買えばよかったなぁ」

アルルには、イヤミな気持ちはまったくない。しかし、余計に残酷な言葉ではある。

「へぇ〜、いろいろ載ってるのね」

その攻略本をパラパラと見ながら、ルルーはいった。こちらの言葉には、イヤミがたっぷりと含まれている。

「アルル、見てごらんなさい。どのアトラクションにはどんなモンスターが出て、倒せばどんなアイテムが手に入るかとか、細かく書いてあるわ」

「あ、ホントだ。やっぱり買えばよかったなぁ」

「…………」

このような気まずい状況の中で、シェゾが己のプライドを守るには、終始無言でいるしかなかった……。

二　〝ホラーハウス〟で大苦戦

――「くそっ、マズったぜ……」

〝ホラーハウス〟は、まさに〝恐怖の館〟だった。

イカニモな感じの洋館に、巨大な悪鬼の顔がくっついている。悪鬼はあんぐりと口を開けていて、その中に入り口が設えてあるため、アトラクションに入るところから、悪魔に呑まれるような恐怖を味わうことができるのだった。しかも入り口の前には、いくつかのかがり火が、まるで人魂のようにちろちろと青白く燃えている。

そして、その前にたたずむ人影がひとつ……。

「ここは〝VIPチケット〟がないと入れんぞ」

切れ長の眼でシェゾをキッと睨み、人影はいう。黒いメイド服に身を包み、モップにもたれるように立っている人影の正体は、〝ブラックキキーモラ〟だった。

「さっさと立ち去るがいい」

「チケットなら持っている」

シェゾは、先ほど探偵から受け取った〝VIPチケット〟を差し出す。

「ふん、なら通りな」
ブラックキキーモラはチケットに一瞥をくれると、シェゾに道を開けた。
「キサマ、たしかこのアトラクションのモンスターだな？」
とシェゾは尋ねた。昨晩に読んでおいた攻略本に、そう書いてあったのだ。
「ああ。お前が途中でギブアップしなければ、七階あたりで再会できるだろう」
ブラックキキーモラは応える。
「だが、なぜそんなことを訊く？」
「キサマを斬れるのかどうか確認したかっただけだ。……そのスカした態度ごとな」
それだけいい残し、シェゾはいよいよ〝ホラーハウス〟へと足を踏み入れた。
内部は、その外観にふさわしく、イカニモ幽霊か何かが出そうな造りをしていた。床、天井、壁や柱などが、年季の入った木材でできており、シェゾが歩くたびにギィギィと音がする。すぐにでも壊れそうではあるが、実際には魔法などによってそう簡単には——超強力呪文を連発されても——崩れないようになっているのだろう。
そして、壁には一定の間隔でランプがかけられており、いまにも消えてしまいそうな頼りない光でダンジョンを照らしている。そのため、遠くを見渡すことはできるものの、薄暗い。
実際のところ、〝わくぷよランド〟のアトラクションは、ランプで照らされているところは他にない。魔法によって昼間のような明るさを充分に保たれているからだ。それが可能なのに

あえて薄暗いランプの灯のみでダンジョンを照らしているのは、もちろん〝ホラーハウス〟ならではの演出に他ならない。

「ぷよ……」

シェゾが通路を歩いていると、ランプの淡い光に照らされた、毒々しい紫色のぷよぷよと出くわした。

「出たな……？　くらえっ！」

シュバッ！

闇の剣をスラリと抜き、シェゾはそのまま〝紫ぷよ〟に斬りつけた。

「ぷよっ……」

紫ぷよはいくらかのダメージを受けたが、まだまだピンピンしている。闇の剣の、刃の部分ではダメージを与えられたが、やはり剣から発する闇の波動はあまり効果がないようだ。

「ぷよぷよっ……」

ドゴン！

「やったなぁ！」

お返しにシェゾは紫ぷよの体当たりを食らい、こちらもダメージを受けた。

「くらえっ！」

シュバッ！
シェゾは闇の剣でさらに攻撃。
「ぷよっ……」
しかしやはり、ダメージはあまり与えられない。
「ちっ……！」
思わずシェゾは舌打ちした。
ダンジョン序盤のザコモンスターなら、一撃とまではいかなくとも、二回程度の攻撃で〝ばたんきゅ〜〟させられるとシェゾは思っていた。実際、〝スターライトステージ〟あたりはもう何度となく訪れたが、ザコは一撃で倒せるようになった。
しかし眼の前の紫ぷよは、二回の攻撃でかなりのダメージを与えることはできたものの、まだ倒れない。つまり、闇の力のみで捩じ伏せるにはもう少し早いということ。自分の力をやや過信していたことに、シェゾは舌打ちしたのだった。
もっとも、フレイムなどの闇ではない魔法を使えば、もっと楽に戦える。だがこんな序盤で魔力をあまり使いたくはない。一応、〝魔導酒〟などの回復アイテムはそれなりに買いこんでおいたが。
「しかし、背に腹は代えられんか……」
シェゾはひとりごちた。意外に手ごわい紫ぷよに、魔法でとどめを刺そうというわけである。

だがそうなると、例の攻略本を置いてきたのは痛い。あれがあればモンスターの弱点を調べて、より効率的に倒せたのだが……。

「くそっ……！」

いまさらながら、シェゾは対策本部でうっかり攻略本を落としてしまったことを悔やんだ。あそこで、笑ってごまかしたり、「どうだいいだろう」と開き直ったり、「実は買ってたんだよ～ん★」と道化になりきることができればよかったのだが、プライドが空よりも高いシェゾに、それはできなかった。まぁ、たとえシェゾでなくとも、あのような場面では、気まずくて「返してくれ」と素直になかなかいえないものではあるが……。

などと考え込んでいると、

「しゃああっ⁉」

と壁をすり抜けて亡霊モンスター〝シャドー〟が現れた。眼の前の紫ぷよもまだ片付けていないのに、弱り目に祟り目である。

「ノロッテヤルゥゥ……‼」

いきなりシャドーはシェゾに肉薄し、闇のオーラで彼を包み込む。

「ふふん、それがどうした」

しかしシェゾに何の変化もない。何故ならば、指輪やお守りなどのアイテムを装備していな

かったからである。シャドーにアイテムが呪われると、呪いを解くまで外せなくなってしまうのだ。……そのあたりは、昨晩のうちに攻略本を読んで予習していた。
ちなみにシャドーは、闇の剣を呪うなどという愚かな真似はしない。闇の剣のエネルギーに逆に取りこまれてしまうのがオチだからである。
「くらえっ！」
「しわああっ!?」
小手調べとばかりにシェゾはシャドー目掛けて剣を振り下ろすが、予想通りシャドーはほとんどダメージを受けない。実体の薄いモンスターだけに、剣による物理的な打撃もかなり緩和してしまうのだ。
「…………」
シェゾは、せめて〝光の指輪〟だけでも装備しておけばよかったと思った。そうすれば剣の攻撃に光の属性が付加され、戦いが楽になるからだ。それに外せなくてもさほど困らないので、別に呪われてもかまわない。
だがシェゾは、修行のためと攻撃力をアップさせる指輪のたぐいはいっさい持ってこなかった。いくつかのお守りは持っているのだが……。
「ぷよぷよ……」
「しゃああっ!?」

シェゾが攻めあぐねているスキに、紫ぷよとシャドーが同時に迫ってくる。とりあえず、いろいろと悔やんだり考え込んだりしている場合ではない。

「………」

チャキッ！

シェゾは、闇の剣を水平に構えた。そして、

「くらえ！　空間斬!!」

シュバァッ!!

気合い一閃、剣を横になぎ払う。すると、剣の軌跡が空間ごと紫ぷよとシャドーを同時に真っ二つにする。

「ぷよぷよっ……！」

「しわああっ!?」

そして二匹は〝ばたんきゅ〜〟。

「ふう……」

大きくため息をつき、ショップで〝空間斬の奥義書〟を買っておいてよかったと安堵した。

だが、とりあえず当面の危機が去ったに過ぎない。ここは、まだ〝ホラーハウス〟の一階なのだ……。

三　〝ホラーハウス〟の理由

――「くそっ、〝時空の水晶〟め……！」

「フレイム!!」

ドッゴォンッ！

「だわさ――っ!!」

四階に上がっていきなり出くわしたマミーを、シェゾは火炎呪文(かえんじゅもん)であっさりと片付けた。マミーが炎に弱いことは攻略本の予習で知っていたのだ。もっとも、それに頼らなくても、乾燥しきった身体や包帯はよく燃えそうだと想像がつくところだが。

「…………」

だが、はっきりいってシェゾの気分はよろしくない。結局、いつものように相手の弱点をついた効率的戦法を使わざるを得なくなってしまったからだ。これでは、何のために強気な啖呵(たんか)をきって〝ホラーハウス〟に来たのかがわからない。

とはいうものの、自分の力を試す、向上させるということ以外に、この〝ホラーハウス〟に

やってきた理由はいくつかある。
ひとつは、モンスターの攻撃もほとんどが闇（やみ）に属するものである、ということ。
闇の剣を携え、闇の魔法を得意とする〝神を汚す華やかなる者〟は当然、闇エネルギーによる攻撃に耐性がある。つまり闇系モンスターと同じだ。
ここ四階に来るまでモンスターと幾度となく遭遇し、かなり苦労して倒してきたが。実はシェゾ自身も闇に耐性があるおかげでたいしてダメージを受けていない。薬や魔法を使って回復するほどではない。
このことは、攻略本を読むまでもなく、〝ホラーハウス〟が闇系のダンジョンだと知った時点で予測できていた。それを考慮したからこそ、シェゾは名乗りをあげたのだ。……もし、闇に耐性を持ち、なおかつシェゾの苦手な光属性の攻撃をしてくるモンスターばかりだとしたら、さすがに二の足を踏んだだろう。普通、そんな矛盾したモンスターはいないが。
しかし誤算だったのは、敵が思った以上に強い耐性を持っているということ。おかげで思うようにダメージが与えられず、苦戦を強いられている。
「やはり、まだ完全ではなかったか……」
歩きながら、シェゾはひとりごちた。
〝わくわくぷよぷよランド〟に挑戦し始めてからこっち、シェゾは、魔法の力、戦いのカンをかなり取り戻したと思っていた。しかし、まだ本来のパワーまで回復していないようだ。

「………」

――〝時空の水晶〟……！

シェゾは、心の中で歯嚙(はが)みした。たかが物質ごときにしてやられたことが、シェゾのプライドを大きく傷つけていた。

かつて訪れたダンジョンの最深部で、シェゾは我が物にしようとした〝時空の水晶〟に、あやうくすべての魔力を吸い取られそうになった。不幸中の幸いで、吸い取られたのは少しですんだものの、おかげでパワーが格段に落ちてしまった。

相手を甘く見ていた自分のミスとはいえ、やはり頭に来る。

いま、シェゾが〝わくぷよランド〟にいるのは、〝時空の水晶〟への復讐(ふくしゅう)のためだった。正確には、アトラクションで修行をしなおし、さらに〝すっごい魔法のアイテム〟を手に入れて己の力をこれまで以上に引き上げ、そして〝時空の水晶〟の魔力を逆に吸収してさらにパワーアップしようというわけである。

それもこれも、ひいては闇の大魔導師として大輪の〝悪の華〟を咲かせるためだ。

このクソ忌々しい状況も、それのための精神修養と考えれば、大して腹も立たない。「何故オレが遊園地などで遊ばねばならんのだ？」「余計な事件に巻き込まれて、くだらない回り道をするハメになっちまった」とか……。

「………」

ふと、シェゾは苦い顔をした。腹に据えかねていることがひとつだけあるのだ。
それは、かつてはアルルやルルーの師匠であり、さらに〝魔界の貴公子〟サタンの双子の弟であるルシファーが、探偵なんぞに変装していることであった。
相手は何度も否定しているが、探偵はルシファーに違いないとシェゾは断定している。
「またぞろ何をやらかそうというのだ……？」
思わずシェゾはひとりごちた。
いろいろとケレン味の強いことを企み、あちこちで暗躍するのは結構だが、たまには人の迷惑にならないところでやって欲しいと思う。サタンだのルシファーだのが暗躍していると、シェゾはいつもロクなめに遭わない。
——しかし、それもこれも〝時空の水晶〟を手に入れれば状況は変わる。
シェゾはそう考えている。ダンジョンの奥底で力を溜め込んでいる〝時空の水晶〟のパワーを自分のものにすることができれば、魔界の実力者であるふたりを凌駕（りょうが）することが可能になるはず。
「〝時空の水晶〟か……」
シェゾは再びつぶやきながら、辺りを見まわした。まるで、〝時空の水晶〟がそこら辺にないかと探すように。
彼が〝ホラーハウス〟を訪れたもうひとつの理由は、このことであった。正確には、この遊

園地が〝時空の水晶〟と何か関わりがないかどうかを確認するため。
入るたびに形が変わるという奇妙なダンジョンは、そうは見ない。シェゾも――そうはまだ永くはない――これまでの人生で、ふたつしか見たことがない。
ひとつはこの〝わくぷよランド〟のアトラクションで、もうひとつは〝時空の水晶〟の眠るダンジョンだった。だからこそシェゾは、〝わくぷよランド〟の存在を知ると同時に、〝時空の水晶〟との関連を考えたのだった。場合によっては、〝すっごい魔法のアイテム〟イコール〝時空の水晶〟かもしれない……と。
シェゾが〝ホラーハウス〟を訪れたのは、それに関する手がかりをつかめないかと考えたからだった。
なぜならば、〝時空の水晶〟もパワーの属性は闇だったし、もし〝時空の水晶〟が何らかの形で関わっていれば、同じ闇属性のダンジョンがもっとも影響を受けているかもしれないからである。
と、そんなことを考えながらダンジョンを探索していると、

「でろでろばぁ！」

突然、女のコ幽霊モンスター〝ゴースト〟が、壁からにじみ出るように現れた。
「〝ホラーハウス〟ならでは、だな……」

つぶやきながら、シェゾは身構える。このゴーストといい、シャドーといい、ウィル・オー・ウィスプといい、壁をすり抜けるモンスターが多いということである。

「おろろ〜ん……！」

ゴーストの呪(のろ)いの言葉が、突き刺すような冷気となってシェゾに襲いかかる。

「悪いな、キサマなぞと遊んでいるヒマはない」

と、シェゾはなんなく回避。

「キサマの弱点はこれだ！　ライトニング!!」

ピシャア――――ンッ！

シェゾの手のひらから発したプラズマが容赦なくゴーストに降り注ぐ。

「うらめしや〜……！」

ウィークポイントを突かれて、ゴーストはあっさり〝ばたんきゅ〜〟。

そしてシェゾは、特に感慨もなく歩を進める。

いまのところ、ダンジョンと〝時空の水晶〟とのつながりを示すものは何もない……。

四　〝ホラーハウス〟休憩所

――「なぜヤツがここに……!?」

「……?」

五階に到着したシェゾは、その雰囲気の異様さに思わず首をかしげた。

いつもならイヤというほど感じるモンスターの気配が、微塵もないのだ。

〝わくぷよランド〟のアトラクションでは、あるフロアを境に登場するモンスターがガラリと変わることがある。序盤から中盤、中盤から終盤へというカンジで、境目のフロアがだいたいの目安になっているのだ。

始めはシェゾもそれかと思ったが、どうやら違うらしい。なにしろモンスターの気配がまったくないのだ。これまでのアトラクションで、そのようなことはなかった。

「…………」

シェゾは、何が起きても何が現れてもいいように身構えながら、慎重にフロアを進んだ。気配を完全に消すことができる、新しいモンスターがいるかもしれないのだ。あの攻略本があればダンジョンの構成を知ることができ、いらぬ緊張を強いられなくてもすんだのだが、いまさ

らそれを悔やんでもしょうがない。

「………」

し――ん……。

辺りは完全に静まり返っている。聞こえてくるのは、自分の衣服が起こす衣擦れと、ブーツのコツコツいう音、そしてランプの灯がパチパチと小さく爆ぜる音だけ。「しーん」という静寂の音がむしろうるさいくらいである。

「………」

こういうほうが、むしろ〝ホラーハウス〟っぽくて怖いじゃないか……。

とシェゾは思った。いつもなら誰もいないのに口に出してしまうところだが、今はなぜか声を出すのははばかられた。それをきっかけに〝何か〟が出てきそうな気がしたからだ。何もないほうが、何かが出てきそうでドキドキするものである。幽霊屋敷のようなダンジョンの造りも、余計にそれを煽ってくれる。

「……？」

不意にシェゾは背後に何かを感じた気がして、思わず振り返った……が、何もない。

「気のせいか……」

安心して、シェゾは向き直ろうとする。しかしそれは、お化け屋敷――出てくるお化けが本物であろうがなかろうが――ではやってはならないことだった。

大抵の場合、背後に何かを感じてもそれは気のせい——か演出——である。そして何もないと安堵して向き直った瞬間に……！

「よう！」

イキナリ現れるシャレコウベ！

「うわぁっ!!」

思わずシェゾは叫んだ。

「何を驚いている？　オレの顔など見慣れているだろーに」

シャレコウベはいった。よく見ると、それは骨モンスター〝スケルトンT〟だった。

「キサマ!?」

チャキッ！

怒りのあまり、シェゾは剣を抜いた。

「よくもオレを脅かしたな!?」

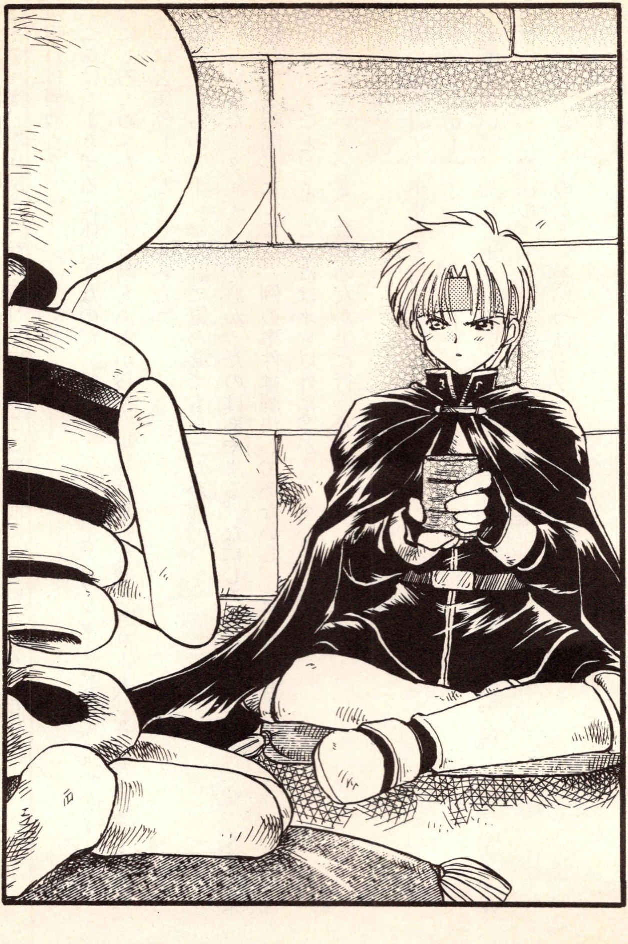
「脅かすつもりなどないぞ。……まぁ、剣を収めて、これに座れ」

スケルトンTは、傍らの座布団をシェゾに渡し、自分も別の座布団に座る。

「そして、まずこれを飲め。気分が落ちつくぞ」

と、湯のみになみなみと注がれた熱いお茶をシェゾに勧めた。どうやら、本当に脅かすつも

りとか、戦うつもりはないらしい。
「…………」
シェゾはまだ憮然としながらも、剣を収めて座布団にあぐらをかき、お茶をすすった。すると、お茶の温かみがジンワリと身体中に広がり、気力体力を充実させていく。
「ふぅ……」
「どうだ？　落ちついただろう？」
シェゾが大きく息をつくと、スケルトンTはいった。
「まぁな、うまい茶ではある」
「それは重畳」
「ところで、ひとつ訊きたいのだが……」
ことりと湯のみを床に置き、シェゾはいう。
「お前は気配を完全に消すことができるのか？」
シェゾにすら感知できないほど気配の消せるヤツはそうそういない。スケルトンTにもしそのような能力があるとすれば、賞賛に値するし、その術をご教授願いたいところだ。
「いいや、オレにはそんなことはできん」
スケルトンTは、シェゾの問いをあっさり否定。
「オレは、お茶を淹れて、ここにたった今来たところだ。お前さんがオレの気配を感じなかっ



たとすれば、それが原因だろう。なにしろここには他に誰もいないからな」
「それは何故だ？」
「ここは、ようするに休憩所なのだ。〝ホラーハウス〟と〝ワンダージャングル〟にしかない。なにしろこのふたつは十五階もあるからな。少しは緊張を緩和させせんと、客が遊ぶどころではないほど疲弊してしまうからな」
「緩和どころか、オレは余計に驚かせてもらったがな」
「そういうな、タイミングが悪かったのはあやまる。なにしろ今日は忙しくて、ゆっくりと茶を淹れてる時間がなくてな。例の事件は解決していないし、客も多いし……」
「どういうことだ？　ここにはオレ以外に客が入っているのか？」
「ああ。ついさっき、金髪の女が上に行ったよ」
「金髪の女？」
「青い服を着て、ホウキを持ってたな」
「ウィッチか！」
金髪に青い服、そしてホウキといういでたちに、シェゾは見覚えがあった。シェゾやアルルとはまた違った魔法のエリート、〝ウィッチ〟である。
「ウィッチというのか？　そいつは……」
とスケルトンT。

「不思議なのだが、オレは彼女を〝わくわくコース〟で見たことがないのだ」
「どういうことだ？」
「わからん。単に忘れているだけかもしれん」
「だが、本当に見たことがないのだとしたら、かなり怪しいぞ」
シェゾはいう。
〝わくぷよランド〟では、まず最初に〝ぷよぷよダンジョン〟一～三階の初心者コースをクリアしなければならない決まりになっている。そして、そのコースのボスがスケルトンTなのである。
「事によったら、犯人かもしれん」
「確かに、ありえないことではない……」
スケルトンTの言葉に、シェゾはうなずいた。
ウィッチは、どこでどう暗躍しているかわからないところがあるからだ。その神出鬼没さは、実はサタンやルシファー以上である。
「あそこでもウロチョロしていたしな……」
とシェゾは〝時空の水晶〟のダンジョンを振り返る。しかし、当時のシェゾでさえ〝時空の水晶〟にはかなわなかったのだ。ウィッチごときが〝時空の水晶〟の力をコントロールしているとはシェゾにはとうてい思えない。それに、

「ウィッチごときにサタンが殺せるとは思えんが」
シェゾはいった。
「確かに。だが、怪しいのは事実だ」
スケルトンTは応える。
「よし、調べてみよう。馳走(ちそう)になったな」
とシェゾはマントをひるがえして立ちあがった。
「ところでスケルトンTよ」
「なにかな?」
「ウィッチが怪しいとわかってて、何故そう落ちついている?」
「オレが単に忘れているだけなのかもしれんしな。それに……」
「それに?」
「お茶は慌てて味わうものではない」
いいながら、スケルトンTはずずぅーっとお茶をすすった……。

五　ワナ注意報・再び

——「なんてフザけたヤツだ……!!」

カチッ！

七階の床に右脚をつけた途端、何か乾いた音がした。

——ヤバイ!!

と思ったときにはもう遅く、

シュォォォォォォォォォォッ……！

床から噴き出した魔力のオーラが、シェゾを包み込む。

「うぉっ!!」

その瞬間、シェゾは魔力が急速に奪われていくのを感じた。

「ちっ！」

ワナの作動が終わってから、シェゾは舌打ちしながらそれを解除。そして、魔力回復のために〝仙人酒〟を飲む。

「……！」

軽いアルコールを嚥下している最中に、シェゾはあることに気がついた。

ワナに魔力を奪われたときの感覚が、〝時空の水晶〟のときに似ているのだ。

「やはり、ここは〝時空の水晶〟と少なからず関係がありそうだな」

シェゾはひとりごちた。ワナのひとつやふたつでそうと決めつけるのは危険だが、いずれ答えは見えてくるだろう。

と、シェゾは再び脚を踏み出した。その瞬間、

カチッ！

またスイッチの音。

「ちぃっ！」

しかしあまりに突然であったため、シェゾは回避しきれない。

シュォォォォォォォォォォォッ……！

また床から魔力のオーラが噴き出し、シェゾの魔力を吸引した。

「くそっ!!」

悪態をつきながら、シェゾはまた〝魔力吸引のワナ〟を解除する。しかし、今度は〝仙人酒〟を飲まない。またワナに引っかかったら飲むだけムダだからだ。

そしてシェゾはまた歩を進める。その途端、

「痛ぇっ!!」

脚に激痛が走った。見ると、床にとがった小石のようなものがばら撒かれている。〝まきびしのワナ〞だ。

「くそっ！　こんな初歩的なワナに……！」

シェゾはワナを解除し、脚の傷みをなんとか堪えながら前に進む。すると今度は、

ドッカァンッ！

「うぉぉぉっ!!」

いきなり床が爆発した。爆風の熱と衝撃で、シェゾはしたたかダメージを受ける。

それを解除してまた一歩進むと、

カチッ！

またまたスイッチの音がした。それと同時に、床から猛烈な火柱が上がる。

「くっ！」

間一髪ではあったが、今度は避けることができた。しかし、避けた先の床がまた、

カチッ！

と音がする。すると今度は、けたたましいアラームの音がフロア中に鳴り響いた。

「なんだこれは!? ワナだらけじゃないか!!」

それを解除して進むと、今度は〝虹色光線のワナ〟、

さらに〝まっくらのワナ〟、

そして〝かなしばりのワナ〟、

ついには〝浮遊のワナ〟と、ワナというワナに引っかかり、ときにはうまく回避し、そして解除しまくった。以前にショップのももからもらった〝ワナ能力〟のスキルアップにつながりはするものの、これではうっとうしくてしょうがない。

「………………」

さしものシェゾもこれにはイライラし、声も出ない。一歩進むごとにワナが現れるのだ。この場にいるのがルルーであれば、今ごろはフロアごとブチ壊すと大騒ぎしているところだろう。

そんなワナ地獄を、発見(引っかかったか回避できたかは問わず)と解除を繰り返しながらなんとかフロアを進むと、やがて人影を発見。

それは、この〝ホラーハウス〟の入り口で出会ったブラックキキーモラだ。

「……?」

見ると、ブラックキキーモラはモップで床をごしごしやっている。掃除でもしているのだろうか……?

シェゾがその掃除の跡とおぼしき床を踏んだ瞬間、

シュォォォォォォォォォォォッ……！
　またまた〝魔力吸引のワナ〟にひっかかり、シェゾは魔力を失ってしまう。
「うぬぅっ!!」
　これには、さすがのシェゾもブチ切れた。
「おい！　ブラックキキーモラ!!」
　とシェゾが怒鳴ると、ブラックキキーモラはシェゾのイライラを煽(あお)るようにゆっくりと振り返った。
「なんだ、お前か……」
「お前かではない！　このワナ地獄はキサマがやったのか!?」
「だったらどうした？　それがオレの仕事だ」
「少しは程度を考えろ！　フロアがワナだらけだ！」
「サービスだ。ありがたく受け取れ」
「ありがた迷惑だ！」
「その物言い、気にいらねぇな」
　いうが早いか、ブラックキキーモラはシェゾに肉薄。そしてモップを振りかぶる。

「モップでいちげきっ！」
ガキィンッ！
その一撃を、シェゾは闇の剣で受け止めた。
「そっちがその気なら相手になってやる！　フレイム！」
ゴォッ！
シェゾの指先から発した火の玉が、一直線にブラックキキーモラに襲いかかる。
「ふふん、かゆいぞ」
しかしブラックキキーモラはたいしてダメージを受けていない。
「今度はこっちの番だ！」
ブォンッ！
とブラックキキーモラはモップでなぎ払う。
どふっ！
「ぐっ！」
モップがシェゾのわき腹にヒット。しかし、思ったほどのダメージはない。ブラックキキーモラも闇のモンスターだからだ。
「フレイムでダメなら……ブリザード!!」

ビュォォォッ！
氷の嵐がブラックキキーモラを包み込むが、これも有効打を与えることはできない。
「お前の力はそんなものか？」
とブラックキキーモラがあざ笑う。
「しかし、こっちの攻撃もあまり効かないのではラチがあかんな。……ならこうしてやる」
ごしごしごしごし……。
突然、ブラックキキーモラはシェゾの周りをモップで拭き始めた。つまり、シェゾの周りをワナで埋め尽くしたのだ。
「ここを通れるもんなら、通ってみな」
「くそっ……！」
遠巻きに見ながらあざ笑うブラックキキーモラに、シェゾは歯嚙みした。そのとき、
「……！」
ふと、昨夜に見た攻略本の中身を思い出した。それには確か、ブラックキキーモラは闇系モンスターには珍しく、光の魔法に強いと書いてあった。
つまりそれは……、
「これならどうだ!!　アレイアード!!」

ドドォンッ！

「きゃぁあっ！」

シェゾの周りの空間が、闇のエネルギーで大爆発を起こした。それに巻きこまれ、ブラックキキーモラはあえなく〝ばたんきゅ～〟。

「やはりな……」

光の魔法に強いなら、闇の魔法には弱いのではというシェゾの予想は見事に的中した。

「まったく、よけいな手間取らせやがって……！」

しかし当のシェゾも、とっておきの必殺技を使ってしまったため、かなり疲弊している。その疲れた身体をひきずるようにしてブラックキキーモラのワナ地獄を抜け、先を急いだ……。

六　合成のススメ

――「なるほど、こうすればいいのか……」

手に入れたアイテムをながめながら、シェゾはひとりごちた。

「いまさら見つかってもなぁ……」

八階に来て、シェゾは早速アイテムを入手。識別してみると、それはしかし〝呪(のろ)い避けのお守り〟だった。

決して役立たずのアイテムではないが、このフロアでは必要ない。呪い攻撃を得意とするシャドーは、〝ホラーハウス〟前半のフロアにしか出てこないからだ。

「こういうのは早めに見つかって欲しいものだ……」

ひとりで愚痴をこぼしながら、シェゾはお守りをバッグにしまおうとする。これから先で役に立つかもしれないし、そうでなければショップで売ればいい。

が、バッグがいっぱいでもうこれ以上アイテムを入れることができない。

「マズったな、詰めこみすぎたか。しかたない、少し整理するか……」

シェゾはその場に座り、バッグの中のアイテムを床にブチまけた。そして、アイテムの種類

ごとにより分けていく。
　おおよその内訳は、〝回復の薬〟〝仙人酒〟などの回復系、〝大盛カレーライス〟などの食事系、〝脱出口の巻物〟、そしてさまざまなお守りの類。
「まず、これは絶対に捨てるわけにはいかん」
　と、シェゾは〝脱出口の巻物〟をバッグに入れた。ここはまだ八階。スケルトンTの話によるとようやく半分といったところだ。これから先、何が起こるかわからない。緊急時の脱出のために〝脱出口の巻物〟は必要不可欠である。
「これもだな」
　今度はいくつかの〝仙人酒〟〝魔導酒〟をバッグにしまう。魔導師であるシェゾに、このような魔力回復アイテムは命綱に等しいといえる。しかし、〝仙人酒〟を一本だけ外に残しておいた。
「あと、これも……」
　〝回復の薬〟〝カレーライス〟をひとつずつ残して、シェゾは残りの回復アイテムと食事をバッグにしまった。〝仙人酒〟〝回復の薬〟〝カレーライス〟を残しておいたのは、いまこの場で飲食して、魔力体力胃袋ともにすべて満タンにしておこうと考えたのだ。少しぐらい効率が悪くとも、ただ捨ててしまうよりははるかにマシだ。
「問題は、こいつらか……」

最後に残ったお守りの類を見渡して、シェゾはため息をついた。これらお守り群がバッグのほとんどの容量を占めているからである。回復系アイテムなどと違って、ひとつ持って（装備して）いれば事足りるが、やたらと種類の多いのが悩みのタネ。

〝炎のお守り〟や〝冷気のお守り〟のような属性攻撃から身を守るものもあれば、〝耳のお守り〟のように例えばパノッティの笛やハーピーの歌声のような攻撃を防御するお守りも存在する。

シェゾは、それらのお守りのほとんどを持っていた。バッグがいっぱいになるわけである。

「しかし、ここで中途半端に捨てるのもなぁ……」

確かにこれから先、どんな攻撃を仕掛けられるのか分からないのに、せっかくどんな状況にでも対応できるように揃えてあるお守りを、ヘタに捨てるわけにはいかない。だが、こんなにたくさんあっては、肝心なときに目的のお守りがすぐに見つからないかもしれない。

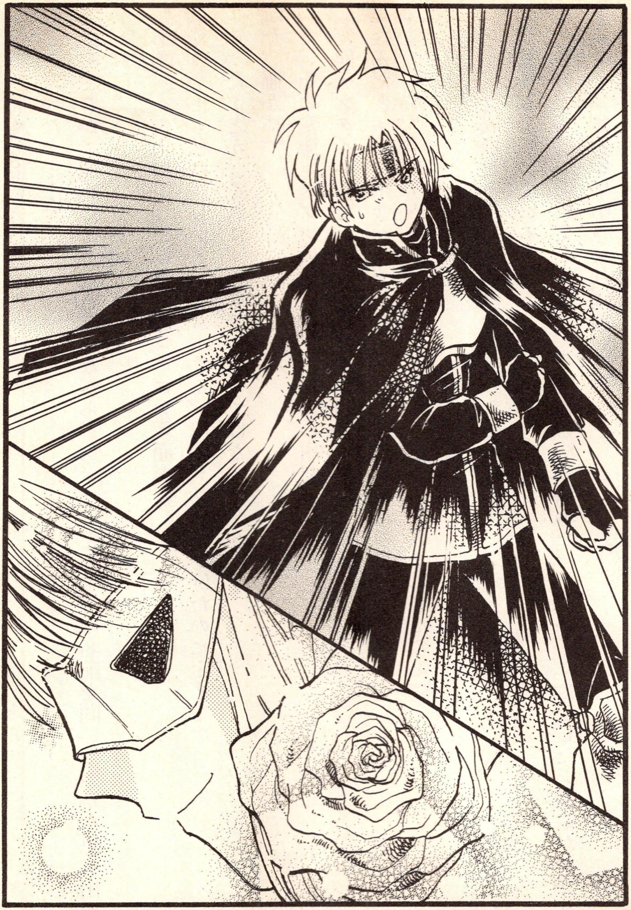
「どうしたものか……、ん？」

ふと、シェゾはあることを思い出した。

「そういえばこないだ、ももも に〝合成能力〟をつけてもらったな」

ショップのももも は、店で購入した金額に応じて、いろいろとサービスしてくれる。ひとつめがアイテムを識別する〝識別能力〟で、ふたつめがワナを発見・解除する〝ワナ能力〟、そしてみっつめが指輪やお守りを合成する〝合成能力〟である。

「ひとつやってみるか……」
シェゾは、〝耳のお守り〟を右手に、〝眼のお守り〟を左手に持ってみた。しかし、
「どうやって合成すればいいんだ……？」
ふとした疑問が頭に浮かぶ。
ももには能力が使えるようにしてもらっただけで、使い方を聞いていないのだ。
その理由は、「まぁ攻略本を見ればいいや」とその場では思ったから。しかし、その攻略本はない……。
そこへ突然、
『わはははははははははははははははははははははははははは……!!』
奇妙な笑い声がフロア中に響き渡った。
「誰だ!?」
シェゾは立ちあがって周りを見渡すが、誰もいない。
「誰だ！　出て来い！」
『残念ながら、姿をお見せすることはできませーん』
「何者だ!?」
『人呼んで〝仮面の貴公子〟マスク・ド・サタン！　困ったときのあなたの味方でーす！』
「マスク・ド・サタン……？　聞いたことがあるぞ」



うとする。
声もどこかで聞いたようなと思いながら、シェゾはどこでその名前を聞いたのかを思い出そ
「どこだったか……」
『ほう、私も有名になったものだ』
「ああ、ルルーのいっていた変態コスプレ仮面か」
『くぅっ！　私は哀しいぞ、ルルーくん。何度も助けてあげたのに……！』
「知ったことか。それに、オレはルルーではない」
『た、確かに』
「で、その変態コスプレ仮面がオレになんの用だ？」
『変態ヘンタイいわないでくれ、キミだって変態じゃないか』
「なんだとぉ!?　キサマ、オレにケンカを売りに来たのか？」
『違うチガウ、そうじゃない。私はキミにいいことを教えに来たのだ』
「いいこと？」
『そう、合成のことだ。キミは合成のしかたを聞かずに来たろう』
「何故それを知っている？」
『それはまぁ置いといて……なに、合成の方法は簡単だ。手のひらに合成したい指輪かお守りを乗せて、魔力を集中させればいい』

「それだけでいいのか？」
『手順としてはな。肝心なのは、魔力を集中させると同時に、合成した後のアイテムの姿をしっかりと頭に思い浮かべることだ』
「……？」
『例えば、〝炎のお守り〟と〝冷気のお守り〟を合成すると、〝魔法のお守り〟になる。つまり、相反する属性が融合することにより、魔法全般に効果が得られるようになるわけだ』
「なかなか難しいな」
『いや、そうでもない。要は、「これとこれを組み合わせたら、こんな効果になるんじゃないかな」と念じていればいいだけだ』
「なるほど」
『とりあえず、試しにやってみるといい』
「あ、ああ……」
いわれるままにシェゾはバッグから〝炎のお守り〟と〝冷気のお守り〟を取りだし、右手のひらに乗せた。そして、指輪に意識を集中させる。
「むぅっ……」
するとやがて、お守りは小さな魔法の光となり、合体し、光が薄れて行く。そしてそこに現れたのは、先のふたつとはまったく異なるお守り。

識別すると、それはマスク・ド・サタンのいったとおり〝魔法の指輪〟であった。
『なかなかやるじゃないか。初めてでこんなにあっさり合成できるとは』
「ふぅ……」
『しかし、この合成も万能ではない。いくつかの約束事がある』
「というと？」
『ひとつは、指輪は指輪同士、お守りはお守り同士でしか合成できない。指輪とお守りを合成することなどもってのほか、というわけだ』
「ふむ」
『次に、同じアイテム同士を合成すると、効果がアップする』
「なるほど」
『最後に、合成することができない指輪やお守りが存在する、ということ』
「それはどういうことだ？」
『つまり、合成してもそれ以上の効果が得られないということだ』
「どうやったらそれはわかる？」
『合成してどんな効果になるかが想像つかなければ、潮時だな』
「ふむ……」
『というわけで私の講義は終わりだ。ではアディオス・アミーゴ！』

そしてマスク・ド・サタンの声は、高らかな笑いとともに消えていった。
「合成か……」
つぶやきながら、シェゾは〝耳のお守り〞と〝眼のお守り〞を再び手に取った。
「こいつを合成したら、つまり耳と眼のお守りができるということか……？」
と、ふたつのお守りを手に乗せて、魔力を集中させてみる。すると、再びお守り同士がまばゆい光に包まれ、そしてひとつになった。
識別してみると、それは確かに〝眼と耳のお守り〞。
「ほう、これは面白い」
次にシェゾは、この〝眼と耳のお守り〞と〝鼻のお守り〞を合成してみることにした。「見ざるいわざる匂わざる」だ。
魔力を集中させると、〝無覚のお守り〞が完成。
「なるほどなるほど……」
能力に満足しながら、シェゾはたったいまできたばかりの〝無覚のお守り〞を装備した。
そのとき、
「ふしゅ〜〜〜〜〜っ……！」
イキナリ毒々しい色の霧がシェゾを取り囲んだ。

「……っ!!」

鼻が曲がりそうな異臭だ。しかし、それ以上のものではない。

「…………」

にやり。

シェゾは合成の効果に満足した。すぐに〝無覚のお守り〟を装備したのは、この異臭を放つモンスターが現れることを知っていたからだ。この異臭は、なにも対策を講じていなければ、食べ物を腐らせてしまうイヤな効果を持っている。

しかし、〝無覚のお守り〟のおかげで影響はない。ひとつ問題があるとすれば、モンスターの姿が見えないこと。だがそれも、シェゾに取っては大したことではない。

「ファイアーストーム!!」

ドドドォンッ!!

シェゾの呪文(じゅもん)と同時に、彼の周りが大爆発。

「うげぇ!!」

その爆発にまきこまれた透明モンスターが姿を現し、そして〝ばたんきゅ〜〟した。そいつは、腐った死体モンスターの〝ゾンビ〟だった。

昨晩に読んだ攻略本で、シェゾはゾンビのことを知っていたのだった。

「ふぅ……」
しかし、なんだか妙に疲れた。ため息をつき、シェゾは思わず壁によりかかる。
「なんだ？　この脱力感は……？　ゾンビの腐臭にこんな効果があったか……？」
『わははははははははははははははははははははははははははははははははは……!!』
そこへ、再びマスク・ド・サタンの声。
「また何の用だ？」
『すまん、キミにいい忘れたことがあった』
「なんだ？」
『合成は非常に魔力を消費する。気をつけたまえ』
つまり、シェゾの脱力感は魔力が残り少ないからだった。
「ふざけんな！　そういうことは先にいえ!!」
『わはははははははははははははははははははははははははははははははははは……!!』
フロア中に、マスク・ド・サタンの高笑いがこだまする……。

七　魔女の暗躍
――「またぞろ何を企んでやがる……？」

　そんなこんなで、シェゾはようやく十五階に到着。すると、
「おい――――――――――っす！」
　聞きなれた黄色い声がシェゾを出迎えた。
　見るとフロアの真ん中に、金髪で青い衣服に身を包み、ホウキを持った女性が立っている。
「何故キサマがここにいるんだ？　ウィッチ」
　シェゾはウィッチを睨(にら)みつけていい放った。
「そんないいかたしなくたっていいじゃありません？」
　妖艶(ようえん)な美女がまとわりつくように、ウィッチはいう。といっても、本人はそのような容姿ではなく、むしろアルルのような幼顔。
「アタシはお客ですわ」
「だったら、なおさらだ。オレはキサマなんかと戦いにきたんじゃない。ボスはどこだ？」

「残念ながら、ボスはいませんわ」
「なんだと!?」
「ちょっと休憩を取ってもらってるの。結構よろこんでましたわ」
「何故そんなことをする!?」
「きまってるじゃありませんこと？」
と、ウィッチの明るい表情が毅然となる。
「アナタと戦うためですわ！」
「ほう……」
シェゾは感心した。同時に、いつにないウィッチの真剣さに驚きもした。いつもなら、笑顔をはりつかせて、ここにいる理由をごまかしたりするのだが。
「いつも陰でコソコソしていたキサマが、堂々と宣戦布告するとはな」
「エリート魔女としてのプライドですわね」
「ほう？」
「他の有象無象ならともかく、アナタやアルルやルルーに〝すっごい魔法のアイテム〟を渡すわけにはいきませんわ」
「何故、オレたちだとダメなのだ？」
「それだけアナタ方を高く評価しているというコトですわ。……それではご不満？」

「まぁいいだろう」
シェゾはやや気のない返事。ゴソゴソとアイテムバッグをあさり始める。
「で？　オレと戦うのか？」
「それがアタシの目的ですわ。……このチャンスを狙っていたんですもの」
「どういうことだ？」
「あなたの力が落ちている、このときをですわ」
「やはりな……」
「それはどういうことですの？」
気のないシェゾの返答に、ウィッチが逆に訊いた。
「キサマ、以前に〝時空の水晶〟のダンジョンをウロチョロしてたろう。ならば、オレがあのクソ水晶にパワーを奪われたことを知っていてもおかしくはない」
シェゾは、バッグをごそごそやりながら話し続ける。
「で、いまのうちにオレを倒して、魔力を根こそぎ奪おうというのだろう？」
「う……」
「まぁ、それ自体はたいしたことじゃない。オレだってそうするしな」
「………」
「で、オレのパワーを自分のものにしたあとで、ゆっくりアルルやルルーを料理するという魂

胆なわけだ」
「さすがですわね。やっぱりアナタを最初のターゲットにして正解でしたわ」
「それは懸命な判断ではある」
「……ひとつ訊いてよろしいかしら？」
「なんだ？」
「アナタ、戦う気があるの？」
「キサマにオレと戦う気があるのなら、いつでもどうぞ」
「……！」
カチン！
シェゾのセリフに、ウィッチは額に〝怒りマーク〟を浮かび上がらせた。
「なら、遠慮なくやらせていただきますわ！」
と、ウィッチはホウキを握った両手を高々と上げる。
「食らいなさい！　メテオ!!」
「なに!?」
イキナリの超強力呪文に、さしものシェゾも驚愕(きょうがく)。しかし、もう遅い。
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……!!
天井に異次元の扉が開き、その向こうの宇宙空間から無数の隕石(いんせき)がシェゾ目掛けて降り注ぐ。

「うぉぉぉぉぉっ……!!」

ガドドォンッ!!

隕石群はシェゾを巻き込み大爆発。

「やりましたわ！」

ウィッチは思わずガッツポーズ。

「あれだけ大口を叩いておいて……、情けないですわね」

「果たしてそうかな……？」

ウィッチの言葉に、爆風の中からの声が応えた。

「ま、まさか……!?」

今度はウィッチが驚愕。なんと、あれだけの隕石の雨を浴びながら、ほとんどダメージも受けずにシェゾが立っているのだ。

「これが禁呪と謳われたメテオの呪文か……？　思ったほど大したことはないな。……それとも、使い手が単に未熟なだけなのか？」

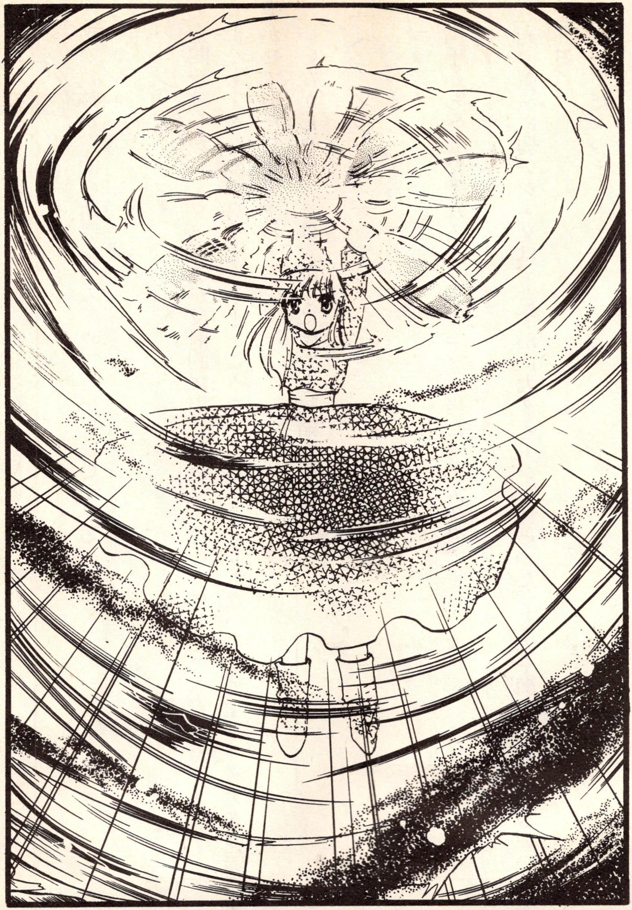
「くっ……！」

「こいつで充分防げたぜ」

いいながら、シェゾは首に下げたお守りをつまんだ。そのお守りは、青白い光を放っていた。

「そ、それは〝魔法のお守り〟……!? いつのまに……!?」
「キサマがしゃべくってる最中につけさせてもらった」
シェゾがバッグをごそごそやっていたのは、この〝魔法のお守り〟を探していたのである。見つけるのにやはり苦労したが、相手がしゃべっている間だったので助かった。
「ひ、卑怯ですわ……!」
「用意周到といってくれ。キサマはオレと戦うことが分かっているのに、メテオ以外に何も準備していなかったのか？　魔導師同士なら魔法合戦になることは眼に見えているだろう」
「…………」
「オレをナメすぎだな。それとも、実戦経験が単に浅いだけなのか……。どちらにしても、お前の負けだ。戦いは呪文の強さだけで決まるものではない」
いいながら、シェゾは闇の剣をスラリと抜く。そして、そのままウィッチに突進。
「ゆっくり反省しな！　くらえっ!!」
シュバッ！
とシェゾは闇の剣で斬りかかる。しかし、
ガッキィンッ！
「ナニィ!?」

予期せぬ手応えに、シェゾは度肝を抜かれた。なんと、ウィッチが剣士さながらの動きで、闇の剣をホウキで受け止めたのだ。
「ぐっ……！」
しかし体力の差はいかんともしがたく、あまりの衝撃にウィッチはひざをつきそうになる。だがすぐに持ちなおし、
「アタシも魔法だけじゃありませんわ……！　旋風陣!!」
ゴォォォォォォッ……!!
ウィッチはホウキをぐるぐると回し、竜巻を作り出す。
「ぬぉっ！」
驚愕のあまりシェゾは反応が遅れ、旋風陣による竜巻をモロに食らってしまう。
「な、なかなかやるな……。キサマがそんな技を使うとはな……。甘く見ていたのはオレだったか……ん？」
不意にシェゾは違和感を感じ、自分の胸元を見やる。なんとそこにあった〝魔法のお守り〟が、砕けて半分ほどになってしまっていたのだ。これでは魔法を防ぐ効果は得られない。
「くそっ！」
カシャ——ンッ！
怒りのあまりシェゾはお守りのかけらを叩きつけるように投げつけ、そして剣を横に構える。



「キサマの体さばきで、これがかわせるか!? 食らえ! 空間斬!!」

シュバァッ!!

剣の軌跡が空間の断層を生み、ウィッチに襲いかかる。

「きゃあっ!」

バッシィ——ンッ!

空間斬はしかし、ウィッチが反射的に出したホウキを粉々にしたのみだった。

「よくもアタシのホウキを……! こうなったら、お守りもないことですし、アナタの弱点を突かせていただきますわ!」

いいながらウィッチは、両手に魔力を凝縮し始める。

「ヘブンレイ!!」

ゴォッ!

両手から発した聖なる光が、シェゾに当たって大爆発。

「ぐはっ!」

光の魔法に弱いシェゾは、さすがに大ダメージを食らった。もはや瀕死といってもいい状態である。

「まだまだぁっ……!」

しかしシェゾは力を振り絞り、両手に黒い魔力のエネルギーを凝縮する。
「そっちが光ならこっちは闇だ!!　アレイアード!!」
ドッゴォンッ！
気合い一閃(いっせん)、闇のエネルギーがシェゾの周りで大爆発。
「きゃぁぁぁぁっ……！」
ウィッチはそれに巻き込まれ、その場にくずおれた。
チャキッ！
すかさずシェゾはウィッチに近づき、その喉元(のどもと)に剣の切っ先を近づける。
「だからいったろう、キサマの負けだと」
「くっ……」
「キサマには、質問にみっつほど答えてもらう。サタンを殺した犯人は、キサマか？　それと、なぜあのときキサマは〝時空の水晶〟のダンジョンにいた？　最後にこの遊園地は水晶と関わりがあるか知っているかどうかだ」
「……」
「答えろ！　さもなくばこのまま首を落とすぞ」
「……」
ウィッチは、ゆっくりと顔を上げた。そして、

「あ――――っ!!　あんなところに〝メテオの魔導書〟!!」
「え!?　どこどこ!?」
かねてからメテオを欲しいと思っていたシェゾは、図らずもウィッチの指差した方向を見てしまった。そして「あっ!」と気づいたときにはもう遅く、ウィッチの姿は忽然と消え去っていた。どうやら〝脱出口の巻物〟を使ったらしい。
「し、しまった……!　ん?　これは……?」
ウィッチが先ほどまでいた場所に、真っ黒な宝珠が転がっていた……。

八　そして地上へ

――「犯人が見えてきたぞ……」

「くそっ!!」
地上に帰ったシェゾは、それでも怒りが収まらず、手近にあったゴミ箱を蹴飛(けと)ばした。
とにもかくにも、メテオの誘惑にちょっとでも心を動かされた自分に腹が立つのだ。
「ウィッチのヤツ、今度会ったらタダではおかん……!」
彼女が何らかの形で暗躍しているのは、もはや火を見るより明らか。となると、また遭遇することもあるだろう。彼女も〝すっごい魔法のアイテム〟を狙(ねら)っていることもわかった。
「まさか、サタン殺しはヤツの陽動……?」
と考えてもみるが、どうしても無理がある。なぜなら、ウィッチごときにサタンが倒せるとは思えないからである。本気でやるなら、予期せぬところから奇襲をかけるしかない。
「……!!」
そこまで考えて、シェゾはあることに思い至った。

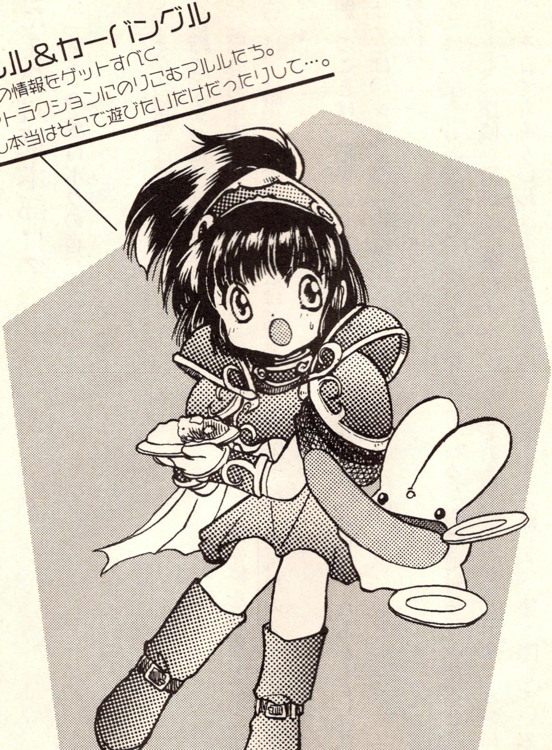
アトラクションには、恐らくスタッフ専用の通用口がある。でなければ、スケルトンTもブラックキキーモラも先回りできるはずがない。

「まさか犯人は、それを使ってサタンを……？　となると容疑者が絞れてくるな……」

シェゾは自身の成果に満足感を得つつ、対策本部へと向かった……。

ワンダージャングル

"犯人は……!?"



一　またまた対策本部にて

――「さぁ、今度はボクの番だ！」

「……以上で、オレの報告は終わりだ」
と、シェゾは締めくくった。
探偵の待つ〝緊急対策本部〟へと戻り、〝ホラーハウス〟での一部始終を報告したのである。
しかしシェゾは、〝時空の水晶〟のことは話さず。十五階で拾った〝黒のオーブ〟も探偵には渡さなかった。
〝時空の水晶〟のことは、結果として自分の恥まで話さなければならなくなるかもしれないからだ。そんなことは、シェゾの〝悪の華〟としてのプライドが許さない。もともとシェゾ個人の問題でもあるし。
〝黒のオーブ〟は、〝すっごい魔法のアイテム〟を手に入れるために絶対必要になると直感したからだ。もっとも、探偵か誰かが〝黒のオーブ〟のことを知っており、「出せ」といわれたら終わりだが。それでもそういわれるまでは秘密にしておくことにした。後で隠していることがバレても「忘れていた」といえば終わりだ。

『なるほど……、ご苦労様』
探偵はパイプをくゆらせながらいう。
『他に何かあるかね？』
「……!!」
シェゾはドキッとした。探偵に隠していることを見ぬかれたと思ったからだ。このような訊き方をして自白させるところが、ますます［探偵＝ルシファー］だとシェゾに確信させる。
しばしシェゾは、正直に話すべきか迷った。だが結局、
「特に何もない」
と知らぬふりを決めこむ。すぐさま探偵のツッコミが来るかと思ったが、
『わかった』
探偵はあっさりとシェゾの言葉を信じた。
「いや……！　ひとつだけある」
急に思い出したようにシェゾはいう。しかし〝黒のオーブ〟のことを正直に話そうというワケではない。本当に報告し忘れていたことを思い出したのだ。
「これは、報告ではなくオレの推理なんだが……」
『何かな？』

「アトラクションには、スタッフ専用の通用口があるはずだ」
『確かに、そういったものはどこにでもあるな。ここも例外ではないだろう』
「犯人はそこからサタンの背後に回りこんで奇襲したのではないか？　表側の扉はオーブを使わなければ開かんが、それは客であればの話でしかない」
『ふむ、いちいちもっともだ』
「そこでオレは考えた。スタッフの誰かが犯人なのではないか……？　とな」
『なるほど。それはいい推理だ……助手よ』
「なんですぞ？」
探偵が呼びかけると、後ろに控えていた助手が答える。
『職員名簿を見せてもらえないか？』
「これですぞ」
すでに用意して待ち構えていた助手は、紙の束をはさんだクリップボードを探偵に渡した。
『ふ～む……』
探偵は、パイプをくわえたままクリップボードの書類をパラパラとめくる。
『スケルトンT、さそりまん、ドラコケンタウロス、すけとうだら、うろこさかなびと、パノッティ、ハーピー、ももも、キキーモラにブラックキキーモラ……。これを見る限りでは、いかな奇襲とはいえサタンを倒せるスタッフがいるとは思えんな。ドラゴンやアウルベアあたり

なら、かなりの実力者ではあるが……』
「もちろん、外部の者が犯人である可能性はオレもゼロだとは思っていない。小ざかしいウィッチあたりなら簡単にやってのけるだろう」
『もっと突っ込んでみる必要があるな』
「ああ」
「じゃぁさ、今度はボクがその辺を重点的に調べてくるよ」
と立ちあがったのは、元気少女のアルル。
「〝ワンダージャングル〟に行ってさ」
『アルルくん、〝ワンダージャングル〟に行きたいのか？』
いたずらっぽい笑みを浮かべて、探偵はアルルに尋ねる。
『それは何故かね？　キミひとりが危険を冒してまで調べに行くことはないんだ。必要なら皆で当たればいい』
「そ、それは……」
アルルはしばし言葉に詰まるが、やがて観念したように肩をすくめる。
「ボクは今回も手がかりは見つからなかったから、今度こそせめて何か情報を持って帰りたいなぁ、と思って……。それに……」
『それに？』

「ルルーもシェゾも、〝どきどきコース〟とか〝ホラーハウス〟とか新しいアトラクションに行けていいなぁ、と思って……。ボクも行きたいなぁ、って……」
「あたくしは悪いけど遊びにいったワケじゃないわよ」
とルルー。
「そ、それはわかってるけど……」
「まぁ、悪の変態魔導師シェゾさんは、修行だとかいって何か企んでることがあったみたいだけど？」
「ふん……」
ルルーの揶揄（やゆ）に、シェゾは鼻をならした。
『新しいアトラクションで遊びたいと思うのはかまわんさ。そのほうがアルルくんらしいし』
「どういうこと？　ボクらしいって」
『いや、その……』
うっかりはいてしまったセリフに、探偵はちょっち狼狽（ろうばい）。
『キミは非常に正直者だと思っただけだ。……それはともかく、犯人探しの件だけは忘れないでくれ。それなら行っていいよ』
と探偵はアルルに〝ＶＩＰチケット〟を差し出す。
「ホント!?　ありがとうルシファー先生……じゃなかった探偵さん」

アルルはチケットを受け取ろうとした。しかし、

「ぐー！」

びろ〜〜〜〜〜ん。

長い舌が横からイキナリ伸びてきて、アルルより先に探偵の手からチケットを奪ってしまう。

「あ――――――っ!!」

犯人はウサギのような耳を持った黄色い生き物、カーバンクルだった。カーバンクルは舌でつかまえたチケットを、そのまま口に持っていく。

「カーくん！　それ食べちゃダメ――っ!!」

パシッ！

すんでのところで、アルルはなんとかチケットをカーバンクルから奪い返した……。

二　〝ワンダージャングル〟入り口

――「どこでもそんなもんなの……？」

そこは、まさに〝不思議の密林〟というカンジ。

その壮大な景観に、アルルはオマヌケなため息とともにしばし見入っていた。

〝ワンダージャングル〟の区画は高い壁で囲まれており、門をくぐって中に入れば、そこはもううっそうとした密林だった。

「ほぇ～……」

だがその白い壁は、その役目をほとんど果たしていない。なぜならば、ジャングルの真ん中に塔のように大きな樹がそびえたっていて、その巨木の根っこが壁の外にはみ出しているからだ。まるで巨木が意思を持っていて、「よっこらしょ」と壁をまたいで自由になろうとしているかのよう。

その巨木にはまるで窓のようなウロがいくつかあって、どうやらこの樹がアトラクションの建物自体になっているらしい。はるか上のほうで、何羽かの鳥たちが巨木のまわりに飛び交っているのが見える。

「はぁ〜……」
「ぐー……」
アルルとカーバンクルが〝ワンダージャングル〟の景観に眼を奪われていると、
「ここに入るんでっか？」
突然、何者かに声をかけられた。
見ると、さそりまんがいつものニコニコ顔で眼の前に立っている。
「う、うん。そのつもりだけど……。もしかして、さそりまんって〝ワンダージャングル〟のボスもやってるの？」
「ちゃいますがな。ちっと休憩しとっただけですねん。ここの自然は、昼寝にも結構ええところですからな」
「モギリの仕事は？」
「ああ、ルルーはんのおかげでラクさせてもろてますわ。ドラゴンだけやのうて、パノッティも手伝うてくれるようになったさかいな」
「それはルルーから聞いたよ。よかったね」
「ホンマはちっと忙しいくらいがワテは好きなんですねんけどな。まぁ、たまには息抜きも必要や思いましてな」
「そうだね。ボスもやってモギリもやってじゃ大変でしょ？」

「いやぁ、そんな優しい言葉をかけてくれるのはあんただけですわ」
「あ、そうだ！　ところでさー……」
　ふとアルルは思い出し、さそりまんに尋ねる。
「アトラクションには通用口――っていうの？　そんなようなモノってあるの？」
「そらありまっせ。でないとボス役のスタッフが配置につけまへんしな。ナンか事故があったときにも困りまっしゃろ」
「そうだね」
「なんでそんなコト聞きますん？」
「ほら、サタンって、オーブがないと開かない扉の向こうで殺されてたじゃない？　だとすると、犯人はその通用口を使って回りこんだんじゃないかって。そのセンで調べてみようって、探偵さんとの話し合いでそういう結論になったんだ」
「そうやったんでっか。確かにその可能性はあるかもわかりまへんな」
「その辺で、何か知らない？」
「いや～、ワテはようわかりまへんな。ちょうどモギリの仕事で忙しかった頃やし……」
「そっかぁ……」
「すまへんなぁ、役に立てんで」
「ううん、そんなことないよ。じゃあ、何かわかったら教えてよ」

「そうさせてもらいますわ」
「じゃあ、ボクはちょっと〝ワンダージャングル〟に行ってくるね」
「あ、ちょっとちょっと待ちなはれや」
踵（きびす）を返してアトラクションに向かうアルルを、さそりまんは慌てて引きとめた。
「なに？」
アルルは振り返る。
「あんた、これから〝ワンダージャングル〟に行かれますんやろ？」
「そうだけど」
「ほしたら、ええこと教えたげますわ」
「どんな？」
「ここのボスはな、滅法強いですねん。気をつけたほうがよろしで」
「そんなに強いの？　もしかして、サタンを殺せるくらい？」
「それはどうかわからんが、とにかく強いですねん。これが、驚いたことに相手の心を読むんですわ。なんでも相手の攻撃を先読みしてまいますねん」
「それ、強いっていうよりズルイよ。それじゃ勝てないじゃない」
「いやでもな、実は先読みも百パーセントやないらしいでっせ」
「でも、かなりズルイよね」

「そうですな。まぁ、あんたが気ぃつけなあかんのは、攻撃を避けられたときのスキですな。先読みできるいうことは、相手のスキも突きやすいいうことですからな」

「まぁこっちもボスが先読みできることを知ってれば、なんとかなるかも……。ありがとう、さそりまん」

「いやいや、どういたしまして。……おっと、そろそろモギリに戻らなあきまへんな。ほしたらワテは行きますで」

「うん、じゃあね」

「がんばりぃや」

さそりまんはスタコラと去って行った。アルルはその後姿をしばし見送っていたが、

「そーいえば……」

ふと、とある疑問が頭に浮かんでくる。

「園長のサタンが死んだっていうのに、どうしてここ（わくぷよランド）は何事もなかったみたいに営業してるんだろう……？」

三　腐ったものを食べてはいけません

――「なるほど、こういう使い方もあるんだ……」

ピチチチチチ……！

ガォォォォォォン……！

ギョアギョアギョアギョア……！

ダンジョンの内部も、外の様子に反することなく、まさにジャングルだった。

壁も床も天井も鬱蒼（うっそう）とした緑に覆われていて、注意して歩いていないとすぐに自分の位置を見失ってしまいそうになる。そしてBGMは、鳥のさえずりや猛獣の咆哮（ほうこう）、そして判別不能な動物の鳴き声。

「う～ん……」

アルルはその密林ダンジョンを、何やら考え込みながら歩いていた。

「ここって、やっぱり属性がないのかなぁ……」

〝ぷよぷよダンジョン〟を除いて、他のこれまでのアトラクションには何らかの核となる属性があった。〝ファイヤーマウンテン〟は炎だし、〝ウォーターパラダイス〟は冷気で、〝スター

ライトステージ〃なら雷と光、そして〃ホラーハウス〃は闇（やみ）というカンジ。
しかしこの〃ワンダージャングル〃には、アトラクションを象徴するような属性がなかった、というより判断しかねた。
なにしろ、ダンジョンに入ってからここまでに戦ったモンスターといえば、〃緑ぷよ〃〃亀ぷよ〃それに〃むてっぽうお〃。どれも前のアトラクションにいたやつばかりだ。しかも、弱点や得意技もバラバラ。
「う〜ん、困ったなぁ……」
ダンジョンに属性があるということは、それと同じ属性のモンスターが多く出てくるということ。一部の例外は確かにあるが。
つまりそれは、攻略法も見つけやすいということでもある。多くのモンスターは自分の属性の反対には弱いので、そこを突けばいいのだ。
しかしここ〃ワンダージャングル〃にはそれの判断材料がないので、アルルは悩んでいるのであった。一応、どんな状況でも対処できるようにさまざまな種類の魔法を修得してはあるが、
「ここがポイント！」という攻略法があるとやはりウレシイ。それにラクだ。
「でもまぁ……」
アルルはひとりごちた。
「モンスターのほとんどは前のアトラクションにもいたヤツばかりみたいだし、なんとかなる

かな。ね、カーくん」

「ぐー！」

とカーバンクルが答えると同時に、

「なんじゃぁ、やるんかー！」

眼の前に巨大トカゲにまたがった少年が現れた。少年の姿形はともかく、彼の乗っているトカゲがこれまでに見たことのない色をしている。少なくとも〝コドモドラゴン〟や〝コドモサラマンダ〟ではない。もちろん、他のアトラクションで見たことはない。

「………」

なんとかなりそうだと思った途端にコレである。アルルは神様を心の中でちょっち呪（のろ）った。

「サンダーじゃいやー！」

バチバチバチッ！

「イタイっ！　やったなぁ！」

モンスターの吐いた稲妻をよけそこない、アルルはしたたかダメージを受ける。しかし、

「そうか！　キミは〝コドモサウルス〟だね!?」

アルルはモンスターの正体を看破。

「なんじゃぁ、それがどーしたんじゃー！」

とコドモサウルス。

「それならこれだ！　ファイヤー!!」

ドッゴォンッ!!

「かんべんしてくれやー！」

コドモサウルスはアルルの放った炎をまともに食らい、あえなく〝ばたんきゅ〜〟。

「ふぅ、アブナイところだった……」

危機が去って、思わずアルルは額の汗をぬぐう。

アルルがコドモサウルスを看破できたのは、シェゾの落とした〝わくぷよランド〟の攻略本のおかげだった。たまたま開いたページに、コドモドラゴンの仲間で稲妻を吐くモンスターのことが載っていたからである。

「ちょっと、油断してたね。気をつけないと……」

と気を引き締めて、アルルは歩き出す。その途端、

ドンッ！

何かがアルルにぶつかった。

「?.?.?」

しかし、前方にはなにもない。鬱蒼としたジャングルなダンジョンが広がっているのみだ。

「う～ん、う～ん……！」
アルルは懸命に前進しようとするが、まるでそこに壁でもあるかのように進めない。
「ちょっと、カーくんも手伝ってよ」
「ぐー！」
「う～～ん、う～～ん……‼」
カーバンクルにも協力させてアルルはさらにがんばるが、やっぱりビクともしない。……それ以前に、カーバンクルがいたところでどうなるものでもない。
「やっぱりダメかぁ……。どうして進めないんだろう……？」
「ふしゅ～～～～～～～～っ……‼」
アルルが諦めると同時に、見えない壁からいきなり異臭が噴き出した。あまりにも毒々しい紫色の臭気だ。
「うわっ！　くっさ――――いっ！」
「ぐぐぅ～～！」
あまりの臭さに、さすがのカーバンクルもイヤな顔をする。
しかし、鼻が壊れるほど臭いことを除けば、他になんのダメージも影響もない。
「このクサさはゾンビだなぁ……⁉」
鼻をつまみながら、アルルは匂いの正体を看破。

「姿を見せなさい！　ファイヤー!!」
ドゴォンッ！
「ないぞうがないぞう！」
至近距離で放った火炎呪文(かえんじゅもん)を食らい、爆発の煙と同時にゾンビが姿を現した。
「うげぇ！」
しかしゾンビもまだ負けておらず、腐りかけてボロボロの腕でパンチを繰り出す。
「そんなの当たらないよ～だ。……うぐっ！」
のろのろと文字通りハエの止まりそうなパンチを、アルルはなんなく回避。だがその軌跡から立ち上る腐臭に、思わず顔をゆがめる。
「おウチに帰ってお風呂(ふろ)に入りなよ、すっごくクサいよ！　ファイヤー!!」
的外れなコトをいいながら、アルルは再びゾンビの苦手な火炎呪文。
ドゴォンッ！
「身体がとろけちまう……！」
ゾンビはようやく〝ばたんきゅ～〟した。
「ううっ、まだクサいよぉ……」
いまだ腐臭が残る現場を、アルルはさっさと立ち去る。
「でも、これが役に立ったね」

といいながら、首に下げたお守りをつまんだ。
それは、シェゾの合成した〝無覚のお守り〟だった。
「おかげで食べ物が腐らずにすんだよ」
「ぐー！」
カーバンクルも、「安心アンシン」とばかりに声をあげる。
「一応、食べ物は全部ビン詰めにしておいたから、大丈夫だったんだけどね」
アルルはアイテムバッグから、ビンでしっかり密封されたカレーライスを取り出した。ジャングルなら湿気が高かろうと思い、あらかじめ施しておいたのだ。
「でもお守りをワザワザ貸してくれるなんて、シェゾもけっこうイイやつだね」
「ぐー！」
アルルは、〝無覚のお守り〟を貸してくれとシェゾに頼んだわけではない。対策本部を出るときに、彼のほうから「これを持っていけ」と渡してくれたのだった。
その理由は、
「キサマをもらうのはオレだ。その前に死んでもらってはこまるからな」
だった。それでもアルルはシェゾに感謝している。
「まぁとにかく、備えあれば憂いなしってね★」
「ぐー！」

アルルはステップを踏むように先に進んだ。そこがアルルの悪いところである。すぐに調子に乗ってしまう。それに神の鉄槌が下されるのはそれほど後ではなかった。

「ふんふんふんふ〜ん……！」

鼻歌交じりに歩いていたアルルは、

カチッ！

思わず床のスイッチを踏んでしまった。

「あっ！」

と思ったときにはもう遅く、

バタン！

アルルの足元の床がイキナリ大きく開いた。

「わぁぁぁぁっ！」

そのままアルルは二メートルほどの落とし穴にまっさかさま！

どすん！

パリンパリンパリ――――ンッ……!!

尻餅の音に続いて、何かの砕ける乾いた音が落とし穴にこだました。

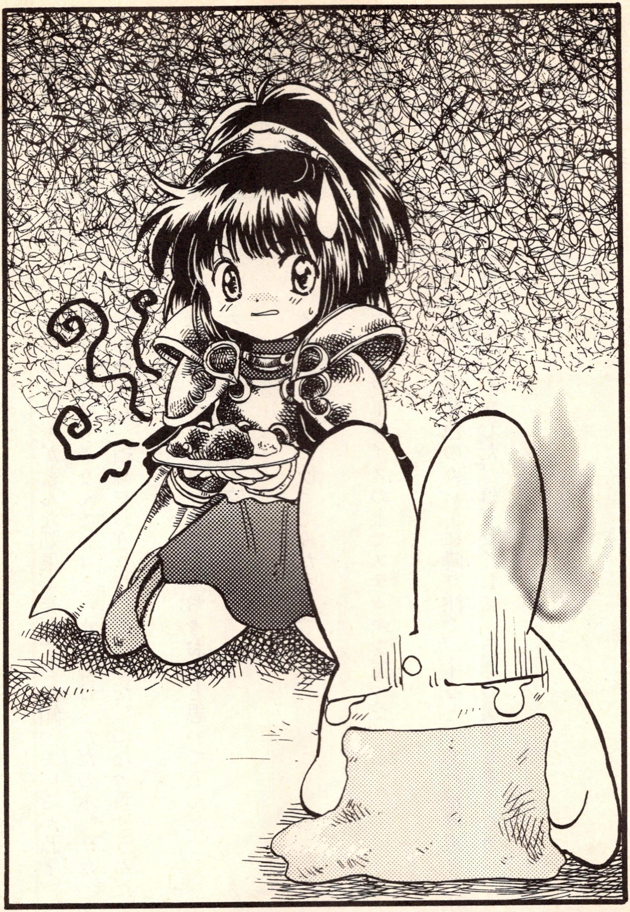
「ま、まさか……！」

イヤ——な予感がして、アルルはお尻の痛みも忘れてバッグを覗きこむ。
「あ————っ!!　やっぱり！」
予感は大当たり。食べ物を密封していたビンがすべて割れてしまっていたのだ。しかし食べ物がバッグの中でグチャグチャになっていなかったのは、不幸中の幸いといったところ。
「せっかく苦労してビンヅメしたのにぃ……！」
アルルは落とし穴から這い出し、バッグの中からビンのかけらをすべて取り出した。
そのときに、
「これもとりあえずしまっとこ。大きくてけっこうジャマなんだよね」
と〝無覚のお守り〟もバッグに入れてしまったのは、アルルのミスといえよう。
そしてそのミスをイヤというほど味わう機会はすぐにやってきた。
「ああっ!!」
カチッ！
できるだけ慎重に進んでいたにもかかわらず、アルルはまたしても床のスイッチを踏んでしまった。しかし今度は、落とし穴は開かなかった。
「よかった、作動しなかった……」
と安堵するのは早かった。
ふしゅ〜〜〜〜〜〜っ……！

突然、ゾンビの腐臭攻撃と同じような毒々しい臭気が、床から噴き出した。
「うわっ！　くっさぁ――いっ！」
しかも今度は〝無覚のお守り〟をしていないだけに、臭さ倍増。アルルは慌てて臭気から逃げ出した。
「………」
そして、恐る恐るバッグを覗いてみる。
「あ～ん！　やっぱりぃ！」
案の定、バッグの中の食べ物は完全に腐ってしまっていた。カレーライスもりんごもすべてイヤな色になって異臭を放っている。
「うぇ～～ん、どうしよう……」
「ぐぐ～」
しゃがみこんで嘆くアルルの背中を、カーバンクルがポンポンと叩く。
「なぁにカーくん、慰めてくれるの？」
「ぐっぐぐー！」
「え？　お腹空いた？　こんなときにナニいってんの！　カレーライスがみんな、こんなになっちゃったんだよ⁉」
とアルルはくさされカレーライスをカーバンクルの前に差し出す。そのカレーは茶色ではなく

紫色になっており、いかにもマズそうだった。マジで毒入ってますというカンジ。
「ぐー！」
「ああっ！　カーくん！」
しかしカーバンクルは、見た目などものともせずにくされカレーをペロリ。その途端、
「ぐげぇ〜〜っ……！」
カーバンクルは、青い顔でいま食べたくされカレーを吐き出してしまう。
「だからいったのに」
「ぐぅ〜……」
完全に腹痛を起こし、カーバンクルはゲッソリ。
「困ったなぁ……。食べ物がないと先に進めないよ」
それは、カーバンクルがあまりにも食いしん坊だからである。
「どうしよう。出なおすしかないかなぁ……」
〝ワンダージャングル〟序盤のこの状態で、それはあまりにも哀しい。
そのとき！
『わはははははははははははははははははははははははははは……!!』
突然、奇妙な高笑いがフロア中を満たした。

『少女よ、諦めるのはまだはやいぞ！』
「誰⁉」
アルルは周りを見渡すが、声の主らしき者の姿は見当たらない。どうやら、どこかからフロア全体に響くように話しているらしかった。
『私の名前はマスク・ド・サタン！　困ったときに即参上‼』
「あー知ってる！」
『ナニ⁉　本当か？』
「うん、ルルーがいってた。サタンの格好した変態野郎だって」
『うぬぅっ‼　つくづくあの娘は……！　何度も助けた恩を忘れおってからに……！』
「ルルーのことはいいからさ、ボクになんの用？」
『おっと、忘れるところだった。キミは〝風化のステッキ〟を持っているか？』
「うん、持ってるよ。ほら」
とアルルは、バッグの中から奇妙にねじくれた棒を取り出した。
「これがどうしたの？」
「ぐー？」
『うぉう！　か、カーくん……★』



「カーくん？」
『いやその……。とにかく！　そのステッキがどんな効果を発揮するか知っているかね？』
「知ってる。アイテムを文字通り風化させちゃうんでしょ？　水ものは〝ただの水〟になっちゃうし、草は〝ただの草〟になっちゃうし、指輪やお守りだって〝ただ〟になっちゃうんだ」
『その通り』
「あんまり役に立たないよね。早くもものショップで売っちゃおうと思ってるんだ」
『ちっちっち、あまーい。ところがけっこう役に立つんだな』
「そうなの？」
『まずはダマされたと思って、くされカレーに使ってみたまえ』
「う、うん……」
半信半疑のまま、アルルはくされカレーライスの上でステッキを振った。
シャラ────ン……！
ステッキの軌跡が、光のつぶとなって紫色のカレーに降り注ぐ。すると、あれだけ毒々しかったカレーライスがみるみる生気を取り戻した。ほどなくして、普通の美味しそうなカレーライスになる。
『みーろ、いったとおりだろ？』
「ほ、ホントだ！　でもどうして？」

『そこのカラクリは私にもわからん。あえて理由を探すとすれば、これ以上悪くなりようのないものに、さらに風化させたことによって時空——というか効果が逆転してしまったと考えることもできる。……まぁとにかく、くされカレーがもとのカレーになるということは確かだ』
「そうだね。ありがとう、変態コスプレ仮面さん」
『だーかーらー！　私は変態ではないとゆーに！　ではアディオス・シェゾ・ウィグィィとやらじゃないんだから。まぁいい、少女よまた会おう！　ではアディオス・アミーゴ！』
高笑いとともに、やがてマスク・ド・サタンの声は消えていった。
「へへへ、いいこと教えてもらっちゃった★」
さっそく、アルルは腐った食べ物を元に戻していく。楽あれば苦あり、苦あれば楽あり。というか、アルルの冒険はいつも大騒ぎである……。

四 〝ワンダージャングル〟休憩所

——「へへ、魔導書タダでもらっちゃった★」

「ふぅ、ちょっち疲れたなぁ……」
ため息とともに、アルルは五階に到着した。
「あれ……？」
ふと見ると、大きな部屋の真ん中に座っている人影を発見。
「スケルトンTじゃない。どーしたの？　こんなところで」
「うむ、来たな」
座布団の上でひざを折っていたスケルトンTはいった。
「しかし残念なことに、今日はお前にお茶を飲ませてやれん」
「え〜〜〜っ!?　ちょっち楽しみにしてたのに……。疲れが取れるから」
「すまん。今日はなんだか忙しくて、ウッカリお茶をきらしてしまったのだ」
「そっかぁ……」
諦めたようにアルルはガックリと肩を落とした。しかしすぐに立ち直り、

「疲れてるけど、お茶がないんじゃしょうがないよね。じゃあ、やろうか」
と身構える。
「何をだ？」
素っ頓狂（すっとんきょう）な声でスケルトンTはいった。
「何、って……。戦うんでしょ？」
「お前とオレが、どうして戦わねばならんのだ？」
「だって、キミはここの中ボスなんでしょ？」
「オレはそんなことを話した覚えはないぞ。オレは〝わくわくコース〟のボスであって、ここのボスではない」
「え？　じゃ、じゃあ、どーしてここにいるの？」
「お前、以前に〝ぷよぷよダンジョン〟の三階を休憩所だとカン違いしたことがあったろう」
「う、うん」
「ここは、本当に休憩所なのだ」
「そーなの？」
「うむ。〝ワンダージャングル〟は合計で十五階もあるからな。途中で休憩させないと客がへバってしまうのだ。お前も疲れているだろう？」
「うん、ちょっと」

「ちなみに〝ホラーハウス〟も同じだ」
「へぇ〜、そうなんだ」
「あの黒い魔導師に聞かなかったのか？」
「黒い魔導師って……シェゾのこと？　休憩所があるなんていってなかったよ」
「まぁいい、ここが休憩所であることに変わりはないからな。ロクなもてなしはできんが、座布団にでも腰を降ろして身体を休めるがいい」
そういって、スケルトンTはアルルたちに座布団を勧める。
「ありがとう」
「ぐー！」
用意のいいことに、カーバンクル用のちっちゃな座布団もバッチリある。
ふたりはさっそくそれに座った。
「…………」
「…………」
しかし座ったはいいが、特に話すこともなく、アルルとスケルトンTは無言。
「…………」
「…………」
お茶でもあれば少しは口がなめらかになったかもしれないが、残念ながらお茶はない。

「…………」
「…………」
やがて、
「ぐー……」
座布団の上にひっくり返って、カーバンクルが寝入ってしまった。
「ふ〜む……」
ついに、しびれをきらしたかのようにスケルトンTが口を開いた。
「お茶がないと、こうも話しづらいとはな」
「そうだねぇ」
「何か、面白い話題はないのか？」
「っていわれても……、あ、そーだ！」
ポン！　とアルルは手を打つ。
「探偵さんたちと推理したんだけど、聞いてくれる？」
「ほう、それは面白そうだ」
「今のところ、犯人は通用口を使ってサタンに奇襲をかけたんじゃないか、っていうのが有力になっているんだよね」
「ふむふむ」

「んで、そういうのって、普通はスタッフしか使えないじゃない？　だから、キミを前にしてこういうのはナンだけど……」
「まぁ、スタッフが容疑者として有力というわけだな？」
「う、うん」
「オレがいうのもどうかとは思うが、その可能性は低いと思うぞ」
「どうして？」
「園長を殺して、メリットのあるヤツがいないからだ。給料ももらえなくなってしまうしな」
「サタンが死んじゃったのに、どうやってお給料をもらえるの？」
「え？　いや、その……、とにかく、スタッフにはわざわざ園長を殺してそういう状況に自らするような愚か者はいないってことだ」
「ふ〜ん……。でもさ、〝すっごい魔法のアイテム〟を狙って、っていうことは？」
「ああ、それはなおさらありえない」
「どうして？」
「園長は、スタッフを雇うときに〝すっごい魔法のアイテム〟に興味のないヤツらを集めたからだ。もちろんオレもあまり興味がない」
「そうなんだ」
「逆にいえば、お前さんやあの黒い魔導師、牛を連れた女格闘家、それにホウキ持った魔女に

は声がかからなかったのだといえるだろう」
「そうだねぇ。ボクやルルーならともかく、シェゾやウィッチならなんとかズルイこととしてアイテムを手に入れようとするかもしれないね」
「まぁ、そういうことだ」
「うん、わかった。これだけ聞ければいいや。スタッフに犯人がいないということで、容疑者がかなり絞れてくるだろうしね」
「あまり役に立てなくてすまんな。お茶もお前に飲ませてやれなくて、非常に残念だ」
「いいよいいよ、気にしないで。今度飲ませてね。じゃあ、ボクいくから」
アルルは立ち上がった。
「ちょっと待て、お前にこれをやろう」
と、スケルトンTは一冊の魔導書をアルルに差し出す。
「これは〝ばよえ〜んの魔導書〟だ。何かの役に立つだろう」
「ありがとう!!」
「がんばれよ」
「うん！」
アルルは元気にお礼をいい、まだ眠りこけているカーバンクルと魔導書をかかえて休憩所を後にした……。

五　モンスター増殖地獄

——「カーくん、ごめんね」

「ふふふ、来たのね」

「わぁ！」

九階に到着した途端に声をかけられ、アルルはビックリ。見ると背後に、金庫のような箱に乗っかった大きな金魚がいた。

「ふふふ、どうして驚くのね？」

大きな眼でアルルを上目づかいに見ながら、そいつはいう。

「そりゃビックリするよ！」

とアルル。

「後ろからイキナリ声をかけられたら誰だって」

「ふふふ、それはアタシだからなのね？」

「そんなコトないよ。声をかけたのが〝ふふふ〟さんじゃなくて、たとえばカーくんだってボ

クはビックリしたと思うよ」
とはいうものの、声をかけたのが本当に金魚商人〝ふふふ〟ではなくカーバンクルだったら、それほどビックリはしなかったかも、とアルルは思う。
「ふふふ、わかったのね」
だが、そんなアルルの思いとは裏腹に、ふふふは納得したようだ。
「ふふふ、脅かしたお詫びにいいこと教えるのね」
「いいこと？」
アルルが聞き返すと、ふふふは右手——正確にはヒレ——で前方を指した。
「ふふふ、このまままっすぐ行くと階段なのね」
「ホントに？」
「ふふふ、ウソはいわないのね」
「わかった、ありがとう」
「ふふふ、あともうひとつあるのね」
「どんな？」
「ふふふ、アタシを倒すとお金がたくさん手に入るのね」
「それはできないよ」
「ふふふ、どうしてなのね？」

「だってキミのほうから攻撃してきたワケじゃないし。ボクのほうが勝手にビックリしただけだもん」
「ふふふ、わかったのね」
「じゃあ、ボクはもう行くね。ビックリしたけど、いろいろありがとう」
「ふふふ、行くのね」
金魚商人の言葉に送られて、アルルは先に進んだ。狭い通路をしばらく進むと、小部屋らしきものが見えてくる。どうやらあそこに階段があるらしい。
しかし、事態はそう簡単にクリアさせてくれなかった。
アルルが小部屋に一歩脚を踏み入れた瞬間！
ボン！
ボン！
ボン！
と、煙とともに女王バチのモンスター〝クイーンビー〟が現れ、アルルの三方を取り囲んだ。
「え……？　なになになに……!?」
いったい何が起こったのかわからず、アルルがおたおたしている間に、クイーンビーたちはどんどん迫ってくる。
「お主、何者じゃ！」

「奇妙なヤッめ！」
「出会えい、クセ者じゃ！」
　クイーンビーのひとりが呼びかけると、兵隊バチのモンスター〝ソルジャービー〟が三匹ほどどこからともなく現れた。
「出会えい、クセ者じゃ！」
「出会えい、クセ者じゃ！」
　とほかのクイーンビーもソルジャービーを三匹ずつ召喚。九匹のソルジャービーと三匹のクイーンビーで、合計十二匹がアルルのまわりに群がり始める。
「あわわわわわわ……！」
　アルルは突然の出来事にどうしていいのかわからず、ただオロオロするのみ。さらに、まさに〝泣きっ面に蜂〟な状況がアルルを襲う。
「わんわんわん！」
「なになに？」
「どーしたの？」
　と、上半身が女のコで下半身が四足の獣であるスキュラの親分、〝キャプテンスキュラ〟が小部屋の奥のほうからやってきた。しかも、これまた三匹ほど。
「あー、侵入者だね!?」

キャプテンスキュラのひとりが、アルルを見とめていった。
「ここは通さないよ」
「みんな、いくわん！」
キャプテンスキュラのひとりが、なんと三匹のスキュラを召喚。残りのふたりがそれに倣う。
「げげげげげげげげげげげげげげげげげげげげげげげげげげげげ……!!」
結局、九匹のソルジャービーと三匹のクイーンビーと、九匹のスキュラと三匹のキャプテンスキュラが階段のある小部屋にひしめくことになった。
「戦じゃ戦じゃ！」
「かむわよぉ！」
「いざいざいざ！」
「がおがお〜！」
「苦しゅうない、近う寄れ」
と、うじゃうじゃとあふれるモンスターたちが、口々にアルルを威嚇する。
「あわわわわ……！」
さしものアルルもこれにはうっかり手を出せず、どうしようかとうろたえるしかない。こんな状態では〝多勢に無勢〟という言葉さえ可愛く聞こえる。
しかし、この状況をなんとかしなければ、先に進むことはできない。

「……そうだ！」

不意に、アルルは妙案が浮かんだ。まさに〝窮すれば通ず〟である。

「…………」

アルルは、大きな鼻ちょうちんをふくらませて眠りこけているカーバンクルを、そっと床に置いた。

ダダッ！

そして、何を思ったかもと来た方向に突然ダッシュ！

「おのれ、逃げるか⁉」

「仲間を置いてったぞ！」

「うぬ、なんと卑怯(ひきょう)な！」

モンスターたちはアルルの行動に、口々に非難を浴びせた。それでようやく思いなおしたか、アルルは少し離れた地点でストップ。

そしてクルリと振り返り、

「ボクは逃げも隠れもしないよ。ましてやカーくんを見捨てたりするもんか」

シュォォォォォォォォォォ……‼

いいながら、アルルは構えた両手に魔力を集中し始める。

「一応、相談があるんだけど」

ちに戦う意志がないんなら、ここからどいて欲しいんだ」
「ボクは自分から手荒なマネをするのはイヤだけど、先の階に進みたい。だから、もしキミた
アルルの言葉に、クイーンビーのひとりが応える。
「なんじゃ？　いうてみい」

「えちごや〜、そちもワルよのぅ」
　とクイーンビー。
「じゃが、それはできぬ相談じゃな」
「あたしたちは、キミを先に進ませないためにいるんだもんね」
　キャプテンスキュラもいう。
「どうしてもっていうんなら、やっぱりあたしたちを倒すしかないよ」
「しかし、我らを相手に勝てるかな……？」
　モンスターたちは総勢二十四人、それに対してアルルはひとり。
　しかし、アルルはいい放った。
「勝てるよ」
「なんと!?」
「そのためにボクは準備をしたんだ。いま、それを見せてあげるよ」
「その意気やよし！　みごと我らを倒してみせい!!」

モンスターたちが、まだ眠っているカーバンクルを超えて、アルルに肉薄する。
しかしそれより早く、アルルは凝縮した魔力を解き放った。

「ヘブンレイ!!」

シュォォォォォォォッ……!!

アルルの発した光の球は、モンスターたちには命中せず、次々とすり抜けていく。そして、あろうことかカーバンクルに大命中！

「どこを狙(ねら)っている！」
「仲間に当たっちゃったよ！」
キャプテンスキュラたちはあざ笑う。
しかしその瞬間、

ズドドドドドドドドドドォンッ!!

カーバンクルに命中したヘブンレイの聖なるエネルギーが大爆発！
「りふじんなぁ〜りぃ〜っ……!!」
「きゃいんきゃいんきゃい〜〜〜〜んっ!!」
総勢二十四匹のモンスターは爆発に巻き込まれ、一気に〝ばたんきゅ〜〟。

「ふぅ……」
ビックリ大ピンチが去り、アルルは大きく息をついた。
それをきっかけに、
「ぐー……？」
とカーバンクルがようやく起きあがる。
「おはよ、カーくん」
「ぐー！」
なんにも知らずに、カーバンクルは元気に飛び上がってアルルの肩に乗る。
「カーくん、だいじょぶだった？」
「ぐー？」
なんのこと？　とばかりにカーバンクルは首をかしげた。その拍子に、彼（カーバンクルの本当の性別は不確かではあるが）の額の宝石がキラリと光る。
アルルの作戦は、その額の宝石〝ルベル・クラク〟と、光系攻撃呪文（じゅもん）ヘブンレイの特徴を組み合わせたものだった。ルベル・クラクが額に埋めこまれている限り、カーバンクルは魔法によるダメージを絶対に受けない。そして、ヘブンレイは光球が命中した地点を中心に大爆発を起こす。
つまり、ヘブンレイをカーバンクルに命中させれば、彼の周りに集まった敵を一気に〝ばた

んきゅ～〟させることが可能だというワケである。アルルはヘブンレイを覚えたときにそのコンボを考えつき、それを実行したのであった。

「行こうか、カーくん」

「ぐー！」

そしてふたりは、階段を上った……。

六　アウルベア、怒りの鉄拳！

——「って、ヤツアタリされましても……」

「オラァッ!!」

ズズゥンッ！

「オラオラァッ!!」

ズシィンッ！

「オラオラオラオラァッ!!」

ドゴォンッ！

「…………」

いよいよ最終の十五階にて繰り広げられている光景を目の当たりにし、アルルは呆然。

「オラァッ!!」

ズシィンッ！

巨大クマの身体をもったフクロウ頭の目つきの悪いモンスター、〝アウルベア〟がひとりで

大暴れしているのである。

「オラオラァッ!!」

ドッゴォンッ!

どうやら彼が〝ワンダージャングル〟のボスのようだが、アルルより先に来た姿の見えない挑戦者と戦っているのだろうか……?

「オラオラオラァッ!!」

ズズゥンッ!

しばし観察すると、どうやらそうでないらしいことがわかった。アウルベアはさっきから、壁を蹴(け)ったり叩(たた)いたり、さらには体当たりをしてみたり、床を踏みつけたりしていた。その姿はまるで、「牢屋(ろうや)から出せ」と暴れる囚人のようだ。

「…………」

アウルベアの凶相が、怒りにねじくれてさらに怖くなっている。アルルは、そんなアウルベアに声をかけるのが非常にためらわれた。怒りの矛先が即座にこっちへ向けられるような気がしたからだ。

しかし、このままじっとしているだけでは、事態は好転しない。これは、父や師匠からずっと教えられてきたことだ。

「…………」

ゴクリ……！
アルルはつばを大きく飲みこみ、そして意を決した。
「あ、あの～……」
「ん～～～～～～～……⁉」
アウルベアは、恐ろしげな表情で、ゆっくりとアルルを睨(にら)んだ。そのゆっくりとした加減が、さらに恐怖をあおる。
「なんだぁ⁉　オレ様のジャマをするな！」
「お取り込み中だったらゴメンなさい。でもボク、一応はお客なんですケド……」
「客ぅ⁉　園長が死んだってぇのに客もクソもあるもんか！」
「で、でもでも、遊園地はちゃんと営業してるし、他のアトラクションだって……。それに、ボクは探偵さんたちといっしょにサタンを殺した犯人をつかまえないと……！」
「おう、そうだったな」
ようやくアウルベアは少しばかり落ちつきを取り戻した。
「で、オレ様とやろうってワケだな？」
「いやまぁ、戦わないですむんならそれでもいいんだケド、でも戦って勝たないとアトラクションはクリアできないんでしょ？」

「そりゃそうだな、それがルールだ」

「でもその前に、いろいろ聞きたいことがあるんだ」

「オレ様の頼みを聞いてくれたら、なんでも答えてやるぜ」

「どんなコト？」

「それは……」

アウルベアの鋭い眼がギラリと光る。

「オレ様のサンドバッグになることだ!!」

「サンドバッグって、あの拳闘（ボクシング）の……？」

「他にどんなサンドバッグがある？」

「そ、それはつまり、キミが攻撃してもボクは反撃しちゃいけない、ってコトだよね？」

「ああ」

「それじゃぁ、ボクはどうなるの……？」

「まぁ〝ばたんきゅ〜〟するのは間違いないわな。オレ様はいま気が立ってるから、よくても入院、悪くて墓の中っつーところか」

「ええっ!?　そ、それはちょっと……」

「なんでだよ、いいじゃねぇか。それとも情報が欲しくねぇのか？」

「で、でも……」

「ニエきらねぇ娘っこだなぁ、オレ様をこれ以上イライラさせんじゃねぇよ。ただでさえムカついてんのによ」
「どうして？」
「こっから出られねぇからだよ！」
つまり、囚人のようなアウルベアの暴れようは、かなりマジだったということである。
「どうして出られないの？」
「ンなことわかってたら暴れてねぇよ」
「っていうか、どうして出たいの？」
「ンなもん決まってるじゃねぇか。オレ様の家に帰るんだよ。園長が死んだってぇのに、いつまでも働いてられるわけねぇだろ！　いったい、誰がオレ様の給料を払うってんだ？」
「それもそうだよね。でも、みんなちゃんと働いてるよ？」
「ヒトはヒト、オレ様はオレ様だ。オレ様は雇い主が死んだってぇのに働けるほどお人よしじゃねぇ」
「でもさ、だったらどうして出られないの？」
「知るかよ！　前は普通に出入りできてたんだが、園長が死んだ後に、荷物を取りに来たらこのザマだ」
「魔法かなにかかなぁ……」

「わからん。オマケに、頭ん中で『働け働け』って誰かがしきりにいいやがる。それが余計にムカつくんだよ！」
「誰かって、誰が？」
「園長の声に似てたような気もするが、そうでないような気もする。なにしろ園長は死んじまったしな」
「そうだね……」
「と、いうわけで……!!」
ギラリ！
再びアウルベアの眼が妖しく光った。
「オレ様のイライラがわかったか!?」
「う、うん……」
「だったら、おとなしくサンドバッグになりな!!」
グオッ！
アウルベアは丸太のような右手を大きく持ち上げ、カミソリのような爪でアルルを切り裂かんと振り下ろす。
「わぁっ！」

すんでのところで、アルルは爪の一撃をかわした。耳のすぐわきで、空気の切り裂かれるイヤな音がする。
「ちょ、ちょっと待ってよ！　ボクやっぱりサンドバッグになるのイヤだよ！　まだ死にたくないし……！」
「だったら反撃でもなんでも勝手にしろ！　オレ様に勝てたら、質問にでもなんでも答えてやらあ！」
　シュバッ！
　いいながら、アウルベアは再び攻撃。
「イタイっ！」
　今度はアルルもよけそこね、細い二の腕から紅いすじが滴り落ちる。
「やったなぁ！　ファイヤー!!」
　ゴォォォッ！
　お返しとばかりにアルルは火の玉を撃ち出すが、
「あ、あれ？」
　気がついたときにはすでに、アウルベアはアルルの眼の前から消え去っていた。行き場を失ったファイヤーは、壁に当たって霧散する。
「甘いアマイ、そんなのはすでに計算済みだぜ」

突然、背後から声がした。見ると、すぐ後ろにアウルベアが立っている。
「オレ様が、心を読めるのを知らないのか？」
「そ、そうだった……！」
アウルベアの言葉で、アルルはさそりまんからの忠告を思い出した。
「ひとつだけ、いいことを教えてやる。オレ様は親切だなぁ」
「いいことって？」
「オレ様は、自慢じゃないがすべての攻撃が弱点だ。弱いファイヤーの呪文(じゅもん)でも、当たればかなりイタイ」
「当たれば、ね」
アルルは、たいして喜びもなくいった。いくらさそりまんに助言をもらったり、アウルベアに弱点を教えてもらっても、攻撃を命中させる方法がわからなければ、なんの意味もない。
「見事オレ様に攻撃を当ててみな！」
グォッ！
アウルベアは自慢の爪でまた攻撃を仕掛けるが、アルルは間一髪でそれを回避。
「オラオラオラッ！　逃げてるだけでは勝てんぞ！」
いいながら、矢継ぎ早にアウルベアは攻撃を続ける。アルルは必死で回避しつづけるが、ひとつ、またひとつと、腕や太ももといった肌があらわな部分に紅い筋が増えて行く。肩のアー

マーや、マントも少しずつ切り裂かれていった。

「…………」

しかしアルルは攻撃しない。それは、アウルベアへの対処方法をひたすら考え続けているからだ。

「オラオラッ！」

シュバッ！

「……ッ!!」

アルルの腕に、またひとつキズができた。今度のは結構深く、激痛にアルルは顔をゆがめる。だがそれでも、考えるのを止めなかった。

いまのところ、アルルが覚えている呪文は、攻撃系の他は〝ヒーリング〟などの回復系、〝シールド〟などの防御系、〝スピードアップ〟などの補助系、そして五階で覚えた〝ばよえ〜ん〟しかない。

この状態で考えうる基本的な作戦といえば、シールドをかけまくって防御力をとにかくアップさせ、ヒーリングで回復しまくりながら当たるまで攻撃しまくるしかない。ある程度スピードもアップさせておくと、少しは楽になるかもしれない。しかしこの作戦では魔力を大量に消費することになるので、〝魔導酒〟での魔力回復も随時やっていかなければならない。

「……よし!!」

爪攻撃の嵐の中で意を決し、

「ばよえ〜ん‼」

アルルは呪文を唱えた。

シュバァァァァァァァァァァァッ……‼

呪文と同時に、淡い光で形作られた色とりどりの花が、アルルとアウルベアを取り巻く空間に次々と咲いていく。この、人工の花火では決して創ることの出来ない光のショーによって、見るものを感動につつみこむのが、〝ばよえ〜ん〟の効果だった。アウルベアにも確実に効果があるか確証はなかったが、チマチマ長期戦を演じるよりも、そちらにアルルは賭(か)けたのだ。

「おおっ……！」

アウルベアは〝ばよえ〜ん〟の創り出した光のショーに眼を奪われ、攻撃の手を止めた。アルルが賭けに勝った瞬間である。

「いまだ！　ヘブンレイ‼」

ドッゴォンッ！

「うげぇっ！」

アルルの攻撃呪文を、感動中のアウルベアはまともに食らってしまった。

「み、見事……！　感動的な戦いだったぜ……」

アウルベアは〝ばたんきゅ〜〟。そして彼の懐から、きれいな碧色(みどりいろ)の宝珠(オーブ)が転げ落ちた……。

七　そして対策本部

――「あ――っ！　やっぱり！」

「……以上で、ボクの報告は終わりです」

と、アルルは締めくくった。

探偵の待つ〝緊急対策本部〟へと戻り、〝ワンダージャングル〟での一部始終を報告したのである。スケルトンTの話、アウルベアの苛立ち（いらだち）などすべてを告げ、そして〝緑のオーブ〟も探偵に渡した。そのとき、シェゾが苦々しい顔をしたことにアルルは気づかない。探偵も、シェゾを追及することはなかった。

『ふ～む……』

探偵はいつものとおり、パイプをくゆらせながらうめくようにつぶやいた。

『結局、犯人の手がかりに直接つながるものは見つからなかったか……』

「ご、ごめんなさい……」

『いや、アルルくんのせいではない。私も助手も、ルルーくんもシェゾくんも、あちこち調べていたのだが、有力な手がかりは見つけられなかったのだからな』

「ここの職員に犯人がいないということがわかっただけでも、かなりの収穫ですぞ」

助け舟を出すように、老人助手がいう。

『そうだな。少なくとも容疑者を絞る条件にはなる。しかし問題は、スタッフでなくて、かつ通用口を使える者が見つからないということだ』

「そのテの通用口は、厳重に戸締りがしてあるのが普通ですぞ」

「でもウィッチなら、なんとかしちゃいそうだよね」

「あんな小娘ごときに、サタン様がやられるはずがないわ！」

アルルの言葉に、ルルーが食って掛かった。

『そこが、もうひとつの問題でもある』

と探偵。

『確かにこれまでの情報から、〝遊園地のスタッフではなく〟〝通用口を使うことのできる、あるいはできた〟〝奇襲とはいえサタンを殺すほどの実力の持ち主〟という犯人像が浮かび上がった。しかし、そのような者がそうそういるのだろうか……？』

「はなはだ疑問ですぞ」

「案外、アウルベアが犯人なんじゃないの？　だって、サタン様が死んだ直後に逃げようとしたんでしょ？　アトラクションから出られなくなったのは、きっとサタン様の怨念よ」

「でも、スタッフに犯人はいないっていうスケルトンTの言葉は信じていいと思う」

今度はルルーの推理に、アルルが反論する。

「アウルベアも〝すっごい魔法のアイテム〟には興味なさそうだったし、ずっとお給料のコトを心配してたし」

『動機がない、ということだな』

「そうそう。それにルルー、ボクにも倒せたアウルベアに、サタンがやられると思う？」

「う……、それはそうだけど……」

『まぁ、ここでいい争ってもしょうがない』

探偵は、仲裁するようにいった。

『とにかく、大きな壁にぶつかってしまったのには変わりない……』

「いや、そうでもないぞ」

それまで考え込むように押し黙っていたシェゾが、探偵のセリフに割りこんだ。

『どういうことかね？　シェゾくん』

「ひとつだけ可能性がある。このクソ忌々しい事件を解決に導く可能性が、な」

『その、可能性とは？』

「それは、サタンが生きている、という可能性だ」

「え――――っ!!」

シェゾの大胆な推理に、アルルもルルーもいっせいに驚いた。
「あなた現場を見てなかったの!?」
「サタンは、ボクらが着いたときにはもう死んじゃってたんだよ!?」
「そう見せかけるやり方など、いくらでもあるだろう」
アルルとルルーの反論を、シェゾは一蹴(いっしゅう)。
「よくよく思い出して見れば、気になることがひとつあった。オレたちが〝わくわくコース〟をクリアしたときに、サタンの放送があっただろう」
「そーいわれて見れば……。あのときはサタンだって気がつかなかったけど……」
とアルル。
「あの時点で、サタンはオレたちがここに来たのを知っていたのではないか？　そして、ケレン味の強いサタンのこと、こんな茶番を仕掛けた、と」
「どうして、サタン様はそんなことをするの？　それこそ動機がないわ！」
嚙(か)みつくようにルルーはいった。
「動機ならサタンに聞くんだな。……とにかく、そう考えるといろいろ辻褄(つじつま)があう」
「遊園地がいつもどおりに営業してるとか？」
「その通り」
アルルの言葉に、シェゾはうなずいた。

「アトラクションの魔法的な仕掛けもキッチリ作動していたことも含めてな。アウルベアが出られなかったのも、おそらくそのせいだろう」

「なるほど」

「あと気にかかるのは、例のコスプレ野郎のことだ。お前たちも聞いたと思うが、あの声はあまりにもサタンに似すぎていないか？　姿をまったく見せないのも気に入らん」

「あんな変態とサタン様をいっしょにしないで！」

ルルーが吼(ほ)えた。

「以前に会ったことがあるけど、マスク・ド・サタンはサタン様とはまったくの別人よ！」

「そうか、キサマがそういうなら別人かもしれん。ならその問題はひとまず置いておくとして、この事件がサタンの狂言だと仮定したとき、もうひとつ辻褄のあうことがある」

「どんな？」

「それは、誰かによく似た探偵の、登場のタイミングのよさだ！」

ビシィッ！

シェゾはいいながら、パイプをくゆらせながらこれまでのやりとりを聞いていた探偵を指差した。

『さすがだね、シェゾくん……』

探偵は、ゆっくりと安楽椅子から立ちあがる。
『やはりキミが一番最初に気がついたか』
「ど、どーいうコト⁉」
『こういうことだよ、アルルくん』
バサァッ!!
探偵は、黒のコートを、鳥が羽ばたくように脱いだ。
「あ――――――っ!!」
その下から現れた姿に、アルルもルルーもビックリ。
「る、ルシファー先生!」
サタンにうりふたつの温和な美男に、アルルとルルーは口々にいった。
「やっぱり、そうだったんですわね」
『まぁ、そういうことだ』
ルシファーはニッコリ。氷のように鋭いサタンとは異なり、その笑顔は優しく暖かい。しかもその頭部には、双子の兄であるサタンのような立派な角はなかった。
「すると、助手っていうのは……？」
「申し訳ありませんぞ、ルルー様。お察しのとおりじいですぞ」

ルルーに近づき、じいがうやうやしく頭を下げる。

「どういうことなのだ？　ルシファー。すべてを話してもらおう」

とシェゾ。

『まず結論からいおう』

ルシファーは、椅子に座りなおして語り始めた。

『シェゾくんの推察どおり、これはすべてサタンが仕組んだことだ。私やじいはその端役に過ぎない』

「サタンはいったいなにを企んでるのだ？」

『そう怖い顔をするな、シェゾくん。別にキミたちをどうこうしようというわけではない。ちょっとしたテストなのだ。今度この〝わくぷよランド〟で開く予定のイベントのな』

「イベント？」

アルルが声を上げた。

『そう。〝ぷよぷよミステリーツアー〟というイベントを、サタンは考えたのだ。これは、普通はできないチームでのアトラクション挑戦を可能にするものだ。キミたちはそのテストケースにうってつけだったというわけだな』

「どうしてサタン様がそんなことを……？」

『それは簡単だよ、ルルーくん。〝わくぷよランド〟の売上を伸ばすためさ』

「ねぇねぇ、ルシファー先生――やっぱ、こっちのほうが落ちつくね」
「は、はぁ……」
『なにかな？　アルルくん』
「で、ボクたちはテストに合格したの？」
『一応、サタンが生きている可能性にチームの誰かが気づいた時点でミステリーの部分はクリアということになっている。つまりキミたちは、第一段階はひとまず合格したことになる』
「じゃあ、第二段階ってどういうことをするの？」
『もちろん、サタンと戦うのさ。ミステリー部分をクリアしたら、チーム全員でサタンと戦ってもいいことになっている。もちろん普通はいけないんだがね。……まぁつまり、〝すっごい魔法のアイテム〟が手に入れられる確率がグッと上がるわけだ』
「もしサタンに勝ってしまったら、アイテムはどうなる？」
とシェゾ。
『もちろん、参加チームに贈呈されることになる。もっともキミたちの場合、誰が受け取るかで大モメするんだろうな』
「ちょ、ちょっと待ってルシファー先生」
不意に、ルルーが割って入った。
「つまりサタン様は生きていらっしゃる、ということですよね⁉」

『うむ。〝ぷよぷよダンジョン〟の十階で、キミたちを待っているはずだ』
「ミノタウロス、行くわよ！」
「ぶ、ぶもー！」
いうが早いか、ルルーは一目散に駆け出した。
「ま、待ってよ！　ルルーっ　ルルーったら！」
アルル（とカーバンクル）、そしてシェゾも後に続いた……。

八　サタンと対決！

――「え〜〜っ!?　うっそぉ!?」

探偵――ルシファーの言葉どおり、〝ぷよぷよダンジョン〟十階に彼は立っていた。
氷のような冷たい鋭さを感じさせる端整な顔立ちに、腰まである美しいエメラルド色の長髪、そして両の側頭部あたりから伸びて魔界の貴族であることを示す二本の立派な角。
ルシファーの双子の兄、〝魔界の貴公子〟、ルルーの想い人、そして〝わくわくぷよぷよランド〟園長――サタンである。

「サタン様ぁ!!」

その姿を見とめた途端、ルルーはサタンに駆け寄ろうとした。しかし、
『待て！』
サタンは右手でそれを制止。
『ここから先は、見事オレを倒してからにしろ』
「さ、サタン様……」

「このような茶番、これで終わりにさせてもらうぞ！」
チャキッ！
しりごみするルルーをよそに、シェゾが闇の剣を構えた。
「ぐぐー！」
そして、なぜかカーバンクルが元気に飛び上がる。
「……あれ？」
ふと、アルルはいぶかしんだ。なぜなら、このような場面でカーバンクルが何かをすると、いつものサタンなら『うぉう！　カーくん★』というような反応を示すからだ。
——今回はボクたちをいっぺんに相手するから気合いが違うのかな？
そう考えて、アルルはそれを追及するのをやめた。
『では行くぞ！』
いうが早いか、サタンはいきなり攻撃呪文を唱える。
『カイザージャッジメント!!』
ガドドドドォォオンンッ!!
「うぉぉぉっ！」
「きゃあぁっ！」

「わぁぁぁっ！」
魔界の者にしか使えない超強力呪文の引き起こした大爆発に巻きこまれ、アルルたちはいきなり大ダメージを食らった。
「いきなりそいつできやがるか……！」
すでにもうフラフラになったシェゾがいった。口の中を切ったらしく、紅い液体をペッと吐き捨てる。
「それならこっちはこれだ!! イクリプス！」
シェゾが呪文を唱えると、どこからともなく現れた真っ黒な霧が、まるで月食のようにシェゾを覆い隠した。
「サタン様！　あたくしも全力でいかせていただきます！」
とルルー。
「はぁっ！　心頭滅却!!」
気合い一閃（いっせん）、シェゾとは逆に、ルルーは光のオーラで包まれた。
「ルルー！　右をやれ！　オレは左だ！」
「りょーかい！」
シェゾの指示より早く、ルルーはサタンに向かって駆け出す。
『ぬぅっ！　ちょこざいな！　ダークライトニング!!』

ピシャア――――――ンッ！

サタンの指先から発した黒い稲妻が、ルルーに襲いかかる。しかし、

バッシィ――――ンッ!!

稲妻がルルーのオーラに触れた瞬間、それは霧散した。ルルーには毛ほどのダメージもない。

『うぬっ!?』

「驚いているヒマはないぞ！」

と、サタンのスキをついてシェゾが闇の剣を振り下ろす。

ガッキィ――――――ンッ!!

「ナニィ!?」

今度はシェゾが驚く番だった。なんと闇の剣を、サタンは左手で受けとめてしまったのだ。

『そんなオモチャでオレが斬れるか！　サタンブレイド!!』

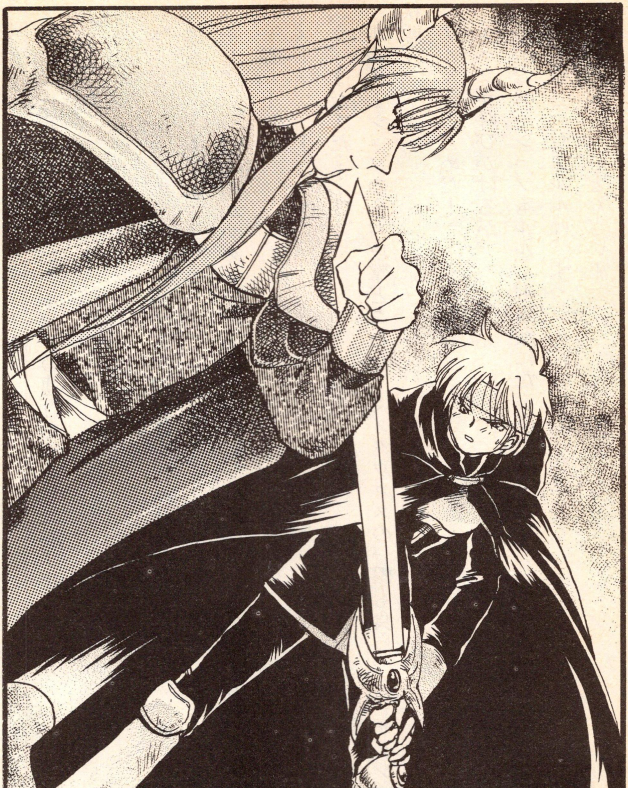
返す刀で、光のオーラに包まれた右の手刀をシェゾに振り下ろす。

バッシィ――――ンッ!!

しかしこれは、シェゾにまとわりついた黒い霧によって阻まれてしまった。

『くっ……！』

「サタン様、多勢に無勢は不本意ですが、いかせていただきます！　女王乱舞!!」



ズドドドドドドドドドドド……！
ルルーは容赦のないパンチキックの連打をサタンに浴びせる。
「食らえ！　サンダーストーム!!」
バシバシバシバシッ!!
さらに、シェゾの放った雷がサタンの身体を包み込んだ。
「ぶも――――っ!!」
そしていつのまにかサタンの背後に回っていたミノタウロスが躍り出る。
「一撃っ!!」
ズドォンッ！
『ま、まだまだ……!!』
ルルーとシェゾの全力攻撃どころか、ミノタウロスの一撃も食らって、サタンはもはや瀕死(ひんし)状態。
「アルル、とどめだ！」
シェゾが呼びかけるが、
「いいなぁ、シェゾもルルーも無敵になる技を持ってて……」
取り残されたアルルは、すっかりイジケていた。
「いいからさっさとなさい！」

「わ、わかったよぉ。ヘブンレイ!……の前に、カーくん、これ食べといて」
ルルーの一喝にアルルは呪文を唱えようとするが、不意にやめてカーバンクルの口に〝激辛(げきから)カレーライス〟を放り込む。
「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」
その途端、カーバンクルは眼を白黒させて飛び上がる。
「よーし行くぞ!　ヘブンレイ!!」
「ぐ――――っ!!」
ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドォンッ!!
ヘブンレイのエネルギーと、〝激辛カレーライス〟のショックでカーバンクルの額の宝石から発射された光線が一条の光となって、サタンに襲いかかる!
ドッカァ――――ンッ!
『がはぁっ!』
さしものサタンもこれには堪(こら)えきれず、喀血(かっけつ)してひざを折った。
「サタン様!」
ルルーは、倒れかけるサタンの身体をなんとか支えた。
「サタン様!　しっかりして!」

『み、見事だ……！』

ザザァッ……。

しかしルルーの励ましも虚しく、サタンはルルーの腕の中で灰となり、崩れ去った。

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

ルルーは気が触れたように大絶叫をあげた。愛する人と戦うどころか、塵に変えてしまったのである。

「え？　え？　え……？」

アルルも突然の展開に声も出ず、ただキョロキョロうろうろするのみ。

「………」

ただひとり、シェゾだけが冷静だった。確かにサタンが塵と化したのは驚きに値するが、彼の心の中にはもはや〝すっごい魔法のアイテム〟のことしかない。

「ここか……？」

泣き崩れるルルー、呆然とするアルルを尻目に、シェゾはフロアの奥にある扉の前に立った。

ここに〝すっごい魔法のアイテム〟がある！　と信じて。

ギギギギギギギ……！

シェゾは、ゆっくりと扉を開けた。

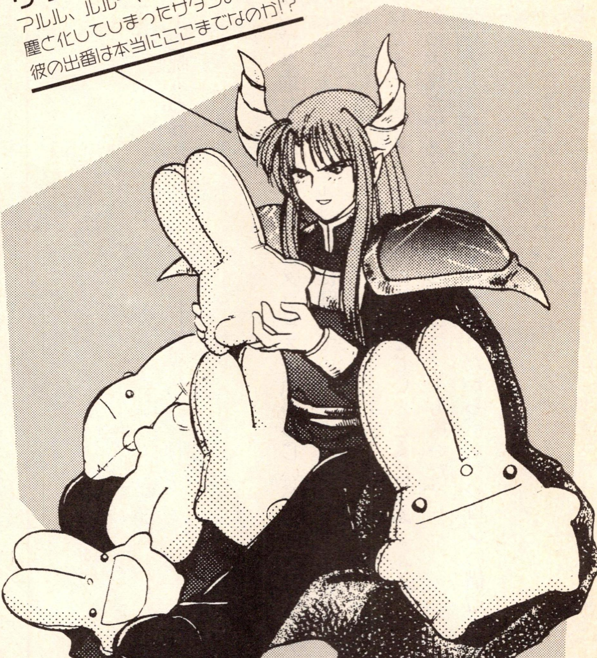
「……なに⁉」
しかしその先にあったのは、下に続く階段のみだった……。

エピローグ

“実はまだまだ終わらない”

サタン

アルル、ルルー、シェゾの攻撃に
塵と化してしまったサタン。
彼の出番は本当にここまでなのか!?



「どういうことだ……!?」
シェゾはルシファーを睨みつけた。
『わからん』
ルシファーはいう。
ふたりの背後では、泣き崩れるルルーをミノタウロスと執事のじいが必死で慰め、アルルはただひたすらに呆然とし、カーバンクルは呑気に踊っていた。
『正直いって、私も驚いている』
その言葉に嘘偽りはなかった。
十階に下りてみたらこの大騒ぎである。そろそろ頃合だろうとじいとともに〝ぷよぷよダンジョン〟
『私はイベントの手伝いとして探偵役を引き受けただけだから、ダンジョンの構造まではさすがに知らん』
さしものルシファーも驚いた。
「すると、サタンのヤツがまだなにか企んでいる、ということか?」
『可能性はある。どちらにせよ、この状況から推測するに、サタンはまだ生きている』

「……!?」
その言葉に速攻で反応したのは、やはりルルーだった。
「ルシファー先生！　本当!?　ホントにサタン様は大丈夫なの!?」
と、ルルーは涙目でルシファーにすがりつく。
『おそらく、さっきキミたちが倒したのは、魔法で動く自動人形だ』
「もしかすると、だからカーくんに反応しなかったのかな!?」
アルルも正気に戻り、いった。
『一応、ルルーくんのためにいっておくが、魔界の者はそう簡単には死なん。完全に不死身というわけではないが、人間でいうところの〝死〟が、そのまま死を意味しないのだよ。ましてや死ぬときに塵になったりはしない』
「よ、よかったぁ……」
ルルーは安堵のあまり、再び力なくその場にくずおれてしまう。
「とにかく、続きがあるということは、〝すっごい魔法のアイテム〟はこの先に必ずあるということだな？」
そんなルルーを尻目に、シェゾがいった。
「そーいえば」

とアルル。

「〝緑のオーブ〟はどこで使うの？　やっぱりこの先？」

『この時点でオーブの謎が解けていないとすると、〝すっごい魔法のアイテム〟を入手するのに不可欠なものなのだろう。ここから先は、もはや私では助力できない。自分たちで協力するなり、競争するなりしてがんばってくれ』

「ルシファー先生、その前に例の攻略本見せて」

『どうしてだ？　アルルくん』

「ここから先のことが載ってないか確かめるんだ」

『なるほど』

ルシファーは、懐から本を取り出してアルルに手渡そうとする。しかし、その間にシェゾが割って入った。

「ふざけるな！　これはオレが買ったんだぞ！」

「いーじゃない、ちょっとぐらい！　ちゃんと後で返すから！」

「ちょっと！　あたくしにも見せなさいよ！」

さらにルルーもまじり、かくして攻略本争奪戦が始まった。「返せ！」「見せろ！」「イヤだ！」「ざけんな！」の嵐である。

「…………」

『…………』

じいもルシファーも、ミノタウロスもそのあまりの醜さに声も出ない。

「ぐっぐぐっぐぐー！」

ただひとり（というか一匹）、カーバンクルだけが喧騒を尻目に踊っていた……。

あとがき

魔導物語はとぉっても楽し、

みんなでぺらぺらしゃべりますぅ〜。

あっそ――れ★

……そろそろ、合いの手のネタがつきてきたな。

まぁ、それはともかく！　っつーことで『超★魔導物語②　でぃてくしょん・あっと・ぷよぷよダンジョン!!』の登場でございますよ。

いやー、今回は早かったですね。前巻『超★魔導物語　うぇるかむ・とぅ・ぷよぷよダンジョン!!（しっかしまぁ、我ながら長いタイトルですねぇ。相変わらず）』がみなさんのお手元に届いてから、わずか半月ていどですよ。

半月!?

いやスイマセン、半年の間違いでした。あービックリした。

う〜む、いっつもこれくらいのペースで書けるといいんですけどねぇ。とはいうものの、他

の仕事とスケジュールが重なったりなんかもありまして、角川書店の担当さんには締切ブッチで相変わらずご迷惑をおかけしております。ずびばぜん。
さてさて、今回はいわゆるミステリ小説でいうところの〝解答編〟です。前巻でサタン様が大変なコトになり、今回でアルルたちが一丸となってその解決をするってカンジですな。といっても、ゼンゼンミステリっぽくなってないところがミソ。
……おっかしいなぁ、プロット（下書き）では本格ミステリだったんだけどなぁ。どこでどう間違えたんだろ……？　まぁいいや、面白ければ――というか、読者のみなさんが面白いと思ってくれれば。思ってください。
しかーし！　前巻でも述べたとおり、今回のシリーズも三巻あります。なので、さらにまだ続きがあるわけで、物語はまだまだ予断を許しません。よぉーし、今度こそバリバリの本格ミステリにするぞ！（ホントか!?）
ボクのオリジナル小説『クロックワーク』シリーズの続きも書かなければならぬのですが、なるべく早いうちにお届けしますので、どうか気長にお待ちくださいな。
ところでですねー、いただいたお手紙（いつもありがとうございます。なかなかお返事書けなくてすいません）の中で、異常に多い質問がありますので、それにお答えしたいと思います。
それはですね、『新★魔導物語②　ルルーと愛の日々』と『新★魔導物語③　シェゾと悪の華』の時系列的関係のことです。両方持っている方は、ちょっち読み返してみてください。そ

れほど時間はかからないと思います（自虐的）。
まず『ルルーと〜』のほうで、ルルーはシェゾにヒドイ目にあわされます。しかし『ルルー』は夢オチでした。にもかかわらず、『シェゾと〜』でヒドイ目にあわされたことを彼女がシェゾにツッコミを入れるのはどーいうことか⁉ というご質問が多数寄せられました。とはいっても、ここで完全に解答を出してしまったら面白くないので、ヒントだけいいます。

『ルルーと〜』のラストシーン

これがヒントです。これを念頭においてもう一度じっくり読んで、答えを出してみてください。それをお手紙などで、激励の言葉とともに送っていただけるとベスト！ 見事的中したヒトには、なんか楽しいことがあるかもしれません。
とまぁそーいうワケで、あまりダラダラとやってもしょうがないので、次回もよろしくとお願いしつつ、最後に一言……。
ボクと久保田悠羅先生がデザインしたテーブルトークRPG『創聖記エルジェネシスII（ツヴァイ）』、ゲーム・フィールドから絶賛発売中!! 本屋さんではなく、ゲームショップで見つけてね★
……長ぇ。

一九九九年六月吉日　自宅にて

超★魔導物語 2

でぃてくしょん・あっと・ぷよぷよダンジョン!!

山本　剛

角川文庫　11115

©COMPILE／キャラクター©SEGA ENTERPRISES, LTD.

平成十一年八月一日　初版発行

発行者――角川歴彦

発行所――株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話　編集部(〇三)三二三八―八五五五

営業部(〇三)三二三八―八五二一

〒一〇二―八一七七

振替〇〇一三〇―九―一九五二〇八

印刷所――暁印刷　製本所――コオトブックライン

装幀者――杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社営業部受注センター読者係にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Tsuyoshi YAMAMOTO 1999　Printed in Japan

S 56-10　ISBN4-04-415610-7　C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

冒険、愛、友情、ファンタジー……。
無限に広がる、
夢と感動のノベル・ワールド！

スニーカー文庫
SNEAKER BUNKO

いつも「スニーカー文庫」を
ご愛読いただきありがとうございます。
今回の作品はいかがでしたか？
ぜひ、ご感想をお送りください。

〈ファンレターのあて先〉
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店 書籍編集部気付
「山本　剛先生」係

落ちこぼれクラスが大奮闘!
艦長・千夏は今日もがんばります!

藤宮千夏は琴丘高校軍属科の3年生。有名士官学校の入学を目指して学校所属の駆逐監「まくらざき」の艦長役としてがんばる日々。だけど、クラスメートのクルー達は奇人変人ばっかりで苦労の連続。千夏の未来は?!

第三回
学園小説
大賞
大賞受賞作

スニーカー文庫
SNEAKER BUNKO

第四回
スニーカー大賞
優秀賞
浜崎達也
イラストレーター
日野慎之助
トリスメギトス
光の神遺物(レリクス)
15世紀──。
ヴェネツィアを震撼させる壮大な魔術大戦!
若き魔術師ミカが、古代秘術を駆って
怖るべき陰謀に挑む!!
スニーカー文庫
SNEAKER BUNKO

第四回
スニーカー大賞
優秀賞
ある雪の日、
伝説が生まれた――。
ダンスインザウインド
翔竜伝説
竜を駆り、その速さを競う
ドラゴン・レースにかける
人々をさわやかなタッチで描く
ファンタジーの新境地。
岩佐まもる
イラスト・西村博之
スニーカー文庫